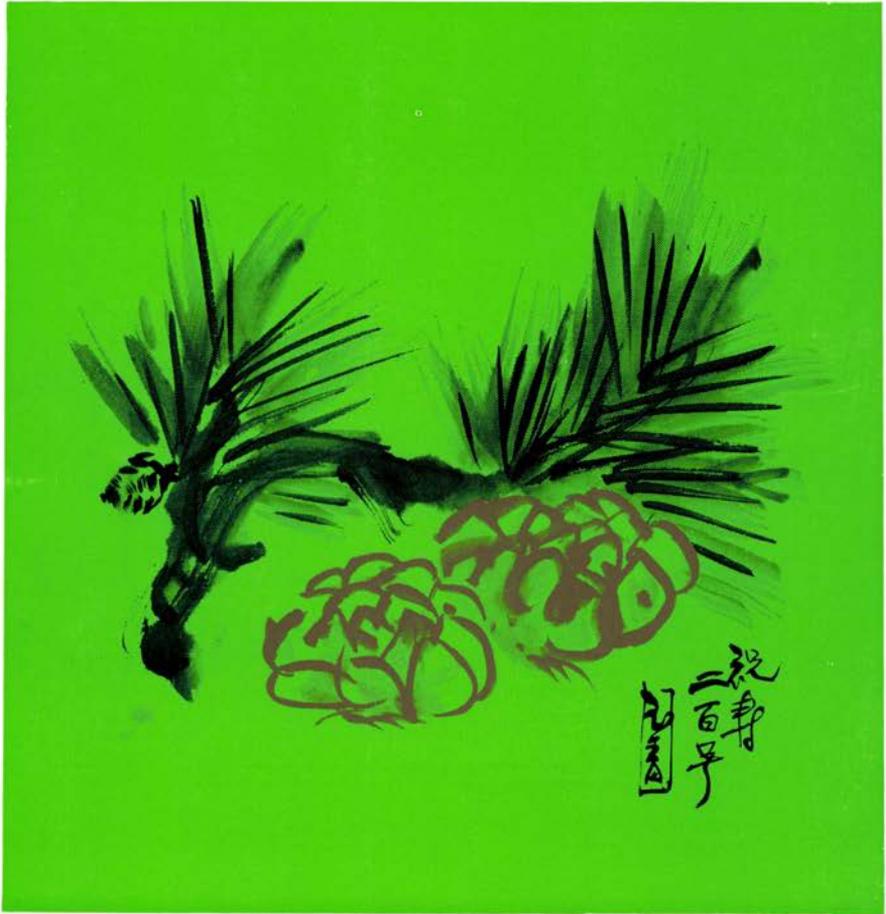


川柳塔

昭和五十七年四月二十五日印刷
昭和五十七年五月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷六六〇号



日川協加盟

No. 660

改題200号記念

五月号

黒川紫香の孫娘 宝塚歌劇団(月組)を退団
歌謡界にデビュー

美代かほり

美しい雨

岩谷時子 作詞 / いずみたく 作曲

いいわよサヨナラ

岩谷時子 作詞 / いずみたく 作曲



●お願い 有線放送にリクエストを!!

レコードは下記美代かほり後援会事務所に
ご注文下さい。

定価 (サイン入りカバー付送料共) ¥1,000

〒665 宝塚市中筋2丁目7-12(中西方)

TEL 0797-88-0456

川柳塔本社事務局でもお取次ぎ致します。

御 厚 礼

昭和五十七年四月四日は、川柳塔改題二〇〇号記念川柳大会の記念すべき日であった。花冷えの朝を迎えたが、昼からは大変暖かくなつた春光の一日であった。

窓外に六甲の山波が霞み、淀川の水の光る阪急グランドビル26Fの会場は二百八十五名の温かい心の柳人で満場立錐の余地のない盛況となつた。

来賓並に選者各位も遠くから御臨席を賜り柳友の皆様も早朝よりご出席下さつて、祝福の言葉を頂き、塔社一同感激の至りであった。ここに謹んで篤く御礼申上げる次第である。当日は昨年五月以来臥床中の主幹も車椅子で出席して親しくご挨拶を申上げることが出来なお、直原玉青、東野大八両先生に感謝状と

握手して声はずませた二〇〇号

重文の塔が炎えてる薪能

ささやきに塔の影ある古都の池

塔の影着替えた巫女の足早し

鳩一羽塔の高さを翔んでみせ

西 尾 葉

記念品を贈呈する機会を得たことは誠に望外のよきこびであった。

なお、記念講演として俳誌「青玄」主宰・伊丹三樹彦先生のユニークなお話は錦上添花を添えて下さつて一同感激の境地に浸つた。

従来の一結社の記念大会には、その結社のみの喜びであつたが、今回のように他の結社からの盛大なよろこびを受けて、本当に柳人の温い心をひしひしと感じたことはない。これも日本川柳協会が出来て、お互いの交流がスムーズになつたことも大きな一因だつたと思う。当日は何かと不行届きの点の多々あつたことを深くお詫び申上げ、今後の御風交を切にお祈りして御礼の言葉とする次第である。有難うございました。

川 柳 塔 五 月 号

座右の句

凡人へもつたいなくも湯があふれ

(久米雄)

私の句

減びゆく朱鷺は流人の悲話に似て

井上 柳五郎

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

御厚礼

西尾 栞 …… (1)

恩師を想う

河村 日満 …… (2)

御挨拶

中島生々庵 …… (4)

川柳塔 (同人吟)

若本多久志選 …… (6)

自選集

東野 大八 …… (30)

■川柳太平記(40) へなふりと川柳

連載 誹風柳多留廿六篇研究(六丁) …… (32)

水煙抄

黒川紫香選 …… (34)

秀句鑑賞

水粉 千翁 …… (29)

同人吟

谷垣 史好 …… (48)

水煙抄

水粉 千翁 …… (29)

川柳塔二百号記念誌上句集

句評りレー (柳楽鶴丸・植村客遊子・小出智子・山内静水) …… (109)

恩師を想う

河村 日満

私の句に

仁義礼智信私も好きな道

というのがある。昭和46年の路郎先生七回忌川柳大会で、三条東洋樹先生に抜いていた句だが、これは勿論、恩師故路郎先生の

古くとも僕には仁義礼智信

という句から想がはしたもので、私自身好きでよく書かして貰う句である。

ところで現在同人の三分の二は、路郎先生を知らない人々と聞いている。が、それでもこの句など、よく座右の句として登場するので、路郎先生の代表作の一つである。

俺に似よ俺に似るなと子をおもい

などの句と共に、現在の若い同人の皆さんにも、よく知られているのではないかと思っているのだが、如何なものか。

ところで私は、路郎先生の名が出ると不思議に想い出す句がある。その句をご紹介しよう。勅題は「朝陽映島」(ちようようしまにえいず)であり、

愛染帖

二百号記念川柳大会

句集「夫婦酒」を読んで

ポスト

大相撲春場所観戦記(太茂津・紫香・十郎)

「微風」

一路集「罪」

「土」

初歩教室

柳界展望

句集紹介「古稀」

各地柳壇(佳句地10選/川口弘生選)

一分間の柳論(斎藤三十四)133/雅号ぶっちゃけばなし(黒川紫香)139

編集後記

橋高薫風選

谷垣史好

井上喜醉

西尾 菜

神原秀子選

榎原道夫選

高田博泉選

本田恵二郎

橋高薫風

橋高薫風

橋高薫風

橋高薫風

橋高薫風

薫風・酔々・鬼遊・史好

座右の句

旅の町このままここに住めそうな

(千代)

私の句

袋小路と知らず選んだ道を行く

桑原伊都

朝陽映島膚懲の船西さして

である。昭和何年だったか、記憶が虚ろになつてしまつてはいるが、おお、という感動を

覚えたことを現在でもはつきり覚えてはいる。そしてこんなのを名句というのではないだろうかと

思うとともに、勅題でこれだけの句が詠める路郎先生を、やはり非凡であり奇才であると尊敬したものである。

以来この句、私に取り付いて離れぬものになつてはいるが、昭和48年初夏の洲本で、寢床から窓越しに朝陽の昇るのを眺めて、早速、

朝陽島に映じ恩師の句が浮かび

と、詠んだものであるが、駄作は誰の目にも駄作らしく、反応はなかったが、私の胸の中を何かホツとしたものがはしつただけでも

楽しい想いをしたものである。

竹原の山内静水さんは、路郎先生から「君川柳は情熱だよ。川柳は下手でいいんだよ」というお言葉を戴かれたそうであるが、弓削の大会によく一緒にさせていただけに私には「佳句とは、心を打つものがあるから、すぐ判る苦だ。」がある。そんなこんなで、行き詰ると句集「旅人」を読み返しては、糧にするよう心掛けてはいるが、物忘れのひどくなつた最近では、それも億劫になつてきている。

「旅人」だけは繰り返し読み返せばと、再び肝に銘じているところである。

ご挨拶

中島生々庵

川柳塔はこの五月号を以て二百号を迎える事が出来、些かその祝意を兼ね「記念川柳大会」を催しましたところ、全国から多数ご参集下さいましたことを川柳塔一同感激いたしております。厚く御礼申し上げます。

「川柳雑誌」から「川柳塔」への推移のことに就きましては、詳しくご承知の方が多数居られることと存じますので省略致しますが、一口に二百号と申しますが省みてみますと山あり、川あり、決して楽な道ではなかったもので、むしろよくぞ来りしもの哉の感が深く、その間しむじみ皆様の御指導ご叱正のお陰と厚く御礼申し上げます。

その中でも日本南画院副理事長 画伯直原玉青先生が、川柳塔誌第一号より、それこそ毎月休むことなく御執筆賜わり、ともするとかくけうとする我々を御鞭撻下さった並み並みならぬ御親情にはどの位私共を

して感激せしめた事か、文字や言葉にはつくせません。改めてお礼申し上げます。

また東野大八さんでございいますが、現在では川柳塔顧問として名を連ねておられますものの、実際には川柳塔中堅同人と同じ若さと情熱とを以てご活躍、ご支援頂いており、現在は「川柳太平記」という超長篇物をご執筆になっておられ、殊に昭和五十年一月から「麻生路郎物語」をシリーズとして載せられ、私達同人一同は絶賛し且、衿を正しました。以上御二方の大きな存在は、ただに川柳塔だけでなく、全川柳界に永久にその光を残すものであります。

惟いますのに、突然川雑より川柳塔へ移行した私達のか弱い足どりも何とか今日のよろこびを得るところまで辿りつきました。しかし二百号の次は三百号、五百号とその前途は限りなく遼遠であります。ここに私達同一層心の一つにして精進努力してゆく事をお誓いします。この上とも皆様のご指導ご鞭撻をお願いして私のご挨拶といたします。

川柳塔

若本多久志選

大阪市 那須鎮彦

雨だれの一つを飲んだ雨がえる
あじさいがしっとり濡れて古都有情
よくしゃべる女を裁いている無口

年頃が必死に鏡磨いてる
迷った日自分の言葉見失う
雨だれの音にぎやかに春一番

竹原市 森井菁居

夫婦松見ると運が開けそう
裁判に勝って人生狂い出し
アスレチックへ跳む少女へ拍手する
ステーキを食べてもやはり四面楚歌
親の生きざまを子供は見えて育ち
欲ばらず夫婦で守る小さな灯

青森市 工藤甲吉

センソウハンタイ英霊も唱和する

中流の片手は痛い五千円

風来り風去り人を消してゆく

人間のいっち仕合せ丸裸

耳あつていらざること聞いてくる

他人の目は節穴でないことを知る

米子市 八木千代

運命のふしぎ手相の線変る

すんなりと味引出して母の塩

喝采の子感はずれた幕を引き

泣き虫の記憶にまるい土の橋

宝くじのはずれを年代順に貯め

髪梳くたび優しく死ねる夢を見る

逆縁の灯りに鈴をふりつづけ

大阪市 中川滋雀

ライターをつけてその先考える
望外のよろこび座席を譲られる
それなりのお年が背なに争えず
肩書の重さが匂う順不同

あの世への順はどこかに伏せてある

桜井市 岩本雀踊子

山茶花の匂う垣根の女戸主

花だより四月の駅の忘れ物

内輪話嫁にきかすとトゲになる

やがて来る次の世代に賭がある

故郷へ捨てた涙を過去にする

無口な父の背中があたたかい

大阪市 天正千梢

大切な肥料法句経に育てられ

新たな道孫のランドセル

学びつつ謙虚な姿勢うしなわず

逆境の苦しみなつかしむ歳となり

いじらしさ上手に嘘をついている

最後まで孤独と闘う人の旅

富田林市 和田維久子

世の人の胸にひろがる草の種

底知れぬ泉へ若さを秘めている

踏まれ草踏まれ乍らに実を結び

長旅の余韻を背にただよわせ

棧橋の約束乳房がうずき出す

一言をひかえる術のむつかしさ

美祿市 安平次弘道

雑兵の焦ってみても歩のあゆみ

信仰を支えに耐える四面楚歌

恋に恋して少女は夢を追い続け

倦怠期お皿に愛が盛ってない

フェミニスト妻の妬心を持ってあまし

針箱に針が錆びてる共稼ぎ

倉吉市 奥谷弘朗

出直しの出来た勇気をほめてやり

悲しみは忘れ笑って世を渡り

貰い子の親に成り切るむつかしさ

引揚げた日を人生の節として

一筋に打込む男がよく光り

鳥取市 両川洋々

秘密どっさり無口の両手からこぼれ

人生に卒業などない汗まみれ

マンネリの脱皮へ印相変えてみた

見つからぬ言葉さがしていた無口

花愛す男悪役にはなれぬ

鳥取市 小林由多香

形見分け亡父の臭いが値踏みされ

国の補助待つ雨漏りにバケツ置く

後任の決まらぬ椅子が冷えたまま

見栄の目が素直にメニユー決めさせず

春一番隣のゴミ箱置いて逃げ

和歌山市 野村 太茂津

詔らわぬ性で笑顔は絶やさない

なんとなく破滅に近い世に生きる

歳月を大陸孤児と埋め合う

大陸の孤児と倅と同一齡

母として名乗れぬ償い苛まれ

今治市 越智 一水

灯を消せば明日の戦が待っている

やせかけて猫帰りに来る春の雨

髪のかた変えよと春の風が吹き

老いてなお胸おどらせる春よ春

ニセ「行革」貧しい首だけしめてくる

堺市 藤井 一二三

退職届わたくしの灯を抱いて書く

日めくりを今日もむなしの手がめくる

風ぐるまあしたの風を疑わず

鼻にまだ過去の名刺がぶらさがり

他人さまの痛みが解る爪を切る

島根県 小砂 白汀

勲章を胸に連らねる人ごろし

さみどりへ五月の雨が喜々と降り

割箸がスカッと割れた走ろうか

雨続き働き蜂の歯が疼き

飼われてるからには余人に尾が振れぬ

鳥取県 鈴木 村諷子

世が進むコッチコッチと音たてて

ただ一つまたたくあいに生きて死ぬ

汽鐘車が一つどこぞへ忘れたか

美男美女みな禁断の実をたべる

この道はいつか来る道白い道

岸和田市 高橋 操子

紅刷毛を使うと春の貌になる

長寿線のびて病魔の追いつけず

酒という妙薬男立直る

春一番神経痛がいたみ出す

合掌の時だけ姿かくす鬼

岸和田市 福島 せつ子

四国路の白衣に弘法大師すむ

あかぎれの昔しみじみ白い指

面影を抱いてひとり世に生きる

残留孤児へ茶の間は涙誘われる

感激の涙残して孤児帰国

富田林市 岩田 美代

ビフテキの厚さに騙されそうになる

大それた夢を見ている熱つづく

炭の火に遠い昔がこもぬくい

この人が詩えばぬくい冬の詩

さよならが下手な女で瘦せている

倉敷市 野田 素身郎

与野党折衝これも談合だと言える

通勤車昨夜の酒を臭わせる

枕裏返して楽しい夢を見る

土曜日の午後は花咲く道帰る

造花満開商店街はすでに春

竹原市 山内 静水

キレイになった無口になった少女

春風に野壺が匂う墳墓の地

ふるさとは川もかれ松も枯れる

しみじみと思う緑玉婚しみじみと(三月五日)

始めてのケーキ妻から娘から(66歳誕生日、三月十日)

米子市 小西 雄々

手綱ひく妻の心がわかりかけ

熟年の人生観にある温み

定年へ働く誘いがある温み

勇退の椅子へ男の果し状

万国旗血を血で洗う国もあり

浜田市 中川 幸一

意見する親も豚児のなれの果て

定年の顔に甚平よく似合う

柘榴の実口突がらせる気は判る

栗田で豚が銀めし喰うている

戒名を嫌う頑固がまだ死なぬ

伊丹市 樫谷 寿馬

万博の跡地へ春と佇つ夫婦

心おきなく大阪弁で語る友

血統書持たない犬で良し散歩

新聞の見出しに飽きて一人住む

人間が人間を見る占い師

米子市 桑原 伊都

息ぎれをかばい二人の老いの坂

オンラインシステムにさえある弱点

残り坂付かず離れず二人の歩

子と同居手の鳴る方へ向くとする

アンケートの齢へとほけて鯖を読み

富田林市 中村 優

会者定離十指折ってもまだ足らず

二次会でジョークが判る美味しい酒

女が書く伝言板は謎を秘め

四国路へ湧いては消える遍路笠

受験子の絵馬が嬉しいVサイン

唐津市 浜本 久仁於

師の影を五尺二寸の距離に置き

妻病んで男の無力知る朝餉

鍵っ子に慣れて人形と独り言

いとこだけ見せる男になりきれず

目立つほど親に不安な娘のバスタ

倉敷市 小幡 里風

その夜更け父の吐息を聞かされる

啓蟄を忘れぬ虫が土を出る

石女もふと口ずさむわらべ唄
さざ波も立てぬ嫁ですよう笑う
飲む足らぬ顔が盃伏せている

大阪市 河井庸佑

要領の悪さ自分がいやになる
口程にないと初手から見抜かれる
耐えること座右の銘として生きる
いつの日か花咲くものと信じ切り
一步後退二步前進の処世術

寝屋川市 宮尾 あいき

溜息の出るのはやっぱり春のせい
すみれ色の涙こぼして読むレター
七十歳の分身虫歯よさようなら

誕生日

朝鏡まだまだいかす七十一
眉少し濃い目に引いて若返り

倉敷市 水粉 千翁

感情を殺して主義を守り抜き
よろこびのはけ場を投げて石は舞う
ふんふんと馬耳東風に乗るあくび
手料理という歓迎に隙がない
一石を投じて天の声となる

大阪市 金井文秋

早寝して頑固な風邪に逆らわず
わずらわしい役は逃げとくマイペース

馬鹿になる試練の一つ今日も耐え
メンパーに重宝なのが一人居る
一匹狼それぞれにある顕示欲

八尾市 高杉鬼遊

戦争のない菖蒲湯の男たち
共稼ぎさくらはとうに散りました
ロボットが髭を生やしている会社
にんげんを哀しくさせる歩道橋
運鈍根日陰の葦が考える

大阪市 清水健司

儲けとは悲しきものよ友が減り
石なげてみても試験は終らない
パチンコ屋仮面をとらぬほうがよい
釘打ってみてもガタガタする机
薬屋が酒を飲むなとつりをだす

宝塚市 傍島静馬

リハビリにしては石段長すぎる
ポケットの辞表が無口しておかず
娘らに余生あまえっぱなしでいる果報
下心突かれて二の句見失う
先入観ふっ切り出直すマイペース

出雲市 原 独仙

春めけば治りますよと聴診器
もう吐いた言葉軽率悔いたとて
脚腰の達者な老いの旅行許可

満更でないな老妻も着飾れば
沈黙で過ごせぬ気性の老婆心

島根県

藤井明朗

風邪ののど直らぬままの電話口

終りなき人生子に継ぎ孫に継ぐ

事故多発春へ浮かれる黄信号

黄のシグナル明日の暮しへ点滅す

黙々と天と地へ祈る米づくり

岡山県

浜野奇童

とことんのトンまで甘えて見たい夜

妻の知恵信じ落目の靴を履く

良い知恵も出さず秒針にせかされる

青空へ心預けて草に寝る

一人きりになってから寝る母の熱

八尾市

香川酔々

覆水は盆に返らず花吹雪

チャンスだと思ふ動悸が早くなる

春の寺鳩に三枝の礼を見ず

フィクションを駆のベンチで考える

壁に耳そのたくらみは洩れている

松原市

谷垣史好

井戸のある家を出てから健康に

ヒットラーの髭なつかしき夏の雲

打水をしても霽れない胸の内

赤いペン恥を晒してばかりいる

桂枝雀に笑いころげて日が暮れる

大阪市

小出智子

春は他人の花がきれいに見えてくる

諦めが半分まじる妻のよさ

子が巣立ち昔ばなしを繰返す

責任を背負い続けるかたつむり

春が来て少し女を取り戻す

和歌山市

浦野和子

明日は又明日の彩あり沈丁花

煙幕を張るから疑いたくもなり

背信の重さをかこつ落椿

胸つき八丁越えて誤解がとけて行く

三月の山へとうづく絵の具箱

松江市

柳楽鶴丸

マタニティーもう一度着たいと笑わせる

無限に広がる五右衛門の蒔いた種

猫夫婦のラブコールに刺激され

ポケット一杯雑学がためである

誰にも見えない人生の矢印がある

兵庫県

遠山可住

闇に去る背に有情のあたたかさ

慰めに来たナ笑いを置いて去に

忘れたい傷が酔うほど起きて来る

春雨に濡れたを忘れない女

余り苗もろて一人の畑を埋め

倉敷市 小野 克枝

一灯を隈なく照らす母の道
許す顔できて夫婦の歩が揃い
丸出しの無智を可愛いナと思つ
過去乗り越えて走れよ車椅子
嫁がせて夫婦に広い花の庭

岡山県 嘉数 兆代賀

残り火にまだ夢賭けている余生
陽炎におんな心をくすぐられ
裏町で人の情けに独れる雨
風が甘いよ絵馬も走つてみたくなる
義理ひとつ果たし夕餉の茶がうまい

大阪市 神夏磯 道子

交際の輪が広がって知る自分
京菓子をくるくる眺めつつ食べる
他人さんに決めてもらつた齢でいる
働いた垢とは言うが風呂掃除
折返し過ぎて懺悔の旅になる

八尾市 高橋 夕花

早春の一樹一樹に励まされ
花よりも緑がほしい日の痛み
春の雲追つて心の旅に出る
里帰り愚かな種をおいてくる
躓いて祈りの中の日々あらた

竹原市 小島 蘭幸

一蓮託生この手のひらに家族棲む

春ふわり長女の靴と次女の靴
罪ほろぼしに男はきつと旅に出る
ノイローゼぐらいは治る銭湯よ
青空よ僕は善人ではないぞ

平田市 久家 代仕男

歲月は流れ祖国に父母が居す
毒の無い男で近所胸を貸す
所得税納めた頃が華でした
啓蟄を火あぶりにする芝を焼く
床柱あの古傷は俺がつけ

柏原市 大峠 可動

合理化の底で陽を待つ蟻の群
底辺の悲鳴か溝の水流よ
風習に沈み狸の尾をふりぬ
軍手干す人は苦節の愛を持つ
点線をつなげば兵の顔がある

松江市 小林 孤呂二

地酒くむ炬ばたで早春の詩を抱く
友禅の絵柄もちいさくなる不況
惜しまれて辞めたきものよ残り坂
女の虚栄花になりたいなどと嘘
丸の内エリートの足音だけきける

幸せなりズムの中の夫婦箸
松江市 恒松 町紅

旅の膳地酒の味へ話題積む

鏡の前で罪な女の身づくろい

降り止まぬ雨にテレビは水戸黄門

自販機で買った煙草が喋り出す

大阪市 北 勝美

大漁の鯛へそっぽ向く平和

旬のものを知ってる明治にある強味

バランスを頭に入れて粗衣粗食

褒められて素直にうれしい風邪知らず

沈丁花わが家の庭を春にする

和歌山市 西山 幸

さくら咲く頃は嘆息深くなる

すこしずつ春に目覚める鈴の音

届かない想いをつなぎ機を織る

雑草も譲らぬ意地を持っている

先走りなどは出来ないかたつむり

岸和田市 古野 ひで

ふとわれにかえると空しさだけの老い

今もなおアメリカ嫌いを通す老母

たとう紙あの時の染みまだとれず

美しい話に酔うて眠られず

泥沼に咲く蓮だから心打つ

大阪市 川口 弘生

対癌へ焦げたご飯もやめにされ

宿ってる生命に神の声を聞く

半分の血に叛かれる混血児

倉吉市 渡辺 菩句

人の句を噛むように餅食べてみる

この身から不運の神が逃げ出さず

頂上に爽快がいるから登り

伏せてある茶碗僕には伯爵富士

日向ぼこいのちを充電してる

河内長野市 井上 喜醉

退院の嬉しい乾杯ジュースだけ

銀婚はいで湯の旅で若返り

芯のある心はじつと動かない

目で笑い心を見せぬ恐しさ

夢の庭娘の頃の妻が居る

松山市 谷 真風

早春の星見る孫と手をつなぎ

如月の輝く星に亡妻の声

話し相手が無性に欲しい梅におう

幸せは小さくてよい銀の鈴

砂浜で飲ます乳房の丸く張り

松江市 梅本 登美也

マイペース次の札所へ鈴を振る

早乙女が唄で摘み取る一番茶

家計簿にぐつと食い込む慶弔費

罪だけを憎むお人に救われる

いつからか歩幅の合わぬ人となり
口実を設け不倫の渦となり

高知県

赤川 菊野

雲流る時の流れに身をゆだね

再婚の決意仏間の灯を避ける

ジャルバックロンの旅と見えぬ顔

孤り居の私語を鏡に盗まれる

下積みの愚痴は言わない父の靴

島根県

梅 みどり

おひな様飾ってくつろぐ春の宵

すがりきる余生を綴るうた日記

しゃぼん玉今日も大きな夢とばす

人情がうすれさびしい手まり唄

欲しい目の心ゆさぶるコマージュナル

島根県

堀江 正朗

出来そうなこと考える陽なたほこ

合わす手に力が欲しい数珠を繰る

噛みしめた味から春の彩が浮く

これだけの意地は捨てずに持つて行く

見えていた頃の話題ではずむ酒

島根県

堀江 芳子

嬉しい日夫のおでこに皺がない

いつ果てるともなき話題へ酌ぐ正座

どの道をいっても春は満ち溢れ

母らしい母親になりほつとさせ

おしゃれみな脱ぎ同窓と湯にひたり

生駒市

草深 酔升

山門を出てやれやれとにしん蕎麦

聖天さん詣りお寺の名も知らず

寝たつきりにだんだん近くなる不安

脚腰をかがめて楽なのに気付き

亡き老母にそっくり鏡に向うたび

和泉市

西岡 洛醉

七人の敵を制して定退す

重量感どっしり五十路の背を伸ばす

妻の留守猫と空虚な目が出逢い

汗にぎる拳に男未練断つ

ジーンズの女石ころ蹴つて春

岸和田市

植山 武助

焼いて煮て又天ぶらにした大漁

ちよつとでもナウな祖父にもなりたくて

責任のない椅子があり御曹子

半分は環境と言う子の蟻

当てのない旅へ小雨も粋なもの

唐津市

浜本 義美

土おこす焚火に遠い汗を拭く

方言が薄れて土が瘠せてゆく

還暦を迎えた妻の脊が目立ち

盆栽が縛られてから拗ね始め

親探し済まず戦後は未だ続く

藤井寺市 児島 与呂志

大阪市 西出 楓 楽

春の陽にソフトボールに溶け込まん
逆らえばむなし己れを取り戻す
いい人が先に逝くとは限らない
負けん気がこんな夫だったとは言わぬ

沖繩(二句)

もう二度と来まいと思ひ碑に詫びる

神戸市 仲 どんたく

三重県 川上 溪水

一年がこんなに短い申告書

天寿まだおまげが欲しい顔のまま
合掌の涙へ鉄扉非情なる

言うてほしい話内緒にされていた

指折れば余命へ指の数余り
涸山水の味と思えど鳥誘う

遺産など無いから兄弟仲が良し

胸の底撫でるリズムが過去を握り

耳寄りな話耳から寄ってくる

米子市 石垣 花子

西宮市 藤村 女

春愁の少女にすみれひそと咲く

一服のお茶で朝毎ネジ巻かれ
何もかも芽が出揃って春一番

咲いて散る花の命へ雨しきり

大陸の孤児に終りの無い戦後
亀に似た歩みで趣味の道を追い

告白を聞く公園はおぼろ月

片手間の大根いびつなままで伸び

合掌しても雑念掌にあふれ

東大阪市 市場 没食子

本当の味方は叱って泣いてくれ

海南市 牛尾 緑 楼

反主流分子も含んでいる余裕

つき合いがふえて家計簿赤の愚痴
古傷へゆさぶりかける聞上手

欠点のひとつがいとおしくなる月日

流れ者ながら町議に名をつらぬ
待合の雑誌切り抜きたいコラム

良いことがあって真赤なサクランボ

中国孤児親探し来日

風船がしぼんで妻の座にすわる

肉親に会えた嗚咽に痛む胸

神様を味方に妻の逞しさ

出雲市 園山 多賀子

子が二人女は手綱ピンと張る
猫の鈴つける役目は誰が買う
直線も端を結べば輪が出来る
ありのまま白髪の方が好きになる
待つよりも待たれて見たい女なら

大田市 藤田 軒太楼

老朽車オーバーホールを断わられ
今更に孤高を気取って見たものの
ニュアンスが違うと敬遠される老い
せめてもの孝養死水だけはとり
孫の問い答に困る伸び盛り

岡山県 直原 七面山

辞表手に居丈高
焦れて待つ隠し芸
嫁きし娘ののろけ聞く
寝て一人起きても一人秋深む
奥さんの方の意見にある重み

松原市 玉置 重人

愛無限小さき母の乳房かな
バリュームの甘さに疑い深くなる
老妻の髪の色に報わねば
寒椿絢爛と落つ春の風
セーヌ川歩いた話まだ嫁かず

堺市 高橋 千万子

愛一つ実って砂子のよい便り
晴着選る母娘別れの日を覚悟
蛇口出て水に自由の流れあり
無口では通れぬ肩書つけられる
忘却の二字で消えない罪一つ

大阪市 津守 柳伸

成りゆきにまかす女のつけ黒子
信念が砕けてからの人の機微
振りかえる夜は不安がつきまとう
腕組みをほどこいてからの勝ちいくさ
頼もしい腕を窮鳥嗅ぎわける

守口市 野呂 右近

初夏の風少し歩幅を広くさせ
菜の花のまぶしさ帰省の道で知る
老いの波ひたひた寄せて冷える足
悲しんで寝たとも見えぬ高いびき
色かたちそれも味なり愛でて食う

大阪市 江城 修史

保護色に染まぬ吾子を誇りとも
楯となる妻が女にかえる日よ
義理一つ心の糧とする或る日
裏切られ裏切り流転なおつづく
一期一会友あり心の窓を明け

奈良市 森田 カズエ

憧がれの看護婦さんの労働歌

置き手紙子供へ殿と書いて出る
目標を壁いっぱい受験の子
進学期御無理承知の神頼み
利き酒へ自信の舌が順を待つ

米子市 雑賀美世

難聴を助ける妻の耳が添い
都合の悪いことほど都合よく忘れ
一線を引いて同居の和を保ち
とぼけ通すつもりの舌がついすべり
孫の瞳に不思議にうつる蟻の列

西宮市 杉浦婦美子

ウインドー見ている女の隙だらけ
合格を酒の肴に家族酔い
代筆の恋文でもよし春の夜は
巢立たせた安堵と孤独枯乳房
副作用見破れなかった糖衣錠

大阪市 欄蘭

金持ちはグリーンカードへ身構える
よりどころ絵馬に求める受験生
目刺焼く老夫婦に風かおる
ロボットに焙り出されて職捜し
使い捨てカイロも詰めて旅に出る

熊野市 坪田冬花

生きているから目が覚めたありがたさ
歌い出す音痴勝手な節をつけ

働いた金より孫がくれた金
ワンマンもすつかり妻の知恵に負け
骨のある男大事な職を捨て

橿原市 岩井本蔭棒

義兄さんと呼んで少女の頬赤い
盃を伏せて限度を知った顔
独り居る時がほんとの僕である
気味悪いほど真つ白な歯で笑う
ほどほどに泣いて櫛の門を出る

姫路市 大原葉香

壁の絵は四季の変化にへつらわず
春が散るはなびらが舞うハラハラと
観劇の余韻へどん帳重く垂れ
一日の男の勝ちどき大いびき
退院のよろこび妬心背にまじり

大阪市 岡田ふみ

金婚は貧乏暦の数え年
窓は雪娘と食事は春の味
男三人寄ったら何を話すのか
出席と記してそれから何着よう
そよ風に春のたよりが乗って来る

島根県 西村早苗

失うてゆく老い齡に花がまた
憤懣をコトンと落す飯茶碗
夜の街を按まに聞いて旅ひとり

薬湯に温める六十三の肌

女との対話静かに酔うている

倉敷市

稲田豊作

喜寿の宴春の気流に乗せられて

一本気金の生る木を振り向かぬ

棘だつ日妻の笑顔が欲しくなる

老人の快適胃の腑軽くなり

灰汁抜きが足りぬと米寿笑わはる

岸和田市

島崎富志子

職を持つ女の城が荒れてくる

エリートのもりの足が砂の上

もう半分まだ半分と友と飲む

いらだつた心が胃袋噛んでいる

荒波も小波もあつて夫婦なり

東大阪市

森下愛論

冬の朝気だけ起きて暖まり

四十年まだ働きに行く靴磨く

カウンター丸く止って一人飲み

誘惑と闘う春の灯がともり

春うらら飲む口実を考える

京都市

山本規不風

抵当は大学生の息子です

遠く住み他人にみえて来る怖さ

償えるような罪なぞありますか

だつてだつて女の癖がこそばゆい

あじさいの芽にときめきよと細い筆

和歌山市

松原寿子

青い実にしかと続いている未来

想いゆらゆら夢は哀しい木ノ葉舟

以心伝心受話器を駆けてくる人よ

起ち上る意地を秘めてる足の裏

愛の答男の温い胸にある

京都市

山本桐下

人徳か桜の園にあるお墓

再会を約して唄うてまり唄

落日が綺麗で快よく訣れ

福耳になぜ届かない良い知らせ

ふるさとの無い子を癒やすかぶと虫

大阪市

杉本智慧子

菜の花が咲いて明るい女達

さしすせそ女の灯りしかと付け

晴れる日も曇る日もあり女坂

子が巣立ち夫婦は風の音を聴く

保津川の春をカヌーが濡れて行く

岡山市

川端柳子

土筆みた歎声春のページ繰る

夫婦坂くぼみに春の陽を溜める

小吉を信じて朝昼晩の夢

好みとは別に流れてくる哀話

参考になればと秘めていた半生

岸和田市 原 さよ子

雑草の強さに私が励まされ
寺静かいろりの炭が燃えている
贅沢な口においしい朝の粥
うす化粧老いには老いの美しさ
純情な鬼は童話の中にある

鳥取県 川崎 秋女

ふとよぎる不安けとばす笑い声
愚痴とぐち溜めて女が溝に堕ち
屑かごへ夕べの愚痴が溜めてある
いやーナ子感へ思いきり顔洗う
反省のひと日小さな罪が消え

島根県 松本文子

妥協した手に帰らない青い鳥
春匂う流れる雲と風の彩
鯛を鯛に変えて仕送りに耐える
あるドラマバッグに詰めて旅に出る
振りかえる未練へ風が鳴るばかり

和歌山市 若宮 武雄

因果応報 肝に銘じて病んでいる
かけひきの下手を笑われ信じられ
春霞春の名句の味に酔い
伴せの花の盛りを妬む風
このまんま育てあげたい左衛

西宮市 妹尾 春江

長女慶応病院で手術(3回)

娘の生命吾にとどかぬ重さもつ
無の心ただただ神に手を合わす
闘病に今一筋の光さす
灯を消せば声あるものに会いたくて
小春日にパンジーがゆっくり喋りだす

堺市 大道 美乙女

コップ酒過去がポロリとこぼれ出る
無欲にはなれぬ十指に業が住む
母の帯忍苦の折り目すり切れる
伴せがおどり出ている娘のハガキ
陽炎の誘惑肌からみつく

倉敷市 藤井 春日

人の世は負け者同士で酌を酌む
苦劳かけたなと黒梓の妻に詫び
俺の辞書不可能の文字消えやらす
老いのよろこび猪口三杯の日々楽し
気のおけぬ友へポットの湯を注ぎ

島根県 錦織 文子

糸切れた風は気ままな風に逢う
卒業を指折る母にある苦勞
春浅いくりやで味噌豆煮える音
裏の裏見えて私にはこわい女
灰皿に積んだ思案をもてあまし

鳥取県 林 露 杖

握手する演技手袋すいと脱ぎ
ふれあいの禍福 臉に追う不眠
裏切りを赦してからの自閉症
宝刀は抜かず和解の手をしめる
春の宵思ひ出愛し人恋し

和歌山市 内 芝 登志代

道がつき平和な村が墮落する
残留孤児深い絆がうずきだす
磯の香へこんなうまいにぎり飯
贅沢に育てて工夫の芽をちぎり
発車ベル母の匂いが遠ざかる

唐津市 久 保 正 敏

刺含む鋭い舌は何で砥ぐ
翔んでいる女が孕む人生よ
空間を自己回復に使いたい
憲法を変えたら強くなる女
疑いをなかなか解かぬ過去がある

羽咋市 三 宅 ろ 亭

花の下しばし二浪は動かない
見送りはほんの呢懇左遷去る
無人駅桜と対話する男
忘れぬたった一つの菓子味の
一銚子妻との対話弾む宵

八尾市 大 路 美 幸

一本の葦より弱きいのちなり

孤児再見涙の重さを知っている
期待する母のまなざし背なを射る
再会のぬくさを抱いて回り道
野仏の頬撫でて去る初夏の風

米子市 林 瑞 枝

手さぐりの絵筆自問自答する
不機嫌へ寒さ私のせいでない
宴果ててピエロ笑いの渦の中
拝む手へ如来は今朝も笑み給い
内裏雛三代を生きた生命抱く

鳥取市 森 田 熊 生

昨日みた夢を信じて朝を出る
母さんの意見素直な耳となる
本心をかくした笑いとも見えず
やりとげた汗太陽へ胸を張る
決断の勇氣靴ひもしめなおし

富田林市 板 尾 岳 人

ヒコキに乗りたくなつた胃の痛み
ちぎり絵に見事に抱かれ狂いぬく
大胆な闇夜に男坂を抱く
北枕犯されそうな風に逢う
人妻と火種を捨てにゆく陸橋

新宮市 大 矢 十 郎

三月十日何かの記念日だったつけ
お水取りとやらを忘れてぬくい春

集金を待たさぬ妻の噂聞く
長距離通話やはり大きな声になり

松江市 舟木 与根一

足もとの春が見えぬかブーツ来る

粗大ゴミからくらしの詩乱れ出し

猪口一杯米寿めでたい頬の色

檜山も無く米寿の金屏風

橋本市 森脇 善太

一人寝の中で狂うていた話

いつの日か昔話にでる女

これまでと思う命へ風車

結論をいそいで足がもつれてる

七尾市 松高 秀峰

再会を誓い別れる能登の旅

人災の涙の記事の続く日々

栄転の挨拶状の句が光り

転職へ祖父から味のある言葉

西宮市 野呂 鶴汀

大雪で帰れなくとも蟹と酒

安酒場孤独な人も歌がでる

ハラハラとするも楽しき孫の足

浮き沈み二間住いへ明日は越す

兵庫県 辻 文平

亡母を恋う瞳が石仏の目にもある

少年の覗く望遠鏡に明日がある

踏切りをいくつ越えたら春がある
捨てられる靴が明日の道を言う

奈良市 宮口 笛生

うめだ花月隣のおばはんよう笑い

寝ていたらええのに無職の早い朝

血圧が無職の首をしめにくる

食べたいと思うものなし市場籠

笠岡市 松本 忠三

土壇場へきて条件をもち出され

控目へあれも養子かなと思ひ

頂上に行き着くまでの美辞麗句

難題へなす術もなく腐れ縁

竹原市 時広 一路

持ち馴れぬ嘘は誰かに渡したい

瀬戸の海右も左も春の島

四と五の真ん中において捨てかねる

身に覚えのないから仁王恐くない

京都市 松川 杜的

アスファルトに散った椿で絵にならず

羅漢さんの一つ私の顔に似て

コーヒーへミルクこころよく溶ける朝

この家の歴史を語る鬼瓦

柳井市 弘津 柳慶

貴男には泣かされましたと夢枕

天下りの手土産億と言う単位

孤児再会何処となく顔よく似てる
一節一節へ年輪をのぞかせる

枚方市 稲葉星斗

草餅に足をとどめて春を待つ

石投げる子等の足もと淀温む

浪人にむなしき春よ子と泣きぬ

社寺巡り清水の音も春近し

松原市 北野久子

まだ翔べる若さで買ったイヤリング

セツトしてなんと五つも老けたよう

空威張りしてる夫の淋しがり

食べるだけ食べて夫は寝てしま

諫早市 原田明春

人の前他人振りする深い仲

酔いたいわなどと酌がせて好奇心

原船寄港ゲバがすねている港

夢だけは貧富の差別なく見せる

米子市 政岡日枝子

とほけつつ本音切っ先むけている

とほけてる姑には姑の生きる知恵

点と線ホテル孤独の人を吸う

川柳と同居の日々を夫が妬く

和歌山市 杉田周穂

情熱の炎毛布へ独り言

軽すぎるホテルの毛布寝つかれず

一幅の絵となる歩く老夫婦
節分の内なる鬼は出て行かず

出雲市 板垣夢酔

葬式に似合うお面を付けてゆく

下心あるから異性に気がとがめ

トントンと鼻緒が堅い音堅い

初恋を思い出させるおぼろ月

町田市 竹内紫鏘

ふみの日の仲で弔電打つさだめ

眺めたい亡父のノートは母が捨て

それまで通り黙禱はせずクラス会

全集のテープも余生もてあまし

橋本市 森脇善太
(先月分)

笑いの渦へ不幸を捨ててくる

継ぐほどの家でないから騒がない

月を射るオトナのオモチャでうさぎ死ぬ

本線の遅れも待つて出る列車

大阪市 西森花村

千円札も夫も新妻使い馴れ

老いらくのとろ火で煮詰める迄ゆかず

五目飯がチャーハンになる妻の腕

春祭り幼な馴染の顔も減り

大阪市 村上田鶴子

紅生姜亡母にききたい事があり

三寒四温そのきびしさがここちよし

苦勞性なる手相は亡母がくれました
渡り鳥命乞いなぞせずに発つ

宇部市

平田実男

遠くから眺める富士がきれい過ぎ
引くことも知って人間の幅が出来
少なけりや遺産少ないなりにもめ
彼岸もう過ぎたに続く寒い記事

下関市

国弘半休門

沿線の菜の花大師の道をゆく
帰命する心で数珠の手をあわせ
顔役も絞りが利いて薄暗い
保健熱老いも若きもユニホーム

東大阪市

斉藤三十四

税金の虫雛壇で居眠りし
四国路の春は巡礼の鈴が行く
2DK団地サイズの雛を買い
夫婦酒苦勞の過去を歌にする

岡山市

岩道博友

背を向けて提案理由を聞き流し
腹立ちを押える酒のかん待てず
適当に返事をしておき小さい私語
巢作りの雀もブレハブ寄り付かず

香川県

岡田拳法

国策の果てなる残留孤児哀れ
身勝手に各論吠えて国がなし

大国になってしまつてうろたえる
建国日遠い昔だ書紀でよし

桜井市

河合茂雄

母の声に呼び止められた曲り角
ふんぎりをつけて戻れぬ道をゆく
浪人の手には届かぬ城ばかり
ナナハンの風青春の顔を彫り

米子市

青戸田鶴

繁栄の日本へ孤児が来ては去り
気短かな父に留年とも言えず
耐えきれぬ涙をかくす鬼の面
伝説の橋の名残す繁華街

貝塚市

行天千代

秘密一つお墓の中まで持つて行こ
もう少しもう少しと彼岸待つ
風邪に寝て夢は青空飛び歩く
冷たい風でも太陽のやわらかさ

大阪市

山根いつを

幸せな夢の半ばにベルが泣き
無口屋の息子ときどきほろりさせ
詩心が這入り商談はかどらず
指十本それぞれ組んで力出し

吹田市

西川景子

体中ジョギングしている風邪の熱
チヨコ一枚夫の鼻のふくらむ日

イヤリングつけてと甘える右の耳
中之島ファーストキッスの残る影

和泉市 岡井 やすお

合格の一浪二浪よく笑う

両側の拍手が送る卒園児

根回しの利かぬ臨調持て余す

一割の仁術医者に期待かけ

高槻市 田崎 あき子

二人して過疎を守って花作る

昼電車棚の新聞借りて読む

距離を置く仲で欠点気にならず

レントゲン待つ間背すじの寒さ増す

青森県 五十嵐 操 史

仕来たりに伝統守る見栄を張る

惚れ薬飲まされたよう惚れている

貧困の昔語るに意気軒昂

冷水と受け止めて年齢の故にする

大阪市 柳 原 静 香

美容院齡は想わぬことにする

春陽射し夫婦のしこり解けてゆく

一言がまだ許せない花曇り

春や憂し想いを閉ざして娘は嫁かす

島根県 山 根 峰 雪

物足らぬ気で過ごす休刊日

セールの手腕を示す棒グラフ

公職を辞して打込む趣味を持ち
色紙からはみ出しそうな力士の掌

島根県 太田 亀 甲

峠一つ越えれば違う国訛り

長男がUターンをして鋤を振り

春闘の行事すべての値が騰り

啓蟄も我が山陰は雪があり

大阪市 横 地 雅 風

暗示受け易い手相と易者知る

儲けたと百円玉の泥を拭き

売店で人間味ある切符買う

友送りまた友が来る趣味の日々

京都市 都 倉 求 芽

庭の夜を抱いて沈丁花眠らない

入社してから履歴は本音喋り出す

地下鉄の窓にも春の陽が欲しい

治らないように古傷抱いている

寝屋川市 江 口 度

冗談のうまい税吏が来て負ける

空財布花の心を知ったとて

おぼろ月雨戸くる音うつつ聞く

どん底に居て信じよう因果律

岸和田市 福 浦 勝 晴

溜息が出るほど空が澄み渡り

健康の味を朝夕噛みしめる

兩陛下もお年を召して長寿国
激すれど声涸れ入れ齒がたついで

和歌山市 坂口 公子

ほんくらの蜂で意外な針の尖

三寒四温それでもつてる夫婦です

春を呼ぶ煙野焼きが匂つてる

生温い水で金魚があえいでる

羽曳野市 佐野 白水

ふきのとうと一緒に蛙掘り出され

天皇が範垂れ給う長寿国

本名を初めて知った告別式

一過性苦言は頭の上通し

寢屋川市 柴田 英壬子

骨立てて花の子定が狂い出し

芽生えてた怒りカップの酒に消え

降って湧いたように異常な心電図

反省の顔を鏡に教えられ

寢屋川市 稲葉 冬葉

石松の胸かりて泣きたい月夜

銭湯に卒倒しそくな大鏡

誓ったことに悔いている出雲の宿

雪吹の夜哀しき性を積もらせて

呉市 林野 甦光

馬の足が生涯僕の嵌り役
したたかに生き抜く絆かも知れぬ

再会の空し昔を見失い
すれ違いの夫婦に彩が遠くなり

鳥取県 金川 満春

ワンテンポ後れ手習いそれでよし

二人共元気老春謳歌する

此の茶碗明日の活力生む茶碗

一と芝居打った予感が儲けさせ

神戸市 山口 美穂

癌という言葉使えぬ日々過ごす

舞台裏父は知らずに手術室

お隣りのベッドと交す胃の話

父の笑顔に心身の疲れ癒やされる

仙台市 川村 映輝

エープリルフル知らない婆さん怒ってる

ポスターは満開現地はまだ蕾

結局は医者も器械に頼ってる

保証した金を借金して返す

島根県 柳原 秀子

うとうととあの世の人の夢ばかり

ありがとう孫の写真がくる見舞

子を持った子を子と思う親心

首なし地藏へすがる弱気になつてくる

奈良県 村上 春巳

月曜はまだエンジンが掛からない
やすらぎは俺の臭いのする布団

熟年と呼ばれ腰痛つきまとい
灰皿へ思案の嵩を積み重ね

大東市 土岐 トク子

ふるさとの香り届いた宅急便

瑪瑙入り数珠を忌明けに母遺言

北欧の生んだムンクにあるかげり

夢で会う亡夫はバーマのリーゼント

大阪市 本間 満津子

一合の米研ぐ家中灯を点し

検査みな良かった夜の眠り足る

読みたくて読みたい本を夢で食べ

水引きのお紙幣足したり減らしたり

玉野市 小谷 仙山

最高の幸せ死んでも良いと言う

酔ってない酔って無いのからまれる

一言で済ませば言葉に角が出来

私の涙私一人が始末する

岸和田市 清野 こう

飾られて雛まぶしさに落ち着かず

嫁ぐ娘へ父餞けの貯金帳

老いの身を頼む貯金を温める

日の丸が残留孤児の目にしみる

東大阪市 奥山 弥山人

人生の余白を日記消して行く
溜息をもち帰るまい繩のれん

実も蓋もないと仲人さじをなげ
眉つばで聴く仲人の賞め言葉

羽曳野市 榎本 吐来

寝不足の駢のことに触れず発つ

責める気のない溜息が身にこたえ

争いを知らず蓄は春を告げ

銀婚の妻の駢の淋しかり

大阪市 西川 善紫

御仏の慈悲の衣とくるまれて

老いてまだ金欠病が治らない

我を折って婦唱夫随の日を送る

吹けば飛ぶうさぎ小屋にも資産税

岡山県 荻野 鮫虎狼

凡人の父で軍歌をよく歌い

職の無い男へ春の風温い

大口で笑う女も五十過ぎ

三月の雨へ少うし濡れてみる

浜田市 佐々木 裕

不覚にも涙が俺も人の親

無為徒食ベット気安く添寝する

もやし子が決めた皆勤こそ宝

春愁やこの家も老いの夫婦だけ

島根県 谷岡 芳枝

あすは霜神経痛の息づかい
合格へ柔和な顔がよみがえり

青空へ唄う音痴のこと忘れ
どたん場で馴染めぬ意見もてあます

東大阪市

崎山美子

今日も無事煎茶うれしい色となる

診察の順待つ編棒良く動く

おふくろの味を見習う落しぶた

保護色に徹し弱者は生きのびる

和歌山市

福本英子

子を抱かぬ指にダイヤの角が立つ

左にも右にも寄れず係長

装いも派手に早春見舞われる

目移りの母娘へ釣り書嗤いだす

大阪市

鍛原千里

日だまりで見つけたツクシは春の使者

造花にも散らせてくれる春は欲し

さざ波は言葉にならぬラブコール

三叉路に立って夫婦の道が見え

岡山市

井上柳五郎

名を執りて単身赴任の辞令受け

道しるべなくとも選んだけもの道

ご時世とさびしい老いの瞳に出会い

老残の父の背で知る道しるべ

和歌山市

垂井千寿子

開き直ってミロのビーナスと写真撮る

税関の勘で楽々通り抜け

温室で育ちサボテン刺が有り

兵庫県

藤後実男

明暗を分けて異動の酒を飲み

結局は女房が折れている平和

いつまでもつばみでなかった日記帳

ネクタイの好みは妻が知っている

唐津市

田口虹汀

偽らぬ海に季節の魚が棲む

時偶に拗ねて色増す畠の茄子

妻の詩聞きつつ二番寝してしまい

貧乏も煙草の吸える中は無事

唐津市

木塚素石

端午には闘う心鯉のぼり

嫁いだ娘寝だめに来たと母の愚痴

お別れと巡り合いの季花筵

花婿の扇子の震え眼で話し

出雲市

吉岡きみえ

おでん囲む夕餉はコップ酒にする

一日をねぎらい夫に爛をつけ

子離れを愈々かくごの春となる

茶柱にいいことありそう靴のひも

米子市

菅井とも子

一抱えの葉が杖の旅ブラン

旅三句

同居して嫁のカラーに気が疲れ

励ましてうそ気付かせず看るベッド
最果ての灯台使命に眠らせず
裏道を行けば近道出来そうで

島根県 角 耕 草

ひと回りしてもおんなじ雛の顔
値踏みして隣の雛を見て戻り
海苔を搔く娘のほうも頬被り
いまごろは答案用紙が渡るころ

兵庫県 河 原 み の る

退き際になって太子にきずがつき
春雨へ狐も出でず雉子啼かず
拳手の礼ひ孫かわいやふと翳り
もうあかんいやまだまだと生き続け

大阪府 西 村 芙 佐 女

スピードのエースが二枚ほしい春
狂いなぞ無い筈夫の羅針盤
物干に女の幸せのぞく春
直列の星へ無限の拍手する

東大阪府 竹 中 綾 珠

耳よりな話他人にしゃべり度い
判一つ押すのにためらう保証人
孫八人すぐには名前出て来ない
一枚ずつ衣類脱がせる春の風

大阪府 藤 田 頂 留 子

大師との対話で今日をしめくくる

根回しの程も実らぬ胸算用
急いでも一秒ずつの腕時計
底辺の好意に野心見あたらす

恵和田市 狭 間 希 久 志

秒針の律儀苦情も欲もなく
一浪に再び巡る春地獄
贅沢ももうこれまでと天の声
定量で回ったバーで酔いつぶれ

大阪府 神 田 秀 峰

飲めぬ酒飲むお誘いがまた続き
人の世話出来る幸せ日々多忙
蔵書には埋もり知識は追い付けず

唐津市 新 岡 回 天 子

終電車間に合うか酔い加減
富士を見ただけ身よりは見つからず
折込みの方が新聞より重し

兵庫県 大 江 秋 月

大学を出てマージャンは強くなり
孫の手が届かぬとこに棚つくる
孫と行く堤にも春の香が匂う

唐津市 仁 部 四 郎

丸顔で後からよく効くウソを吐き
み仏も神もあるのに不慮の事故
小包みで送り返すも恋心

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

水粉千翁

人恋しひとりを惜しむさくら咲く

高杉 鬼遊

さすがと思ふ作者の快作品でした。ここまで来れば川柳の文学的評価としてはばかるとのがあります。

「ひとりを惜しむ」とは非凡の表現でありさくら花のもつさだめを言い得て正に至妙というほかありません。

傍にいたい日 もし狂えたら狂えたら

松原 寿子

たたみかけの表現は既に古いという言い方もないではありませんが、問題ではないと思います。慕情の極限に居る者の心情はかくあるものでしょう。傍に居たい日への願ひは、狂えたらという表現とはうらはらに、むしろ純情の余りの切なさではないでしょうか。狂えたら狂えたらとは、狂えないからでありましょう。それが川柳でもあります。

私には川柳作品の真髄は形の無い感情を表現

することが第一義だと思っています。いのちある主観句を強調することが即感情の作品だと思ひます。物を説明する句が氾濫している現状は、どの作品報を見ても衆知の事実であります。この句には、その感情があらわれています。

生き物へ川は流れて春になる

飯田 悦郎

滔々と、楚々と、川は休むことなく流れています。そこに森羅万象の生々流転がくり返されています。その中から特に、必ず春にめぐり逢うことのあることを知らなければなりません。生甲斐は破乱の中からこそ得られる尊いものであります。

わが人生以下同文に甘んじる

杉浦 婦美子

人それぞれの人生は大きな格差の中にその生涯が作られるのですが、一人の人間としての格差はない苦です。「以下同文」とはうまく表現されたものでした。

この句を拝見して私の人生を見つめ直して思わず、うんうんと頷いております。

いつも読みいつも書いてる身を晒す

野村 太茂津

座五の「身を晒す」に感銘しました。いつも読み、いつも書いてる。これは私とあなた達すべての人のくらしのすべてでありましょう。「身を晒す」ところに、偽りのない読み方と書き方が存在しています。清純潔白人間の姿とでも言いましょうか。

早春の雲へ窓でも拭きましょ

越智 一水

集句の中で私の好きな一句でした。説明の要がないほどよく判る句でした。しかし前述しました「感情」がこの句の中に溢れています。ただそれだけでありながら、清々しい川柳としての重味がずしりと感じとられる佳句でした。

鉄瓶の音色よ雪は淨く舞い

錦織 文子

「鉄瓶の音色」が実に良かったと思ひます。そして音なく雪の舞うところ、そしてこの句の中から寛の音までが冴えたたびきを伝えて来るようです。そんな中に居る幾人かの人々の衣摺れの音さえ聞こえてきます。

お揃いで北山杉は天に伸び

狭間 希久志

ここを知る者こそ、この心を知るでしょう。形美しく、極めて自然に、すくすくと上を向いて伸びる杉木立ちに私も感嘆久しくいたしました。

女房の財布天下の秋を知る

木村 はじめ

夫たる者、声なき妻の声を聞いてやりましょう。共に天下の秋を知ってこそその夫唱婦随でしょう。

この句は只の時事句ではなくて、いつの世にも財布の重さ軽さに泣き笑ひがあります。

特に天下の秋を知る財布の軽さには、締めよつもない紐をいじくっている妻の顔を盗み見るのではないでしょう。

正本水客

何となく歩けば風がサワと鳴る
バス捨てて旅の匂いのする方へ
咳きが口のなかでもう乾く
この世にしかない醜さを見せられる
美しさが美しいほど哀しくて

浜田久米雄

宵が来てから確率をたしかめる
運のよい奴がぼろ財布をつづけ
終止符は近し心に言い聞かせ
戌年の六度も回る意気地なし
算盤を頭に置いている夜中

長野文庫

出番待つ芽に雪の裏こそばされ
この想い届けと切手舐めて貼る

小細工の根まわししとく仕掛人
進学期はれものにも触るよう
釘付けにしておく母の泣きおとし

若柳潮花

貝がらで稚蟹しばらく身を潜め
風邪で寝て暗いニュースを聞いている
移り気なひとやと思うコンパクト
立喰いの味にも馴れて子が育ち
インターン批判する眼になるナース

尼緑之助

ドラマまだ続くいくさは土の中
前篇は肥料となるか桜咲く
霜折れのしづくが春のひとりごと
相互主義綱ははなさぬ天下り
日々ふとる蕾の声を聴く茶の間

月原宵明

鏡台へ来れば涙は堰切れず
トラックの髭を生やした方が助手
天が見えるところまで登りつめた歳
春一番癌で死んだという噂

河村日満

反抗のうちにもひとり居るヤング
怒鳴り癖戻り薬を忘れ勝ち
葱刻むリズムに好きな詩がある
五つ児に四つ児いい代に生まれたり
窓ぎわへ徐々にわが家ででも押され

本田恵二朗

満潮を待ってる産声を待っている
卯酒ことしの風邪に打ち勝てず

口下手が気になる言葉置いて去に
コンパクト開け開けと退社ベル
ふところが寒いとちゃんと舞い戻り

黒川紫香

陀羅尼助ハワイの人に分けておく
一枚のメモに野心がチラチラし
亡き妻をいっばい褒めた懺悔録
六甲が薄墨色になる寒さ
いっばいの野心を秘めて頓死する

橘高薫風

祝 三条東洋樹先生喜寿

喜寿にして鳩翔ばす少年の夢
人妻と濁りにしまぬにぎり酒
白菊千日仏も飽きはしませぬか
香の銘天菊とあり亡母の闇

川柳 太平記 (48)

へなぶりと川柳

東野 大八

河出版文学全集の「吉井勇」篇にある年譜によると明治三十三年の項に「阪井久良伎と知る」旨が記されているが、この年の初夏久良伎先生は、自ら写真機を携え、根岸の子規庵を訪い病臥中の子規の像二葉を得ている。

今日ひろく伝わる縁側に横臥せる子規の写真は、この時の先生の一葉である。こうして先生はますます深く子規に参ずると共に、歌人としての自らをいよいよ強く育てつつあったが（中略）そういう先生が突然「へなぶり」なる狂歌体の歌づくりをはじめた（ことは前回の吉井勇随筆の一件を指す）動機に就ては私は詳しいことは知らない。が、当然、与謝野鉄幹の「明星」派の流れを汲む医服部猪

之吉等、帝大医学部の人達が、学生らと「いかづち会」という短歌研究の結社を組織、その作品を毎回読売新聞紙上に発表した。（註

明治34年ごろ）

ところが、その作品が妙に気取ったいわゆる文学青年臭ふんぶんなるものがあつたのでそれに反発した工科大学の連中が、「いかづち会をもじって「かなづち会」なる結社を組織、同じくその作品を読売紙上に発表して対抗した。明星派に対し快よからざるものをもつていた久良伎先生は、ここでも「木の下に新体天狗」式のいたずら心を發揮「へなづち会」なる名に隠れて、それら二つの会の作品をやユする狂歌体を発表した。それを面白し

として朴山人（最初朴念仁）と号した読売新聞記者田能村梅土が、久良伎先生の狂歌体にならった一風を別に樹て、それに名付けて「へなぶり」としたのだときいている。その言う意味は「変なぶり」であろう。

古く狂歌体は「へなぶり」と称したことは大阪の松江重頼門の生白堂行風という俳人の編んだ「古今夷曲集」（寛永六年刊）の序に、「夷曲歌」と書いて「ひなぶりのうた」と振仮名して「今は狂歌というなるべし」と割註してあるのをみて知れる。即ち本歌の「都ぶりに対し、わざと卑下して「鄙ぶり」としたのであって、これに「夷曲」の文字を宛てたのも、夷（えみし）即ち未開の人、あまさかる鄙人の歌の意に他なるまい。朴山人は、久良伎先生の「へなづち」をもじつたというよりも、その言葉によつてこのことを思い起し「ひなぶり」を「変なぶり」「へなぶり」ともじつたものと思われる。

吉井勇氏は、先生がこの「へなぶり」なるものをはじめたかの如くしているが（久良伎先生自身、この名は自分にはじまるかのようにいわれている）事情は右の如くで、先生はその体をつくつた、つまりこれのキツカケをつくつただけの、その名は後に生れたとす

るのが正しいようである。しかしそういうせんざくはいずれとして、前にも記したようにひたすら歌人としての志を伸ばすべく努めつつあった先生が、何故にここに走ったか、それは吉井勇氏も記されているように、先生の「かなり言動に不羈なところがあって」という性格のそこに働いたであろうこと勿論それなしとしないが、単にそれのみとは思われない。(「川柳雑誌」昭和31年9月号、前田雀郎「久良伎先生伝補遺」)

久良伎が、子規の革新者たる情熱と、その精神的生き方に魅力と畏敬を感じつつも、その子規から「口綱一流の珍体を以って応援せよ」といわれたことは、察するに歌人久良伎の、歌人としての力量を、子規が否定したことを意味している。この子規の言に、久良伎が「余もと別に任ずるところあり」と答えた久良伎は、いわば歌人久良伎の立場の離脱を意味していたと推測できる。その「別に」ということは、結果的に正統歌人の立場を放棄し、別の短詩型を目指す意志の表明につながる。それは狂歌体の「へなぶり」をワンクッションとした川柳への道に走るコースをとつたと筆者は考えざるを得ない。

久良伎が正面切つて川柳への道をとつたの

かは、明らかではない。日本新聞の剣花坊選の「新題柳樽」には、日本新聞社人であり同僚として、開設しても投句の少いのみをみて、一作句者として投句応援をしていたらしい。剣花坊のその日本新聞柳樽は明治三十六年七月三日付に始まったが、開壇早々二カ月は、投句者皆無で剣花坊自身が千二百句を面目上投句扱いとしてお茶をにごしてとあるから、久良伎の川柳作句は明治三十六年九月以降という推定が成り立つ。

久良伎が本格的に川柳の道の途に就いたのは、明治三十七年四月二十九日電報新聞に柳壇が開設始動した際、選者に迎えられた時点と筆者はみたい。再び雀郎の「補遺」に還る。

先生が選者として確実に起つたのは、「電報新聞」の新柳壇の「新柳樽」からである。

(中略) かくて剣・岐両者の間にはしなくも対抗意識が生じ、同じ川柳革新を志しながら互いに相手をライバル視して手を握ることをしなかつたのは、いま顧りみて、大切な時期に川柳の実体を一般に認識せしめる上に、大きな損失をしていたように思つ。(中略) いずれにせよ、川柳をこのときはじめて、わが事として考えねばならぬ立場に置かれた。

先生が明治二十九年日本新聞入社に際し、「川柳の師匠」なるふれ込みをもって乗り込んできたとする古島翁の記憶の誤りであることは、前掲の吉井勇氏の記述が裏書している。最早問題とせぬが、明治三十五年以前において、先生の川柳に対し、わが事としての関心を疑わしめる事実がここに一つある。それはその年、東京の金港堂発行の「文芸界」に中根香亭が「前句源流」を発表、川流及び雑俳の歴史を明らかにしながらも「かかる遊戯三昧の小文芸は、後來終に再発の機なかるべし、將又敢て其の発生を希わざるなり」と結んで当代に用なきものと論じているのに対し、先生は何等の言葉も行われてはいないことである。もし先生に早く川柳の志ありとすれば、この香亭の一文は、そのまま黙過し難いものであった筈である。にもかかわらず、しかも正義派をもって任じ、われをささぐるもの断じて許すことのなかつた先生に、それがみられなかつたということとは、川柳に対する先生の無関心さをそこに考える他はない。従つて先生の、川柳への関心は、電報柳壇を担当する破目となり、はじめて強められたものとみるべきである。

俳風柳多留廿六篇研究 (六丁)

本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木 黄・石田晋一
南 得二・小野真孝・多田 光

故岡田 甫

94 一ト塩の鱧くし巻の女房干シ

本多II 「一ト塩」は魚・菜などにうすく塩をふりかけること。「鱧」は白味の夏魚で、江戸の海釣りで人気があつた魚である。「くし巻」は略装の仮髪結。

亭主が釣つて来た鱧を早速開いて、一ト塩を振つた鱧を、櫛巻髪的女房が天日に行して、気取らない庶民生活の状況をよんだ句である。

多田II 贊。

岡田II 贊。釣つて来たのをすぐ開いて塩をして干す。生魚だから急速を要し、また女房には面倒な仕事ですから、身なりなどがまわす

櫛巻のままやるのです。

95 年シ忘レ年忌と読んでしかられる

本多II 「年シ忘レ」は年の暮に一年の労をねぎらつたための宴で、今の忘年会にあたる。馬鹿騒ぎして忘れようという年忘れを、こともあろうに年忌と読み違えては「縁起でもない」と叱られるのは当然。

大屋II 贊。

年忘れ年シ忌と読んで笑れる 四五・6

という句もある。

多田II 贊。

岡田II 同。

96 蟬丸をとつさまといふ座頭の子

本多II 「蟬丸」は盲目の琵琶の名手といわれ百人一首にも選ばれている。歌カルタの蟬丸は座頭頭の盲人に描かれている。その絵を見て、座頭の子が「あア、とつさまだ」と呼んだというのである。姿形容似ているが故の幼な児らしい見立てである。

せみ丸をとつさまなど、よく見立

拾四・16

多田II 贊。

岡田II 同。

97 桜から女房に杉の釘を見せ

本多 杉の釘は丑の時参りて神木に打ち込む五寸釘であろうか。

句解は、亭主が吉原の桜から多分にもれず廊通い、嫉妬の炎めらめらと女房が丑の時参りをつきとめ、打ち込まれた釘を抜いて来て、「この女め、俺を呪い殺す気か」と釘を突きつける。

実に穿った解で、ゴリ押しの感はまぬがない。

八木 吉原の桜以後女房がひどく妬く。「これだけは勘弁しろよ」と、時参りに使う五寸釘を見せながらなだめている。桜と杉と縁語仕立ての句であるのはいいとして、何か文脈が落着かない。

南 単に吉原の夜桜から以後遊びに度が過ぎて、女房に杉の釘を経験させる破目に追い込んだという意味かと思いますが、「杉の釘」は単に女性の嫉妬・呪咀の情を代弁させたほどの意。

多田 南説に賛。桜の頃の遊びすぎから、女房に杉に釘を打たせるような目を見させた。

岡田 難句。しかし諸説のように、やはり丑の時参りでしょう。「女房に見せ」は見せる意でなく、英語の S 田と同じく「思」「思案する」意がありそう。夜桜見物から廊通い

それで、「おそろしき杉を女郎に名ぞらへる」(安八松 5) という事になる……という句か。

98 長いしけはたりくと柿が落ち

本多 京都嵯峨野小倉山の麓にあった、俳人向井去来の別庵「落柿舎」の故事をよんだ句である。

多田 普通の「長時化」の句と考えている。柿は実が重いので、長時化の強風で地面につきつぎに落ちるのが他の実よりも印象的なのでよんだものとつたが……。

岡田 落柿舎の庵名となった柿は一夜で落ちたもの、この句に関係はないと思います。多田説の通り。

99 のつきりがあんじられるとお仲言

本多 「のつきり」は乗切る(のりきる)の促音使)で、舟で一氣に通過するの意。

句意は、遊客を送って棧橋まで来たお仲が棧橋を離れた猪牙を見送りながら、客の危なっかしい乗り様に、「あれで、乗っ切れるかね」と心配するといふのである。

なお、「お仲」は岡場所の一つ深川仲町の娼妓の擬人名。
八木 賛。仲町から猪牙で帰るには、江戸・

大阪間の廻船である大きな桧垣船のそばを、

「乗っ切る」ようなケースもよくあったのであろう。その時は、ゆれたりカーブで危なっからうから、それで「お仲」が案じている。

多田 八木説に近い。とにかく猪牙は小さいから揺れたりひっくり返ったりしやすいのだらう。

岡田 大体、礎稿でいいと思います。風の少し荒い時など、無事にゆけるか案じられる。

100 水鉄砲をつるべ打ッ暑い事

本多 「つるべ(釣瓶)打ッ」は鉄砲などを大勢で間断なく打つこと。

猛暑の真ッ盛り、「暑い事釣瓶ひとつに人たかり」(二六・38)で、われもわれもと釣瓶に寄りたかり、ひっきりなしに水を浴びる。まさに水鉄砲の釣瓶打ちとは言い得て妙。

南 夏の子供の水遊び風景。暑いので、水鉄砲を連発し、その少量の水に僅かの涼を味わっている状態と思われまふが。

多田 南説のように思っていた。子供が水鉄砲で遊んでいるのを、大人がおだてて水まきのようにまかせたと……。

岡田 同。

水煙抄

黒川紫香選

つかず離れず絵皿の中の夫婦独楽
表札の雅号五月の風が撫で

八尾市 高杉千歩

蘇える川と話せば母のこと
横堀川精霊舟はもうこない
逆境を想う日白い飯と愛
晩学のやがての春へ香を焚く

高槻市 竹内花代子

つけまつげ付けたら派手に嘘がつけ
ゆっくりと私は女坂から登る
リリンリンジョギングを抜くベルの音
筆談のペンから愛がにじみ出る
洗い髪女に嘘のない日なり
ふた親の敷いたレールは走らない

今治市 矢野佳雲

あっちこち削って元の鞘に入れ
親と子とそれぞれ違う覗き窓

牡丹雪宿直好きな本を読む
鍵っ子が好きな洋服出して着る
縁のない春開相場聞いている

和歌山市 天満三千代

指切りの指に本心覗かれる
上の上見上げて心干からびる
地下足袋のこはせも緩む農休日
陽をいっぱい吸った布団は叩かれる
家中の苦勞を背負ったような愚痴

諫早市 江副二牛

老いの坂虹一つずつ消えてゆく
嫁がせて淋しいコタツに老夫婦
新婚の電話のろけも聞かされる
私だけうれしがらせて消えた人
口下手が握る感謝の手の温み

西宮市 紀市郁栄

子を抱いた昼の女は隙だらけ

年金の額をやたらに聞きたがる
残り火をさわがす憎い人がいる
こだわらぬ夫婦で別の部屋に寝る
障害者だけどときめく愛がある

京都市

松川芳子

親子かと言われて妻の上機嫌
春一番もう沈丁花の香りして
憂さ晴らし聞いているだけで喜ばれ
珊瑚婚ブローチ一つ買うて見る
悪くても善くても親のせいにされ

尼崎市

奥山美智子

旅ごころ窓の眺めに置いておく
言葉なく別れのベルがせきたてる
溜息を流す無心に米をとぐ
孫相手交際下手なままでいる
逆らわず時の流れに身を沈め

兵庫県

森脇和子

境遇の似た者同士でうまが合い
箸袋一膳ふえて温い居間
入口をふさいで座る女客
朗報がまだ耳にある温かさ
煩惱を二つに分かつ鼓鳴る

尼崎市

西村かすみ

貯金箱入れるたんびにふってみる
青い眼も箸が上手に京の宿

打ちあける歩幅が揃う春の宵
一坪の庭を楽しむ春を蒔き
まがってる松さからわずまげて活け

尼崎市

丹下玉子

マンションに和風の一室置こたつ
弾む娘の今朝の化粧は冴えている
ロボットに恋する心持たせたら
いも洗うようにもまわる朝の駅
洗うても洗い落せぬ過去の傷

松原市

佐藤藤子

鍋釜を磨いて今も一人居る
せんべいを齧りうつぶん晴らして
声変わりしてから抽出鍵をかけ
ストレスを買物かごは知っている
虚勢張る後姿が寂しげに

弘前市

田中叶

昼寝する二階に羽毛まぎれこみ
ピラ撫でて春風ぬけるガード下
社長以下四月の空にする点呼
駅裏のとある貸間に御祈禱屋
近頃の生徒見ているバス待つ間

大阪市

津山刀水

あやふやにしたいくない日のお茶を汲む
うまい話のどこかに落とし穴がある
夫婦だから同じ切符で乗ってます

振り袖が鼻緒のかたい下駄を履く
風船の様な男に吸い取られ

米子市 寺 沢 みど里

葉の陰に虫一匹の雨やどり

ごまかしの笑顔に嘘が見えかくれ

欲のない子で試験日が危ぶまれ

花あまたメニユーに迷う蝶もあり

出し抜けの間に隣の名が出ない

豊中市 満 仲 きく子

白酒に今宵は婦唱夫随なり

白梅へ澄んだ瞳の車椅子

古戦場塚あるところ椿咲く

白梅の咲く頃亡母の四回忌

二人三脚あなたの影を踏んでゆく

熊本市 有 働 芳 仙

こんな時ぐらいは呑めと父の酌

足の骨ヨガへ不服な音で鳴り

雪解けがきらきらきらと露の臺

金回りいいのかクラブ振り始め

鳥取県 武 田 照 子

仲人のきれいな嘘に目をつむり

不器用に突然夫のプレゼント

子育てに真赤な鬼の面を買う

付添いの母が十字架抱いている

富田林市 田 形 美 緒

三角の田畠を走るハイウエー
サングラス取れば余りに幼な過ぎ

長男の妻をみんなで鬼にする

死ぬなんて自分の事とは思われず

大阪府 藤 森 小 雅 子

上意下達象牙の印が欠けている

異端者の独り哀しい笛を吹く

止り木へとまると駄法螺の上手い彼

五月雨に一灯哀しい思索練る

西宮市 西 口 い わ ゑ

荒れた手を眺め歴史を振り返る

反骨の父も気弱になつて逝き

つながれた犬ジョギングを眺めている

陽だまりへ猫もうとうと春の夢

岐阜市 市 川 鱗 魚

刃渡りの怖さも女なら出来る

人並のかせぎ夫の貝ボタン

花ことば鹿の子の帯がまだ似合う

鶴を折り残して妻に先立たれ

東子市 小 山 悠 泉

潮時と思うが娘気に入らず

とも角も色艶ほめて置く見舞

いつまでも若くあり度い彩を選び

しんみりと二浪励ます言葉選る

尼崎市 矢 萩 貞 子

約束をとり消し心かくなる

あちこちで深い穴掘るシヨベルカー

霧が出てミルク色した大キャンパス

春の陽にブラリ出かける丹波ゆき

松原市

小池 しげお

ごますりのライターを出す早いこと

一円玉拾うてくれず踏まれたり

競輪場たたかいすんで日が暮れて

御堂筋上もゆくゆく地下もゆく

大洲市

米沢 暁 明

春一番今年も税の申告日

車ことわってぼかぼか春の道

還付金妻も食事へついてくる

時くれば言うと煙草の火をつける

岡山市

原田 凡太郎

今日もまた言葉にならぬまま別れ

打ちあけてみてはと涙ふいてやり

四面楚歌のらりくらりが板につき

どたん場になって神様当てにされ

大阪市

大野 武 太

親心の枠で羽ばたき封じてる

雑兵の骨が哭いてる防衛論

通常の範囲と責をかわしてる

高知県

山崎 広 風

日の丸を愛する父の浪花節
策謀の壺とも知らず蛸眠る

反旗振る妻の意見に寄り切られ

逢えば飲み飲めば心が通じ合い

熊本市

北川 一 進

父だけは知ってた仲の良い二人

退職をしてから新聞読みかえし

膝ポンと叩く威勢の良い返事

靴下のやぶれ気にした坐りよう

尼崎市

中谷 利 美

退院を妻と乾杯小ビール

電球で検査卵の値が決り

先輩と呼ばれる度に奢らされ

再婚の祝辞失言省みず

大阪市

今西 静 子

嫁がせて嬉しい疲れ母に出る

そよ風が撫でる女子寮の洗濯もの

帯しめて今日の見合は断る気

犬ぎらいへ犬先になり後になり

富田林市

藤田 泰 子

空気より少し彩ある夫婦仲

回ること拒否した椅子は捨てられる

煮えないでつまみ出される豆もあり

養生食 一品好きなものを添え

長崎県

岩崎 和 子

着くずれた頃に制服クビになり

平和と言う二字にひそんだ核兵器

ハンカチのしわが気になる伸びざかり

肩書に耐えた孤独の荷をほどき

尼崎市 関口 幸子

失恋の猫に塩鮭盗まれた

再会に飄軽な人の橋渡し

親切がシツペ返して戻って来

キューピットあなたの放した誤算の矢

尼崎市 田中 晴子

セールスは貼紙などに目もくれず

お多福の子にお多福を描いてみせ

暇すぎて長いシヨールができ上り

地下街で思ったとこに出てゆけず

山口県 高崎 雀声

アルバムにあった女房の脚線美

渡り初めこことだけ三代笑顔見せ

Uターンしたいが働き場のない田舎

冗談が通ぜず本気で恐り出す

尼崎市 中辻 千子

つましきの影に一本筋通し

失意の日顔も洗わず寢床に入る

合格は僥倖ですと慎ましい

夜来の雨春一番のプレゼント

西条市 片上 明水

カメラ持つお通路さまは赤い靴

実印を押した話がしめつばい

夜の畏こんなにきれいな月なのに

ジャンケンに弱い男の細い首

島根県 藤原 鈴江

風に乗る梅に誘われ遠まわり

妻の座に甘えて見たい春の宵

またの世もおんなに生れる夢をもち

冷え切った心へ野火が迫るなり

米子市 田中 亜弥

千羽めの鶴が命の灯をともす

一晚が峠縁者に見守られ

気の強い蟻斥候を買って出る

色彩の好み性格よりわかる

西宮市 林 はつ絵

春雨へ靴のもつれがとけてゆく

妻の手へ握力試す快復期

パステル画母の溜息など知らぬ

土の雑置くとひろがる桃の里

八尾市 宮崎 シマ子

早春の雨上り白足袋干してある

公園に小犬もいない気味悪さ

女の子はいいなあチョコレート呉れました

春休み帰って来る子の茶碗買い

島根県 星野 侑正

電話機をガチャンと置いた怒りよう

ただならぬ空気の中へ座らされ

お言葉を返すマダムも酔っている
口下手な男同士で馬が合い

竹原市 古田 鈍舟

沈黙は金なり逃ることにする
母と子の笑いへ父として入る

明日を占なうに福よかな人さがす
花つけたままで雑草引きぬかれ

島根県 東原 福子

吉報が届いて女春になる
空港が人間ドラマ作り出す

開放感いささか不安もあつて春
石橋を叩く気骨を明治持ち

鳴門市 八木 芳水

脱税がしたい程には所得なし
姑の舌呼んで料理へ味プラス

コーヒーに愛を温存する二人
笑顔から朝の幸せ先ず貰い

大阪市 清水 康恵

ポスターが占領している子供部屋
翔んでいる女の肩がせますぎる

日曜日少し濃いめに紅をさす
春だからみんな美人に見えてくる

うなだれた花に詫びつつ水をやり
流れ雲私も旅をしてるよう

ふさぐ日は雨まっすぐに責めてくる

米子市 沢田 千春

つり橋を渡る向いの灯よゆれる

八戸市 島田 昭治

耐えること雑草無言で教えてる
歯に衣を着せぬ男で小気味よし
腐ってるみかん半分がいい味で
封切らぬ月給袋を妻拝み

岡山県 池田 半仙

あれが富士中国孤児の目が濡れる
水戸黄門松喰い虫の松が邪魔
経済的には恵まれぬ力瘤
娘等と語る老妻若返り

高槻市 芦田 静江

調べもの底冷え淋し二時になり
申告の重荷果して桜見する
逝った娘の植えた牡丹は春を知り
割切つて昇る坂道友が居て

島根県 石飛 水煙

いい電話我を忘れて出雲弁
娘等が寄つて母を派手にする
妻病んで夫も病んで風邪が去り

岡山県 石黒 若恵

茶柱が立って再起の日の職場
甘言にもう踊らない六十路
肩の荷をおろして趣味に肩がこり

植木鉢貰つて凶鑑の貢ぐる

大阪市 横井 富久子

マンションを買う気無いのに覗いて見
蒲公英のわた毛微風にのつて飛び

大阪市 板東倫子

中国の狐兎に母国の冷雨ふる
ジョーカーのようにニセ札つかまされ
朝顔の種蒔くだけの土を買う

川西市 氏林洋敏

教科書に北方領土とやらがある
肩書は一つもないが土に生き
二人目ができて長男パパと寝る

鳥取市 武田帆雀

百円ライター代り映えせぬ男
棒グラフ安全圏にいて孤独
この辺の人が無難と気を許し

兵庫県 奥野テル

思いきり涙流せる母のひざ
眉細く引いてしっかり者でいる
ちっぼけな孫忙しさをかきまわし

米子市 野坂なみ

ママの気をひきたいだけの嘘でした
エイプリルフル可愛い嘘に狂わされ
親を越す器へ不安ふとよぎり

八尾市 松下蕉露

舞扇ほどきし帯の上に落ち
原稿の督促シャワーの音がする
編むことが楽しみ彼のマフラーを

死亡記事だけ見逃さず僕の朝
今渡る一級河川春の雨
ふるさとの宿でささやくものがある

大阪市 堀口欣一

強がりと言うが胃薬は放さない
商魂にバーゲンばかりしてる意地
空缶を見れば蹴り度い子の心理

大阪市 服部頼一

あらためて見れば左遷地都なり
朝刊の音で目醒める老いとなる
背面の映らぬ鏡で安堵する

大阪市 吐田公一

丹念に化粧してみる日曜日
会話ない家庭はテレビついたまま
年とつてふてぶてしい猫の顔

守口市 中原好恵

年度末少し気になる棒グラフ
諍の後は子供が呼びに来る
臍繰りをかくした畳妻坐る

東大阪市 金本不二夫

旧道へ回れば赤いポストあり
新学年つくしん坊が立っている
農大を出た二代目に街の嫁

今治市 八塚三五島

おとぼけで過ぎて死んだ仏顔

名古屋市 越村枯梢

石仏の今日も聞いている風の私語
五分五分と知らず上った手術台

水戸市 上鈴木 春 枝

せめてもの自由一人の終い風呂

セールスへ電話のベルに救われる

達筆な友へ返事を出し遅れ

高知県 曾我部 つぎお

雑踏を抜けてタバコの火をつける

やりくりを学費学費に持ってかれ

柔順な妻にもあつた日の気骨

大阪市 野田 君 枝

五千円出せば釣銭遅くなり

税務署を出ると聞える春の歌

申告をしたかしたかとコマージャル

島根県 槻 谷 一 葉

河川工事のがれて芽吹くねこ柳

家計簿に減らす数字が見あたらぬ

見もしないテレビをかけてひとりいる

青森県 波 ただお

学友がまた一人逝く春の空

言い逃れして政治家の頼りなさ

碧空はいいなア心澄んで来る

大阪市 泉 田 そとえ

タンポポの黄色へ土手の風温し

お花見の話もはずみジョギング

梅ちらり見えて極楽橋近し

熊本市 高野 宵 草
日めくりが昨日のままの忙しき

左遷地の山紫水明好きとなす

日曜を無為に過して弁解す

島根県 松 本 はるみ

明け昏れは指から砂のもるごと

さかしさに溺れた夜ふけ爪を咬む

子の電話くれた一日あたたかく

岡山県 松 本 元 江

再会を信じて希望の灯をつなぐ

お人好しい人ですねとおだてられ

昨日まで元気だったという命

大阪市 山 本 炉 齊

土踏めば仄かな春の気配する

土いじり幼ない頃を思い出し

故郷の土踏めばまた懐しき

和歌山市 細 川 稚 代

三界で一人位は惚れてくれ

曖昧に言うから罪が一つ殖え

笹舟も楽に渡れる川をよる

大阪市 大 倉 圭 介

微風にカタカタ走るランドセル

日航に救いは一つスチュワードス

白土塀崩れて梅の匂う路

旭川市 朝 倉 大 柏

橋一つ渡ると変る住民税

落ち目とは哀し影にも身構える
正確に時計が回り老いていく

鳥取県 羽津川 公 乃

輸入品ですと見栄まで頂戴し
奮発のメニユーフォークがぎこちない
宅配で隣も今夜はハンバーグ

大阪府 山 田 松 太 朗

陶芸家捜し求めた土に逢い
客が来て夫婦喧嘩の腰が折れ
かまくらの中は仄ぼの笑い声

高知県 山 下 登 舟

履歴書へ伏せておきたい放浪記
つまづきし石憎しみをこめて蹴る
訓示する監督の瞳に涙あり

枚方市 二 宮 山 久

魅力ある男がのこした置土産
本心がそろそろ覗く酒を注ぐ
お隣も愚痴がこぼれて酒の席

唐津市 筒 井 朴 竜

白バイの特権翔ばす街道筋
孫娘のよな婦警に小店主説諭され
パトカーのミラーで化粧する婦警

富山県 舟 渡 杏 花

鮮かな蒸発波紋だけ残し
誤字脱字挑戦状の隙だらけ
化野の寂を晩鐘深くする

鳥根県 岩 田 三 和
アンケート少数意見ばかりなり
コケコッコ放し飼いにしてほしい
暖かい布にくるんだ靴の香

西宮市 伊 藤 春 子
安らぎをくれる笑顔を待つ小指
強い事言うても明日は子に折れる

自己主張過ぎて家庭のきしむ音
自己主張過ぎて家庭のきしむ音
堺 市 田 辺 哲 寿

皺ひとつ増えたらひとつ狡くなり
打つ手打ち尽してからの神頼み
浮気する男女を信じない
米子市 足 立 由 美 子

門灯へ平和を見つけ安堵する
病んでみて人の痛さに手が届き
ひきたてのコーヒーロマンのにおいする
大和高田市 岸 本 豊 平 次

キャンドルサーピス花嫁の父の顔を見る
お水取り終って畑の草を引き
石仏に醜男があり父に似て
大阪府 日 阪 秋 子

下町に生れ気取らぬ風が合い
始業ベルそれから口は閉じたまま
しとしとと平和な雨の協和音
高知市 北 川 竹 萌

孫娘から貰ったバレンタインの日

アザレアに話しかけてる日の孤独
身のいたし教え子逝きし便り聞く

島根県 堀江百代

あせつても歩みは同じ水車
生卵今朝は半分飲んでおく
犬連れて幸せそうな女が行く

兵庫県 円増貞子

音を立て流れゆきます老いの坂
北風へ囲となりきる子のいとし
子供らの目がありけじめだけはつけ

松原市 木多洋子

こんなにも諦らめ顔に椿落つ
何でもないと言うのは隠している証
見失ないそうなの道踏みしめる

島根県 福岡芳枝

呼び捨てにされていそいそ妻のお茶
ほほえんだ老母にふつと菩薩の目
原因はさて置き家庭医すぐアロエ

交野市 山本テルミ

うどんでもいいかと仲のよい友
左遷地で微風に心癒やされる
正直に急いで来たに待たされる

羽曳野市 麻野幽玄

ドリンクで出社家路はカップ酒
釣りの話しとれば機嫌よい親子
逃げるのはよせよ地球は丸いんだ

大阪市 橋元美恵

深呼吸美しい昼だと思う
恋のない私に花の匂いなど
空高く許そうと思う戻り道

倉吉市 今村夕路

放浪の旅で詩人は生きている
海鳴りか旅の仮寝は眠られず
窮してもそこで人間味に出会い

堺市 久井富子

切れぎれの言葉つなげば鋭い詩
ばんやりと聞き流してた怖い事
一幅の絵を見るような釣りの視野

尼崎市 荻野江唯夫

ロボットが人の職種を整理する
行き過ぎは破滅を招くもとなる
その女の住む家の前よく通る

西宮市 奥田光子

姑は日々仏の顔になってゆく
速達に歓声あげる発表日
生き甲斐を求める姑の美しく

鳥取県 加藤茶人

地獄耳宿舎住いの妻の愚痴
餓鬼大将へ親親なりの敵意持つ
父さんを好きと言わせる玩具具う

竹原市 佐藤令子

ねんねこに天使が眠る背が温い

水仙の花を見て居る夫婦かな
事務服にかくるる赤い服を買う

奈良県

宮川 古都路

言いわけを考え夜道の重い足
レジの眼に聖徳太子は疑われ
門外に出られぬ仁王の怒り肌

泉佐野市

真崎 浪速子

姿寿司旅の話が花を添え
残高も定年という貯金帳
鮭返る川へ期待の稚魚下る

愛知県

国分 甲子郎

大死でなし愛犬の死を悼む
たわむれの一一〇番で晴らすバカ

心のかよう課礼賛

こともなく役場立寄る心の課

大阪市

平井 露芳

有難く老人医療の恩恵うけ
経済大国中国孤児を置き忘れ
2DK客に一部屋明け渡し

(母入院)

今治市

葛本 昌道

難交渉まず深々と頭下げ
ステレオのポリウム上げて異常だな
転勤の頻度タンスの底に知る

倉吉市

野中 御前

石女にとても眩しい雛の店
かけ引きの出来ぬ無口な父が好き

落ちこぼれ芽生えた種に土を寄せ

松江市

豊田 巡歩

類の艶出たじやないかと見舞客
時の人やたらマイクを向けられる
空港に着陸溜飲やっとなり

大阪市

塩田 新一郎

女ならそこは膨れて済ませるが
なれそめは微風だけが知っていた
アパートの灯一つ残して泣いている

今治市

新居田 胡頰子

言訛と嘘で固める失意の日
雪女の涙に煙る春の山

大阪市

権安 達一郎

風邪にねて土踏まぬ日や梅開く
土なくてホンコンフラワールのバラ赤し

兵庫県

伊沢 午郎

父子家庭温い日もある朝のパン
道がつき土地の値段がはね上り

兵庫県

藤原 捷一

土くれの指だが昔はグイヤはめ
枯葦へ微風しらしらくじやれる

岸和田市

吉水 照江

老いわびし仲間はずれの独居部屋
道連れも出来て楽しい花の城

和歌山県

寺田 裕美

終業ベル春の入り陽がすねている

目が入るまでを拝まれてる達磨

大和郡山市

岡田 すみれ

山のべの道足の疲れも快よく
西行や芭蕉の旅にあこがれて

吹田市

西岡 豊

雪の中冬芽をつけるいとおしさ
洗髪は微風にまかせ心地よく

唐津市

山下 勝一

派閥風波に浮く舟沈む舟
申請がすんなり通り軽い靴

新潟県

高野 不二

伴せはふたりで越ゆる夫婦坂
空涙マリオネットになる女

兵庫県

野々口 ゆう也

整形をしたとて心変るまい
発表はまだ予備校の誘いの手

橿原市

西本 保夫

毘あるを知ってて老いうまく呆け
あの男死んだそうだよああさよか

青森県

岩淵 一星

ボクだけがいつも忙しくそまじめ
消極的気持になって来た定年

尾鷲市

渡辺 伊津志

カラオケに軍歌も欲しい戦友会
倒産の支店看板だけ残り

八尾市

山下 みつる

暖色の配置で愛くるしさを描き
母想う日の我が心素直なり

八尾市

葛 幸子

金儲けするがどんどん使う妻
客筋が色々変る駅に居る

泉佐野市

大工 静子

原爆をまったく知らぬ今の雲
屋上で日なたぼっこのお夫婦

尼崎市

牧岡 宇多子

建ってゆく家で我家を囲まれる
やればよい大根百姓棄てていた

河内長野市

糸谷 春草

縫いものも洗濯も好きよい嫁で
糊付けた洗濯ものが威張ってる

東大阪市

三宅 哲夫

子の投書父のギャンブルやめさせる
補聴器で彼岸うつろな未亡人

東大阪市

高木 コハギ

難題を楯に首相へ迫る野党
自由権利のみが背伸びし義務萎縮

大阪市

岩田 八文銭

夜もねずけいこの祝辞は五分間
今年また赤字で始まる家計簿

八尾市

椎尾 公子

春くるを信じて草木自然待つ
諸行無常心の隅で友が生き

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

谷垣史好

一徹な背にひよつとこの貌がある

松本はるみ

自己の視線の範囲外にある人間のせなかいわば盲点の部分である。後ろ姿には嘘がない。つい本音が出る。一徹な男の愛すべき本質を作者は鋭く見抜いている。

明治の犬は耳がピンと立っていた

宮崎シマ子

当時は和犬が多いから……というのは理屈、犬のみならず人間も、と言いたいのだろう。いつか本屋の立ち読みで、「日露戦争写真集」を見たことがあるが、満州の曠野で戦う帝国陸軍の兵士たちの顔の何と獐猛なこと。今の若者とは全く別人種の如く思われた。百年足らずの間に日本人は変わってしまったのか。仕事場へ尻向けてくる生コン車

片上 明水

秀句鑑賞という面倒な作業のさ中、こつこつに出会うと全く嬉しくなる。「仕事場」

「尻」と韻をふんでいるのも趣向。猫の恋私の居ること忘れてる

藤田 泰子

これも肩のこらない軽い味の句。恋の季節傍若無人な猫の鳴声に悩まされた経験は誰しも持つ。だが猫は真剣、許してやりましょつ。日めくりの格言通りだったミス

萬本 昌道

私も日めくり党。文字が大きく、旧暦から十十二支、中には本日から45日目は何月何日、60日目は何月何日と至れりつくせり。格言はもちろん日替りである。別に行動の指針にするわけではないが、ある日ちよつとしたミスをしたら、それが格言通りだった。ハタと思いついたというのである。格言とは、そもそも、そういう性質のものではないか。辞書によると「簡単に言い表した戒めの言葉」とある。因みに私の日めくりの五月九日の格言は「怒つた人は口を開いて目を閉じる」とある。

拝啓と書くから後が続かない

中谷 利美

編集という仕事に携わっていないながら、私は手紙を書くのが苦手である。ハガキにとらめつこ、それでもベンが進まない、ととりあえず拝啓と書く。すると次は時候のあいさつ、以下、形式どおりの文章が続く。この方が何となく書きやすいのだが、若い人はそつでもないらしい。これも世代の差か。

五色豆のような薬にはげまされ

今西 静子

検査漬け、薬漬けと批判されながら一向に改善されない日本の医療。つい諷刺の一句も吐きたくなるが、色とりどりの錠剤、カプセルを五色豆と見たこの素直さには脱帽だ。肉体は病んでいても心の明るさ、健やかさは忘れないでいたいものだ。

一粒の豆を選ぶよに嫁さがし

日阪 秋子

適齢期の一人息子を持つ母親の真情はよく理解できる。できるけれど少しかまひ過ぎではないか、そんな危惧をこの句に感ずるのは私の思いすこしだろうか。或る日突然「こればかりの彼女、結婚するよ」なんて言い出すかもしれませんぞ。

子供には注射に行くと言うて出る

塩田新一郎

行先は金策か、職安へ仕事探しか、それともギャンブルか。敏感な子供心は半信半疑。何れにせよ後ろめたい気持ちで家を出る。独身時代の気楽さが羨しく思い出される。

独り住む父のベッドのヘアーピン

権安達一郎

男には男の世界がある。女こともに言えぬ世界がある。子にとって絶対的存在である父の寝室から見つけた一本のヘアーピン。シヨックは如何ばかりか。或いは「おやじ、やるなア」と見直すか。深い詮索はよそつ。

三面鏡 親とは住まぬ顔うつし

田中 叶

作業着が一番似合うなど言う

曾我部つきお

川柳塔^{改題}200号記念

誌 上 句 集

(到 着 順)

大阪市 中島 生々庵

移り香のまだ残つてる置き手紙
表面は茶の会にして両巨頭
この無理を聖天さまもてあまし
アルバムに我れ若き日の紺紵
極楽へ来てあの人が見当らず
母と往く心齋橋の片日照り
籠の鳥なに淋しからさしむかい
可愛らしい目になって来た酔うている
雀の子可憐な自負で飛び出した
切り貼りで生きぬいて来た喜寿と古稀

大阪市 中島 小石

新家庭もつよからうと飲みに行き
古稀の寿へ弟子がよつほどふけて見え
揮毫料包みすぎたかなと思ひ
三味線がやんでそれから音もせず
気晴らしに來て泣かされる新喜劇
二次会よなどとせんさい食べに入り
領取書これは家内に見せるほう
頼まれて拍手しているあほらしさ
スタート台明鏡止水とはいかず
鏡浄め浄め還暦の春粧つ

高知県 山下 登舟

文明の利器空籬にもてあまし
ゆとりある暮しにストの旗を振る
いつどこで知つたか孫の投げキッス
退屈と言わず欠伸にふしを付け
みの虫のつきたるままを床に活け
蜂の巢の茅ひとくらを刈り残す
ペランダのト口箱にねぎ五六本
もてあます原子の粕の捨て所
着眼れて世に疎くいるだけの日々
瞳をとじて過ぎゆく秋の色を見る

岡山県 直原 七面山

打算で信仰
米屋もパン食
手話での饒舌
遺産は膳の緒
逢引へ磨く肌
型紙に似た女
殺してと火の女
過去隠す濃化粧
髪黒く染めて恋
拗ねてた娘が媚び

今治市 長野 文庫

銀行の扉が時間通り開き
けちくさい事を言うなと青い空
挨拶もせぬ自販機になれて来る
ありがたい時代葉の値も知らず
空っぽの地球の上へビルを建て
靴脱いで靴下ぬいてはつとする
こんなよい時代に昔なつかしむ
手と足で稼ぐよりほか能がなし
アンケート何れも同じような知恵
ご栄転やがて追われる椅子なのに

今治市 葛本 昌道

箏曲の流れが醸す初春の音
春が来るあかぎれさんよさようなら
春一番試練の序曲かも知れず
暑い暑い愚痴繰り返し生き伸びる
暦から秋を呼び寄せたい残暑
落伍者がここに青い柿が落ち
秋から冬へ回り舞台に似た早さ
紅葉も知らずに職場冬が来る
里帰りする娘へ残すつるし柿
働き蜂のノルマへ冬陽短か過ぎ

鳥取市 加藤貞山

描き初めに好きな一句も書き添えて
帰り来ぬ犬の遠吠え闇に浮き
海が鳴る古老の知恵にさからわず
結願の札所へ急ぐ花吹雪
タクト振るラストシーンにある魅力
滝見上げその威の吾に迫りくる
紫の暮色褪せて神おわし
我一日足も確かに完歩証(知事証)
まろやかに八十路生きたし月拌む
世相今情性に慣れた身のみずみ

新宮市 大矢十郎

会釈して置く此の人は高利貸
無断使用したい実印そこにある
そんなことされては嬉し袖の下
髪振って世はバラ色の口答え
握手など知らない母の低い腰
ご近所が何を指折る岩田帯
寝た振りで聞けば妻娘は父思い
向うでも受話器を包む深い仲
婚姻届処女と書く欄見当らず
順々に嫁くそれだけを羨まれ

出雲市 園山多賀子

山茶花の白春雪に盗まれる
蠅を追う牛の尻尾にある主張
躓いた石の角にもある丸み
捨て石となつて浮く日を模索する
雨の日の無聊女の爪が伸び
しまい風呂今日の終止符雨が打つ
高層のビルの砂糖に蟻も住む
久々の無沙汰を詫びて手揉みの茶
おだてられ正直者の渡る橋
たくましい女踵を返さない

東大阪市 市場没食子

老夫婦浴衣の藍のように剝け
会えばまた別れともない業を積む
学資保険もつ掛けてます哺乳瓶
傷だらけになつた一円貨を拾い
歩幅の差遅れる妻をふり返り
階段も手擦りに頼る上り下り
よう出来た婚にめでたく酌ぎ足され
病人に喋らせ話題のない見舞
週休二日男いよいよ嵩高い
死に場所もそろそろ考えねばならず

下関市 国弘半休門

はらからの談論風発斗酒をくむ
ゆさぶつてみて杭打ち安堵する
受賞したよこび母の日を思い
背伸びして届いた所見つけられ
叩かれたはずみにレジー舌を出し
羽が利くまでを燕は巢にこもり
商才で仕入れ土魂よう売らず
五ツ児も肥れ自衛隊も太れ
七十七の根性だから出し渋る
正月にウンと神様儲けさし

西宮市 若本多久志

亡父の思い出叱られたことばかり
一粒の訓明治の亡母の想い出も
もう一度会いたい人がひとりあり
温かい布衣の交わり五十年
人の世の流れに添うて老いを生き
老婆と交す言葉もない夕餉
戒めがまだ時折は要る余生
重荷おろして人生は何だった
香を焚き書齋にこもる安らぎよ
人間くさい灰汁が抜けてく寂しさも

貝塚市 行 天 千 代

老人会嫁の不足の捨てどころ
紫が好きで早よりに後家になり
亡夫思ふ今年も父の日巡り来る
御法事へ無地の着物のしつけ取る
五十回忌へ母の形見の帯をめで
紫陽花のおしゃれ何度も色直し
草萌える土の甘さよ春近し
ささやかな道楽孫と食べに行く
崩れては又積み直す人生譜
今日だけを信じて生きた夜の膳

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

人の世の美空ひばりも年を取り
万歳の腰から下は隙だらけ
人妻とならんで歩く羽目となり
北風のときはみなみに歩くべし
手ぶらとはかくも愉しきものなるか
焼香をさせてもらえぬ女が居り
母の味母のかおりのよもぎ餅
栄枯盛衰山だけは残るなり
子を産みに生れた川をさかのぼる
ひと掴みの髪之母とはなり給う

岡山県 稲 岡 正 之

天国へ行ける善意の徳を積む
濡れる瞳の子の思惑に乗ってみる
子守唄知らぬ女は鎌を磨ぐ
陽を拒み影さえ消して歩く奴
尾を振らぬ個性豊かな孫育ち
ひとすじの香煙過去を呼び起こし
風向きをじっと待ってる曲り角
失言に噛みつく癖の老孤高
美人画の指にきれいな嘘をみる
豪快に笑って事件に遠くいる

鳥取県 両 川 洋 々

政治家のバズルやっぱり金で解け
マルクスをいつかきれいに捨てて貯め
人を恋う夜の雪音もなく積もり
選挙戦静かに質状の中で燃え
夢一つ一つ枕木妻と敷く
飽き性へ女のバズルなど解けぬ
二枚ある舌とも知らず夢を賭け
中立の旗でどちらにでもなびく
ひた走る支線へ赤字なすりつけ
遷宮祭神の意向は聞かぬまま

唐津市 新 岡 回 天 子

岩窟に些細な変化考古学
近い島これで遠隔手当つき
手も足ももがれ盆栽生きて行き
ご馳走さんと言ったに河豚残り
おしろいのように降ってる寺の庭
紙のひなそれでもよろこぶ暮しむき
恋愛でもせねば陣笠名が売れず
雲一つなくて対馬の見えるツリ
家も田も売って殿様の家に住み
暇なときやるときましようとうと生返事

今治市 矢 野 佳 雲

シャボン玉出世頭は屋根を越え
痛いもの除けと値上げを言うてくる
まだ若いのにと現場の人だから
泣かぬ時おいてと歯医者もつずれし
大会のマイクワンテンボずつされる
また明日子供は明日を疑わず
暖めて曲げりや素直な竹の性
考える蛙ポカンと浮いてみる
子に見るといふ生きさまをよう持たず
踏まれたを妻は尊いものにする

奈良県 谷口梨郷

店頭は簡素老舗に自信満ち
旅帰り土産は孫に裸銭
落書はにらむ仁王の眼を盗み
公正な権利も主義も金が変え
盆おどり揃いの浴衣波千鳥
努力にも限界があつた受験生
セールスに客の本心見抜く腕
大晦日火種が走る三輪の道
ポケットに手を入れて知る忘れもの
選挙戦耳うちで知る敵味方

山口県 高崎雀声

共稼ぎ男七輪の火を起す
ミシン踏む母評判の子に生きる
算数の出来ずスターの名をおぼえ
意地はつてみたが我が子に折れる知恵
チンドン屋袋小路もみのがさず
恐妻でないが日曜よく動き
流行の水着は水に入らぬもの
人気あるスターに余暇は許されず
警棒をもって恩師のヒケ破る
横文字で農夫に明治遠くなり

藤井寺市 吉田つや

仲直りしたのにうらみまだ残し
悪いとこばかり似て来る母ゆずり
母の日に母と二人の散歩道
特ダネになった議員の旅の恥
野良犬に小さな幸せ分けてやり
おしゃべりで人を刺したと気が付かず
想い出はそつとしまつて温める
幸せな女きれいな指を持つ
ままことのように電気で餅を搗く
すれ違い美人の衿の匂う春

姫路市 植村客遊子

年齢の差を見せ付けられた針の穴
Gパンを野点で正座させられる
セイラー服も御立派な胸のかさ
振り袖も走れはしれと発車ベル
義母の訃へ皮肉涙が出て来ない
髪染めて出るから皆にうたがわれ
正月の様な気もする酒の味
鳥焼いて山の男の血がたぎる
乾杯を又やって居る酒徒の群
ヒレ酒の匂い恋しい灯が招く

竹原市 時広一路

気まぐれな彩は持たない冬の花
明けきれぬ街は汚れてなぞいない
家中の時計が今朝もみな動く
自画像を掛けたら壁が笑うかな
気に入った面を女は外せない
バランスを保つ支点にいた良心
吊り橋の真ん中何の欲もない
この服を着れば私でない私
百面相今日の鏡は笑わない
何色に終着駅を塗ろうかな

富田林市 宮沢利重

扶養欄今年も一人増えており
一年生門まで送らせペソをかき
年賀状電話で済ます現代つ子
初夢で世界の宝分ちあい
旅の夢運賃あげて消されそう
象がいた人もいたのかおらが里
嫁ぐ日に鬼の親父も目に涙
増税と言われる度に気がめいり
孫からの賀状だけは手があがり
生きがいは自分が開く人生路

高槻市 福田 丁路

感情を押え時代の波に乗り
良心を麻痺さす額の袖の下
信念を曲げず年寄落ちこぼれ
老いてなお個性を生かす身だしなみ
負けず劣らず綺麗な嘘の立ち話
恩を知り恩に報いた晴れ姿
秋草の花咲く丘のブルトソーザ
延々と続く夢の宝くじ
カタログの様に綺麗に咲かぬ花
容赦なく残り二本の歯を抜かれ

大阪市 天正 千梢

大根を抜けば貴し地下の営み
かなしき少女まじれりチンドン屋
心のカード一枚ふやせる人に会い
日なたぼこ「狂つてないか」自問する
ある日ふつともものあわれにつきあたり
落葉散るちる先輩のなげきかな
親の翼で飛んで帰る道忘れ
夕茜釈迦涅槃図のかなしみか
制約のない空間へいわし雲
ふる里を一位にあげる星座かな

堺市 高橋 千女子

早春の彩でいやそう冬の疵
ふりかえる子育てほどの夢はなし
ひび入った土鈴終った恋の音
本心を知りたし少しおこらせる
出来心でもよし善意に背伸びする
手にもやげ腹に一物ある歩幅
悟られてならぬ鼓動にすける服
久しぶり女は身なりから探る
おこりましよう男は株を上げたがる
長電話女の底が見えてくる

大阪市 欄 蘭

猫柳春の足音聞えそつ
此の足で駆けても見たい車椅子
蚊に成って世間の広さ初めて見
日本に生まれて良かった木の芽和え
定退は我家の重大ニュースなり
皮肉にも見える社長の作業服
凡人でよし偉くなれとは言わぬ父
石橋を叩いて今だに渡れない
お茶がわりですとビールでもてなされ
でしや焼きの女房隣りのすしを巻き

尼崎市 黒川 紫香

蝶の羽根乾いたときから夢を持つ
王様の傘には雨が降って来ず
美しい尼僧に会釈されただけ
家出した少年の持つハーモニカ
豆の木がないので天に昇れない
一十一 三になりそで式を挙げ
シナリオを書き終え鬼の面はずす
手話と手話電車の中を明るくす
脱ぎ捨てた靴が疲れた顔をする
人妻に恋して距離を置いておく

東大阪市 斉藤 三十四

下戸ひとりすき焼へ箸よくつごき
七福神骨董店で年を越し
日だまりのベンチへ余白犬を連れ
定年後余白をうめる手彫り趣味
髪型を変えてみたのに知らぬ顔
人生に悟りを知った髭の白
年金の範囲で余白は生かされる
爺チャンの財布へあの手この手が来
表情を変えぬ男の肚づもり
新聞に木彫りの実技して見せる

高槻市 中村 孤舟

晩酌に染まり心のよろい脱ぐ
ちくはぐな答夫婦が枯れてゆく
素性など問うまい蝶の羽の色
童話から脱け出たような子供服
失業も知らず膝の子が笑う
汚職には遠い数字のブラカード
人間の弱さ寸志の裏を見る
いいこともないが茶柱シヤンと立ち
愚痴いわぬ妻を重荷と思つ日も
新調の背広が軽い五月晴れ

松原市 小池 しげお

めでたさを息子の嫁が酌いでくれ
若嫁へ風邪をうつしたあわてよう
特急の通過へポイントぱつと青
甲乙の關係乙は社長が来
パスポート世界を地球儀でさがし
フライパン若嫁らしくでき上り
しもやけがかゆしブーツがチトきつし
飛行機で来たのにバスのおそいこと
小銭入れ一円玉は居候
酔いどれのアララ落ちないはまらない

鳥取県 羽津川 公乃

愛憎を織り込み夫婦の柄とする
下戸の父持つて夫へ注ぎこぼし
気が向けば男とことん掃除をし
造詣が深く気軽に辞書を繰る
喜びの涙カラリとすぐ乾く
ハガキでは失礼手紙がとれず
この辺でサイクル変える辞表書く
道づれが一駅ごとと降りて行き
アイラインくつきり若さ主張する
自閉症心を聞く愛に触れ

岸和田市 福島 せつ子

かぎりない夢に力がついてこそ
手車で桜を見せに母と行く
スケッチの表紙に春の匂い描く
まだお独りですかと人はもう聞かず
ウインドに写る猫背へ年おもつ
花菖蒲みごとに咲いて持つ絵筆
七夕を手伝い子供になつていた
早朝の電話やっぱりよい知らせ
風へ無性に吾子に逢いとうて
掃除だけ残して暮の用がすみ

鳥取市 河村 日満

うたた寝の妻に涼しい風よ吹け
人事異動へくつたくもなし暮を囲み
労働歌重役室の窓閉まる
眼に注射誰か医学を信ぜざる
下駄箱の上で桜がすこし咲き
待つながき鳩の小屋まで覗き込み
下駄履きの詩人もきてる今日の月
大陸に四季あり兵としての過去
育児法どおりですこし軽い孫
夫婦だけの日の膳夫婦子を語り

岡山市 原田 凡太郎

生きてゆく唯それだけのことで揉め
人並みという目標へ気が疲れ
足ることを知る幸せへ引き返し
耐えている心に梅が咲き初め
いさぎよくかぶとを脱いで老いの日々
風車風のない日は風を待ち
白旗を振つて孤高の城を出る
なんとなく余生の果ても灯が点り
天の川弥生時代の風が吹く
虫を聴く言葉の森を出てひとり

今治市 八塚 三五島

ウーマンパワーめいめい違っ薄化粧
子は誰か育ててほしい共稼ぎ
連れがいるので分別が迷い出し
舟遊び底が見えると怖くなり
仕事場の方へ立派な注連を張り
長野路や昨日は鱈で今日は鮎
玄関に居て校長も使われる
胸にバラ付けると別の椅子が待ち
夢を追う若さ絵具を買って来る
嫁がせたよろこび妻と二人ばち

西宮市 杉浦 婦美子

吸い殻が対話の無駄を知っている
六法全書愛の言葉が見当たらず
断絶をつなぎに戻る祭の灯
赤電話きょうもドラマが捨ててある
聖書から明日を継ぎます灯をもらう
大根の匂いの中に母がいる
出稼ぎの妻がもつてる火打石
飾られた言葉にすこし酔っている
信心が梯子している朱印帳
釣書に隆鼻術とは書いてない

西宮市 妹尾 春江

子や孫へつながる汗は惜しまない
手を出せばとどくところ夫が居る
亡母に似たくせ毛が何故かいとおしい
痛む歯も無い空しさをかみしめる
美少女の面影のこしママになる
花菖蒲一つ一つが朝の顔
情熱を燃やす五十路の彩はなに
春を待つ草に根雪がまだ重い
悲しみがあるので傘を深くさす
未だ遠い筈の終着駅考える

鳥取市 中森 葉士人

峰打ちの首ぶらさげて春を落ち
馬鹿になる葉絶やさぬ厚化粧
死んだふりしてライバルを迎えよう
みどり洗う雨ならしばし降り給え
母さんのセーターに匂いがあつたなあ
日本海風ぐと悲しくなる寡婦で
仰向いて星の童話を探そうか
十月の花へ病む身の私語となる
直球で勝負男のロマンだな
吠えること忘れ寓居の雪月花

岸和田市 高橋 操子

大地の恵み太陽と握手する
地図にない豊かな旅よレンタカー
家庭訪問して先生のなぞが解け
いっぺんに大人になった春の帯
花の道歩けば茶店につきあたり
緋もっせん甘酒があり京の梅
紅型を着た南国にある魅力
水蓮満開守衛のように鯉が浮く
面影をしのぶ画といる秋ひとり
2プラス2が割り切れぬ世に生きる

京都市 都倉 求芽

平凡な夫婦で知恵の輪外れない
音もなく流れる川に似て夫婦
夫婦独楽倒れるときも一緒なり
姿見の中へ夫婦で立ってみる
狭い家いっぱいには笑う妻の客
妻の留守めがけて集金ばかり来る
いつにない長湯は妻の上機嫌
年の瀬や妻とすれ違いの日が続く
クイーンサイズ売場で亭主待たされる
一年また一年妻がヒラミッドに似て伸びる

倉敷市 本田 惠二郎

真心の彩濃ゆからず薄からず
秒針の宿命じつとしておれず
達筆のかすれるとこに来てかすれ
出る釘になるななるなど独り言
わらべ唄が聞えて来そつな里の道
時差ボケの旅はるけくも来しものぞ
古傷をがんじがらめにした年輪
沈思黙考そんなひととき持つも幸
音知らぬ子らの笑顔よ手話はすむ
無欲淡々余生の四季に詩がある

岸和田市 清野 こう

夕焼けを一息に飲む大ジョッキ
涼しかった夏へ見舞の札を欠き
水鏡して白鳥の羽づくろい
短い命思い切り鳴け秋の虫
柿一つ分けてこたつの老夫婦
戻り寒花の吐息が聞えそつ
或る時は横になりたい日の達磨
朗々の読経灯芯燃え盛る
一言が道連れとなる一人旅
流行へひと足おそく仲間入り

倉敷市 野田 素身郎

黒白をつけて気まずいことになり
台風へうちのアンテナだけ健気
敬遠の四球のような辞令が出
落語家の汗を見て笑えない
水割りでちいさな不安消して寝る
預金高零幸いにも悪なし
どこに傘忘れてきたか梅雨に入り
秋の蚊よお前これからどうする気
花の下別れ話の人もいる
病院の窓しみじみと昼の月

生駒市 草深 醉升

大臣も小粒に見える齢となり
一人しか無い子がくれた不倅せ
黒とれば黒もお似合いですとほめ
勝名のり母の笑顔がふと浮び
粗品一つ貰い持たれぬほどに買い
胸中を洩らしなみなみ酌いでくれ
落ちぶれて諺だけが味方なり
今日のプラン髭剃りながらまだ迷い
目の色は好意を持った叱りよう
旅だより母をたのむと添えてあり

高知県 曾我部 つぎお

雑踏を抜けて歩幅を取り戻し
嫁ぐ娘を励ます声が出てくれず
テーブルを叩いて迫る自己主張
湯上りの妻の素顔に齢を見る
門構えぐらいに機先制せられ
同僚に水あけられてゆく孤独
バス停を二つ歩いた淋しい日
通夜の席言葉少く混んでくる
骨太い手にも小さな鶴が折れ
十八歳未満に売った販売機

堺市 田辺 哲寿

紙一重なのかも知れぬ善と悪
中流が宝石を買う見栄を買う
性格の不一致と言うきれいな事
判決を下す法官の無表情
自慢ではないかと自慢話する
胴上げの手が握りしめている妬み
札束に埋もれて人が信じられず
バトカーのサイレン逃げろと触れ回り
白黒をつけにバトカー出動し
知識だけ詰め込み心詰め忘れ

京都府 田中笑風

早朝の茶粥がうまい職に居る
面会へ切られた腹も見せられる
保険証ない治療費に驚いて
姉妹で来て四十のことに触れ
母の死がこんなに驚くものなのか
母に似るそんな他人とまた出合い
ボケの花まだ落ちつかぬ部屋に置く
定退のハガキ今日もまた来てる
住民票あるのに父は落ちつかず
異状なし人間ドックは面白い

浜田市 中川幸一

傷は浅い確りせよと言った嘘
何不足あつて柘榴の口尖る
ポツカリと浮く軽石も石のうち
草葺きの土間に掃省のハイヒール
三十分惚れた短気が待っている
暗闇が生む竹山の撥の訝え
裏生りの胡瓜にもある苦い意地
絢爛の舞台の底にある奈落
出る杭が叩かれながら自己主張
旨そうな匂いは出せぬコマージュナル

倉敷市 小野克枝

焦らずに小さい花を咲かせよう
一本の斧を離さず深眠り
見限った男が歩く花道よ
一枚の紙で娘を盗られけり
白足袋を履くといちばん母らしい
兵隊に使った時間だけ遅れ
同じ足跡を踏めとは言わぬ父
ペテン師が太い字でかく領収書
頂上で難民の数よんでいる
色々な形で雑魚が死んでいる

大阪市 小林トメ子

押してから母印の効果おののいて
無いことが知れてそれから気が楽に
鳥便り試験の苗に花実り
井池で玄人に化けてダース買ひ
クローバーの生えるてる駅で汽車を待つ
整列も一步の違ひ狂うなり
叩く真似する丈と犬知つて居り
始発バス貸切のような客一人
女医さんはぬくめてくれる聴診器
釣合ひの取れた話で手を叩く

岸和田市 吉水照江

トシネルをいくつ越えたか秋の山
聞いてすぐ忘れる歳を笑い合ひ
十代の孫の機嫌へさからわす
つくばえに雀の姉妹水遊び
春のバスニコニコとして手話の人
平凡な余生が欲しい御仏前
姑は自分の城を主張する
寝そびれて聞く虫の声月明り
方言の九官鳥は河内弁
アナウンサーさすが一番赤い羽根

八尾市 椎尾公子

広告の裏何時の間にやらメモが出来
コマージュナルの餃子が並ぶ食卓で
土地買つて家建てるまではや五十路
空港の住民パワーにある怨嘆
裏通り人間臭いお付き合ひ
裏道にスクールゾーンの白い文字
週刊誌賑わすスター又離婚
親ゆずりの音痴でこまる宴です
大の字に枕はずして孫達者
名物を物産店で選っている

唐津市 山下勝一

報道の義務で不幸を追いつづけ
借金を残さず父のお人好し
立春の日脚疊を追って伸ぶ
浮草も流れてるうち花が咲き
もひとつの顔はマンガとなる政治
贈り物昔は俺の部下だった
茶摘み女のベテランと言ふ鞭を持ち
妥協せぬわが子に己が姿見る
すぐそこに弥陀待ち給う十三夜
マスコミのカメラ涙の中を追い

唐津市 仁部四郎

良心を現ナマどんと吹き飛ばし
有名税請求あれば払いたい
お百度のように今月皆勤す
アメリカでサイズが決まる自衛隊
沖繩の海美しく嘘のよう
雪の夜は四十七士へ電話する
法廷を無口な人がふるえさせ
そとでですか善人ですか短気者
滞納の孝行高い方で焼き
禁断の注射社会の罪という

米子市 八木千代

忌のまえの十日に及ぶ火の指よ
ひといろの残る枯野の深さかな
しやばん玉空に溶けても生き延びよ
とても静かで笑うしかない雨蛙
稜線をみつめて瘦せた指鳴らす
旅の町このままここに住めそうな
月満ちて欠けてわたしを突き放す
なくすものなくしてからの樹よ風よ
僅かながらルージュ減らして冬之道
この嘘はつき通さねば海の音

兵庫県 榎谷寿馬

一本の角大切に鬼老いる
一輪となつてコスモスときめきぬ
ともしびが消えるルノワールも消える
田舎みち好きで頭も良い女
紅の褌白布を汚さんとする鬼か
蒸発の妻を捜している演歌
ジェラシーの海へ木馬を走らせる
内裏離日記をつけたことがない
せめて今夜は主役になろうホルモン屋
足の裏で私の人形だと解る

大阪市 正本水客

真似するなするなと滝の水が落ち
海は死にますか少しまだ嘘がある
石にかえる日を石仏は待っている
寶石の伏し目がちなる日もあらん
向い風 夫婦で後や先になり
人みな美しく見え雪降り積みぬ
池の水満ちきて菖蒲媚を持つ
精霊流し心を残す動きよ
野呂川源流 秋の限りの色を持つ
水が痛がつている湖岸のコンクリート

高槻市 若柳潮花

ほつれ毛が欲しいかづらの髪の艶
肩先へ噛みつきそうなザクロの実
囲われたマッチだ風よさからうな
眼のふちに舞台の紅が残る朝
水仙の白を絵筆に盗まれる
どこへ行く水かつつじの色を乗せ
舞台火に燃えて二匹の蝶が死ぬ
どのように逃けても影はつきまとい
肩はすに落ちて女の呼吸する
黒を着て帯は少うし派手にしめ

高槻市 竹内 花代子

家計簿に私の素顔覗かせる
くす玉が廻る秋風誘う窓
家一步出ればお金もついて出る
ファミンゴお前も飛べぬ羽根にされ
美粧院私の顔にしてくれず
寒寒と楓ちちんで苔へ落ち
海そこに見えてる旅の湯にひたり
春の顔見せに雀が窓へ来る
啓蟄だ私も散歩に出かけよう
猫の目が小鳥の動く方へ向く

尼崎市 丹下 玉子

初鏡いつもの顔に紅をひく
紅梅が咲いてまわりの風なごむ
絶筆の質状の整理の手を休め
老木の柳の新芽に励まされ
葉桜に春の余韻を聞いてみる
三月の街はユトリ口色に溶け
嘘一つ苺の赤にとじこめる
UFOの謎に少年夢を見る
梅雨明けは嬉しこわしの稲光り
秋の野を駆ける夢見る車椅子

守口市 野呂 右近

子が走り孫走るなら機打で良し
物余り心が飢えて来た末世
咲き誇る花にも寒暑に堪えた過去
言い過ぎも言い足らぬにも残る悔い
辛せは働き過ぎを叱られる
天辺に来てうろたえる蝸牛
亡き友を偲び写経の筆を取る
節くれた指に隠れていない嘘
春風が花追う蜂になれと言う
自選句のむつかしさ知る雨の夜半

大阪市 岡田 ふみ

貸す金を持ってまで行くお人好し
人情がまだ残ってた裏通り
娘の家のお酒は禁酒を忘れさせ
指定席女の旅の賑やかさ
温泉に痩せた肥えたと羨しい
とるまでに切れた電話が気にかかる
老い二人暮して小さく鬼やらい
父が呑むお酒美味いと限らない
郵便も素通りをする老いの家
お見舞に行ける幸せ秋日和

橿原市 岩井 本蔭棒

一べんは連れたいものに美人秘書
目出度くはあるが三人目も女
みの虫よ宇宙の謎が解けたかね
鳶職の不覚地面でけつまずき
情炎の軒で風鈴ひとり言
地獄絵の亡者の中に僕が居る
先生が殴られている民主主義
渴いてる男と女すれ違い
諸行無常お布施も上る物価高
糟糠の妻同権を喜ばず

倉敷市 稲田 豊作

紫の袴も恋も遠霞
生者必滅そんな約束つい忘れ
誠実一踏貧しい影を曳きながら
ぬかるみの果てるともなき道と知り
妥協点探して生きる狭い道
知恵袋どこかに穴があいている
完全癡矯めてすばらも心がけ
ひとり居て漢方薬の匂う部屋
物の値よ汗の代償だけ安く
子の先きが見えて近頃孫自慢

出雲市 吉岡 きみえ

花火師を裏切るものに不発弾
狂わない時計がわたしを叱咤する
愛染の色もあせて夫婦箸
袖着て女四十の香を放つ
皿割れて愛とどめるすべもなし
イミテーションそれだけの愛かも知れず
狂い咲きそんな日もある女坂
茶碗籠女の葉の涙ため
なみだが落ちそうだから空をみる
子を寝かせ夫婦で広げる地図もあり

尾道市 八木 秀水

父の愛一喝の目が濡れている
追い風にロマン秘めたる縄のれん
愛の余韻男はぬるい湯につかる
背信のシャネルの余韻残ってる
妻病んで淫らな夢に覚めている
如才ない女破調の笛を吹く
夫婦箸欠ける日想うときがあり
臆病なわたしは男目で犯す
見えずいた嘘がころげる老いの坂
わが影に辿る思い出日が沈む

鳴門市 八木 芳水

新任は前後左右に気を使い
エリートが金に溺れた日の弱身
冷えた茶をぐつと飲み干し腹をきめ
足音に迎える言葉用意する
ご先祖にすまない酒がやめられず
一徹な祖父も孫には顔ゆるめ
主張して見たが結局平の椅子
肩書をはずした老後頼る趣味
先生と呼ばれノレンが嫌味言っ
逃けた運追いかけてみる酒の酔い

島根県 西村 早苗

日記空白にくしみをうずめてる
押し花に記憶を戻す古い傷
真剣に話す日素颜だけでくる
悪人の骨が善人並みに燃え
乗り気だと見たセールスがふと座る
手の伸びる距離に温い眼冷たい眼
流行を無駄だと思っ日はないか
洗好みおんな盛りだというに
汗を拭くしぐさ涙腺にふれる
某月某日酒のさかなになつてやり

米子市 小西 雄々

憎しみに変えてはならぬ愛を抱く
無駄飯は食わぬつもりで管理職
定年へほしい敗者復活戦
厄年を無事にすごした出勤簿
後厄の自重へ欲得ない歩幅
反省へ明日の天気を感じしよう
根回しをして核心に触れてくる
熟年へまだ助走路をかけ回り
ライバルへエンストなどはしておれず
情熱へアダムとイブが駆け回る

高知市 北川 竹萌

物借りに来ても一言多い人
裏町のお皿返しに湯気乗せて
パン工場美味い空気にとりまかれ
釘一つ打つに大工の今昔
お天氣がよくて洗濯棚が売れ
妻の愛程よい糊のシャツを着る
師と呼ばれ遠い記憶に辿りつき
飯縫いへ女の夢が翔んでいる
のど自慢故郷へ届く鐘が鳴り
組板の凹み沢庵手を繋ぎ

香川県 岡田拳法

汚職屁の河童議員でござります
此の子等が居てどん底に明日がある
なんでもぬかせとグンプつつ走り
考えを変えずに名前だけを代え
学校で教えることは父に聞け
公平に分けろとなまけものが言つ
革命の怖さよポートビープルよ
人民を捨て革命誰のもの
平和呆け日本は脅しやすい国
国鉄の労使は観客席にいる

新宮市 辻はじむ

頂上をめざして毬は転がる氣
ゴキブリを見逃してやる盗み酒
橋上で蹴られて石は思案する
泥んこの子供子供のド真中
省略も添書もしたい古日記
知らされぬカルテはドアの陰で泣く
大欠伸拾つてくれる妻がいる
ちっばいな庭にも天下の春が満ち
童心を還してくれる赤蜻蛉
星になる夢は消せないシャボン玉

奈良市 森田カズエ

参道に昔馴染みの綿菓子屋
手術台入れ歯はずした顔哀れ
寡婦であり母で氣強い世帯主
舞台では肥えているのが笑わせる
老いの目に余生の文字が惨めすぎる
車椅子の参加へ空も晴れてくる
空白のままでおきたくない余生
本心を盗みぎきする聴診器
深爪の痛みこらえて被る仮面
薬師寺の塔へ一刷毛雲流る

岸和田市 原さよ子

八方美人みんなに不義理してしま
知恵おくれの子に人情教えられ
涙流ももみじもよいと言う茶店
お天気もお客のせいにガイドさん
こだわりが吹とぶ朝のおはようさん
ふるさとの虫は夜昼鳴き続け
過保護だと思ひながらも親心
ちよっぴりの株新聞にあるスリル
冒険をしない夫と地味に生き
穏やかな海で私をとりもどす

高槻市 市楽種子

花見酒ママは浮れてババのびる
初孫の片言真似して舌をかみ
願掛けにチョッピリ賽銭ふんばつし
吸殻を溜めて待つてる片想い
マメな孫来て盆栽の置場変え
サングラス掛ければ美女とほめて逃げ
菊人形花に酔わねど人に酔い
待つ場所を間違え互いに腹を立て
着ぶくれを残して行きし通勤車
持参金付けて決まりし嫁ぎ先

大阪市 和田旋鳳

亡き母の味しみ込んだ鉄の鍋
ルパンクに皇軍が居た拳手の礼
古本の中に出てきた要務令
信用も根性も足りぬ三代目
癖のある面魂で出世せず
徳よりも万の赤字に身を削り
雲にのれ流れに乗れと母念じ
嘆かわし世相をうつす変り難
お早ようの顔ジョギングの汗を出し
名調子ささやき洩れる披露宴

高知県 山下登舟

大欠伸北斗に吐いて座にもどる
看護婦が白衣で作る雪だるま
下駄にあごのせて小犬のうららかに
見送りの孫にもうった投げキッス
麦茶煮る匂い二階へ吹き通る
のぞき込む笑顔真白き看護帽
みの虫の付きたる儘を床に活け
儲け事望まず過疎の一軒屋
ランドセル土堤に並べて土筆摘む
退屈と言わず欠伸にふしをつけ

兵庫県 辻文平

明日を待つ漬物石が重すぎる
伝言板小さな傷が添えてある
気まぐれな言葉は聞かぬ小抽出
ゆきずりの話をきくらうにぎり飯
麦を踏む両手はどこに置くべきか
表札を一人増やして春になる
さよならと言えば明日から敵になる
母にして女を捨てぬぬか袋
誰もいないと泣けない女です
鈴つける役逆らわぬ母がある

檀原市 西本保夫

明日からは囑託として通う道
平社員の間はどこにでもおける
囑託になる日を妻に打ちあけず
まだホクの名前が残る設計図
囑託がかつての部下に使われる
誰も居ぬとこで囑託年齢をとり
あつさりとの場は悪者になる勇氣
栄転でも無いのに拍手で送られる
口笛を吹いて屈辱たえている
惜しまれて去る限界を知っている

島根県 大森孝華

ふと詩性浮くか少女は風に付つ
さりげなくつけて平和の錠握る
コロコロと心に添わぬ玉の露
軽石を意識しながら又拾う
駅で待つ雨に降られて待ちぼうけ
技術には遠くおよばぬ負けて勝ち
母の手のあるふる里はぬくい風
愛された証しへ競う菊花展
菊の香へしみじみ友情語り合い
秋しずかたたらの里が語りかけ

大阪市 横山静子

お揃いでお出かけですかと妬いている
エプロンの似合う娘にして嫁にやり
母逝ってさむざむとあるお雛さま
姉いも揃って明るく母の忌よ
子連れでも娘で通る実家の灯
小言いうたあとの鏡も不満そう
厄年の嫁に魔除けのものを買う
コート着て少うし隠す太り過ぎ
背なの子の温みへ遠い夢を抱き
古い竿朝顔の手に残しとく

大阪市 花岡千世子

回り燈籠ゆっくりまわるもの思い
老いの身の孤独に耐える花を活け
孫も米ぬ祭りて夫婦はずまない
風鈴の音にさそわれうとうと
気に染まぬことは夫に結びつけ
玄関で長話する妻の客
頼りたいのにたよられている暮し
物価高義理はつかりも言うとれず
木枯しへいっそうわびしい下駄の音
人の世の情けを思ふ萩の寺

大阪市 堀 いくの

母からの帯がよく合う五十すぎ
花便り家事の手順もはかどつて
甘酒の店もコースに入れておく
輪若く告げてネクタイ選ぶ妻
鏡り待つ花それぞれ息づかい
眼を閉じて記憶の路を筆にする
晴れの日の帯の苦しさ忘れてる
俄か雨犬より洗濯物が先き
御自慢の竿に魚が寄りつかず
宇宙から帰る時刻の正確さ

大阪市 鈴 木 節 子

息子との距離を埋める餅をつき
三面鏡斜めに心のぞかれる
雀の声がさわやかな霜の朝
宿帳に旧姓を書く一人旅
合点のゆかぬ言葉溜めて米をとぐ
梅干しの壺を捨てるに捨てられず
糠みその手入れも姑らしくなり
つつましく余生を残すつげの櫛
ごみ籠の中の私を振りむかぬ
茶を入れてわたしに戻る昼下り

大阪市 村 上 田 鶴 子

臍の緒がカラカラ鳴るよ亡母の鈴
そむかれて苺の赤を疑いぬ
自愛増す花火の後の闇について
指切りをしてからともしびを点す
線引けばみんなが向う側にいる
折紙の角々を折りわれをおる
胴上げでほうり出されている不安
少し不信な夫のネクタイ選んでる
爪丸く切つてわが身をいとおしむ
わたしの中で亡母が小さくなってゆく

大阪市 柳 原 静 香

夫婦かな聴こえぬままで通じ合い
風邪の床ぬけると桜が咲いていた
くたびれた足を労わるれんげ草
ひとり来て団体客にまき込まれ
聴こえない悲しみはなし花時計
錠剤を数え五月の空を見す
母の日のなかつた亡母へ花を切り
仏光院両手ある身の恥しさ
しよせん内孫ではない去に仕度
タンポポも芹も埋めて家が建ち

大阪市 日 阪 秋 子

明るくて叱るに叱れぬうちの嫁
ぶつかつてやつと分つた胸のうち
雑草とわかつたところで引き抜かれ
亡夫には気兼ねする程輪をとり
ご近所の留守引き受けた路地の犬
無欲でも戴くものはいただいて
気がつけば衰しい財布の握り癖
嘘言えぬ気性が重荷になることも
野仏にひと浴びさせる雨が降り
性質をいつか眉間に刻み込み

大阪市 西 村 芙 佐 女

激流を底う夫婦の竿さばき
柱時計あの子の生まれたときの音
生きざまの見える雷雨が通り過ぎ
旅にいて妻は夫の茶碗買つ
夫にも染まらぬ心の隅を持つ
この街の機械の音を愛す父
夫とはつきない夢をみたおとこ
梓の中妻はケロリと生きている
自転車で出た子を思う午後雨
女一人歩く細道みつけとく

大阪市 鍛原千里

組紐の強さ女の中にあり
 ペン持てば真実の壁につき当り
 夫婦のバズルやつと形になつてきた
 餅焼けば反抗期の子も寄ってくる
 浮き雲にいい事あるかと聞いてみる
 夫の癖私に移つて子にうつり
 痛い足我慢しつともお洒落する
 闇の中自分をしばる鎖切る
 沢庵を噛めば孤独の音がして
 旅馴れて伊達巻き一本入れて行く

大阪市 山田妙子

茶柱へ明るい朝の幕が開き
 春の声一枚めくれれば聞えそつ
 大きめのダイヤがほしい十年目
 娘の姿私の過去を見てるよう
 子をだしに楽しんでるみかん狩り
 反抗期ハイと答えて横を向く
 ふる里の柱の傷が喋りそつ
 あやかりたくて上手な人のペンを借り
 サングラスちよつぱり嘘もつけそつな
 安うけあいを後悔している床の中

松原市 北野久子

姉妹も五十坂から気が揃い
 筆談に慣れても佗しきつきまとい
 うさばらし結局夫のものを買
 居て欲しい嫁いでほしい娘を眺め
 孫抱いて行く日は低い靴にする
 聴えないけれどともかくハイと言
 孫背負て見られたくない人に逢
 退屈なときは私が病んでいる
 お姑へ笑い薬を考える
 黄昏は旅の女を主婦にする

富田林市 藤田泰子

本読んで恋をしたような気になつて
 私から抜け出してゆく影法師
 箱彫つて私の部屋は箱の中
 終点のない電車には乗れなくて
 ぶつかれば木っ端微塵になりそつで
 束縛も自由も欲しい欲ばり
 咲く花も散りゆく花も一つずつ
 弱虫が泣き止んだとき強くなる
 交番は指名手配がお留守番
 鎖切る勇氣ないから黙つてる

羽曳野市 佐野白水

曜日ばけわが家毎日日曜日
 言いたいこと言える老友十二人
 釜めしの釜で三色すみれ咲き
 妻の留守独り暮らしのらハールサル
 隠し芸馬鹿にならねば出来ぬ芸
 医師悲し吾が子の死期を知り過ぎる
 替之玉を伴れて桂離宮見る
 傘させば紅葉が見えず濡れて行く
 指切りの孫に明日あり星流る
 みそで良しすまし尚良し雑煮好き

大阪市 中川滋雀

柏手の芽える朝なり今日がある
 合掌をほどけば欲がこぼれ落ち
 胸に掌をあてても昨日は昨日なり
 石を積むその日その日の証し積む
 命日の菊の白さに母をおく
 空白のページにくすぶつてる火種
 夫婦して暮色に祈る夢がある
 聞き捨てにできぬ悩みを背負わされ
 噴水のいのち溢れてくる白さ
 玉手箱意外な終り詰めてある

桜井市 岩 本 雀踊子

王様の嘘がまっすく通される
未来凶へクルクル回す夫婦独楽
本当の味方はゼニをほしがらぬ
一枚の辞令にはすまぬ毬になる
学歴を持たぬが日本一の父
憎めない男のくれた夢がある
花ふだへ旅芸人は風になる
やどかりになった男の人嫌い
酔わせてやれよと悪友のあたたかさ
仕合せのうすい女の紙人形

大阪市 津 守 柳 伸

それからの展開を知るドアチエン
笹舟がゆれてメタカは群れになる
しあわせを喜ぶ友がいてくれる
ペーソスは女あるじの昼と夜
全快を誓った筈の千羽鶴
悲しみの深さは口を閉じたまま
淋しさは問わず語りを知る夕日
タバコ吸う鬼も知ってる火の用心
前向きの人生だから逆らえず
嫉糸はずすと世間見えてくる

寝屋川市 江 口 度

モデルある日嫌いな靴をはかされる
金魚ゆらゆら昔城あり廓あり
春の森ぬけると青い影法師
クラクシヨンみんなが鳴らす時ならず
少しうぬばれがあり易を見て貰う
梅一輪の方へ寝返りうつ蛙
すこぶる元氣薬の方が風邪をひく
蓮の花開く難問一つ解け
野仏にからすがとまるノーエ節
退院の日の点滴は数え唄

松原市 谷 垣 史 好

春になると文房具屋になりたくて
牛井の満腹感と昼の月
なすり合い敵は見えないとこにいる
笠智衆も僕もうとくとつと秋日和
駅前ポストは早く着きそうな
男装の麗人が飲むレモンティ
アランドロンと僕の違いを考える
死んだ筈の女が匂う闇の底
手さぐりで探すと冷たいものに触れ
人生のゴールを飾る美辞麗句

松原市 玉 置 重 人

野の仏飛鳥はやはり歩くところ
行くところがある幸せなラッシュだな
立場が変わった意見も変わった
異状なし人間ドック出て背伸び
寿の筆の跡から春匂う
失業中もつたいなくも箸の位置
悪友がひとりいるクーデター
ジョーカーを持つと浮足立ってくる
臨月の嫁の瞳に負けるべし
どん底の底の底まで見た自信

守口市 羽 原 静 歩

土に還るいのちぞ春の酒を酌む
マンシヨンに日の丸明治が生きている
大和には大和のルージュ曼珠沙華
秋そぞろ夢二思えば尚そぞろ
ひたぶるに心は燃えて阿蘇の秋
廃校を惜しむ記念樹散り止まぬ
無一物無尽蔵落葉しきりなり
風邪ひくな水雨降る日の野の仏
水俣の海は返らぬ老いの冬
歳月をつなぎあわせて忘れたり

河内長野市 井上喜酔

反骨へどうにも止らぬ阿修羅の血
信頼へ愛の深さは限りなく
白羽の矢満場一致で飛んで来る
限られた人生しあわせ傍へ置き
親切は喉まで出ても引っかかり
模範とは制服着てから馬鹿になり
赤い灯に魂抜かれて夢遊病
伊勢エビは安いクーボン顔見せず
組板へのれば鯉より取り乱し
妻の顔今日も背中へ靴すべり

高槻市 田崎あき子

今日からは別別の道子の門出
困らせた子との暮しを懐かしむ
テールルの冬へよく合う桜草
一人ぼち呟く金魚見ていたり
冷房を碧のようにして読書
ビニールブルー幼児とスワン泳いでる
捨てて犬を育てて運がつき始め
気まぐれに可愛がられてなつく犬
饒舌で別離の涙隠しおり
職人の技術に底の無い惨さ

寝屋川市 稲葉冬葉

三歳の直感母の手離さない
肩に手の温りだけが残ってた
香水を選ぶ女は妥協せず
地下街へぬける男の無愛想
パン一つ買う子が置いたにぎり銭
待つことに慣れて女のしたたかさ
父の手で結ぶゆかたの縦結び
紅さして花活ける心に嘘はない
青春の愛はちぎれる鳳仙花
自由っていいなあ歩きたくなってくる

大阪市 西出楓楽

道ありて進めば進むほど険し
人少し憎み闘志を湧き立たす
姿見がだんだん憎くなってくる
一生涯大輪の花持ち居たし
ハンカチの隅きつちりと妻の自負
長短所トータルすればみなよい子
子のための踏絵はしかとしかと踏む
帯少し派手にし姑の形身着る
母の髪わたしの降らせた霜もある
欲得を追えば行きつく枯野原

守口市 村田瓢太

新聞種になった不幸へ寄る善意
猥談に邪魔な真面目が一人居り
立話まだ続いてる市場籠
本当のことを言うから角が立ち
天狗の寄合い互の鼻が邪魔になり
ジャンジャン横丁で何の肉やら食わされた
年金では悠々自適もして居れず
血のつながり確かに見つけた孫の癖
敗けて勝つ人生の機微知るも齡
ストレス解消か女の長電話

東大阪市 竹中綾珠

遺影拝む心を風が吹き抜ける
遺影笑み黙って聞いている独り言
だまってる亡夫ばかり見る夢の中
夢で逢う亡夫の無言に腹が立ち
肖像画に話しかけつつ日を送る
後姿亡夫に似ていてハツとする
亡夫の夢醒めずにはほしいと又眠る
忘れ度い忘れ度くない亡夫の事
天国でも主人正義派くすすまい
ひとり居の一日言葉出さぬ日も

大阪市 大野 武太

落城を背に影武者の役おわる
目先利く男友情すててゆく
釘をうつ音で家主がやってくる
サラ金の催促二階へ突きぬける
別件がないので幹事おちつけず
数学の無限学者にまかせとく
冬山へ軽い装備がくやまれる
助教授が婦人公論読んでいる
月賦でも買えるタイヤは知れている
惜しまれてばやきつつ人生幸朗

尼崎市 矢萩 貞子

旅をして行く先々に別れあり
嫁しゅうと誤解がとけて腹がへり
編物に寸暇惜しんで日が暮れる
告別式冷たい椅子で弔辞聴く
名園の噴水たかく虹つくる
ふと目ざめ寝息をたてて夫がいる
山頂で昼寝をしたいい時もある
道のりは遠くてもよい孫恋し
お月さま雲のシャッターしめたまま
考えを語れば夫も同じなり

奈良市 宮口 笛生

雨しとど列島春へタツチする
のめばのめそうで一升びん据える
自由時間女は鏡の前に立ち
寒い夜の熱燗妻を裏切れず
お賽銭はずんでみくじ凶を引き
人みんな時間忘れたミナミの灯
警察大手柄たてたい姿なり
面接で減私奉公誓うてる
相性の悪い夫婦でよく続き
助手席で妻の運転危なかり

姫路市 大原 葉香

神主の杵は神代の音で鳴り
アンテナを下ろし三猿主義で生き
犬に服着せて女の閑多し
老いの坂ここまでおいでと喜寿米寿
空というふるさとがあり団地族
戦争は嫌だが軍歌よくうたい
思い切り飾って花は虫に媚び
後退を知らぬ秒針だから好き
レントゲンその奥の傷かくしてる
空缶のすてられたとこ春芽ぶく

米子市 田中 亜弥

ベレー帽恩師の頭脳まだ老いず
薄れ行く意識にも髭伸びつづけ
活字ではさまにならない出雲弁
立読みで教養少し身につける
小心な割に大きな下駄の音
ダム底に先祖がねむり電気つく
天を突くように狂人よく笑つ
弓なりに野草は風に逆らわぬ
情熱の直球脇見などしない
影り師の瞳非情なまでに肌をさす

富田林市 和田 維久子

枯枝も芽吹けと春の風が吹く
春愁やひとりひとりを持って余す
騙すより騙されておくそのゆとり
人生の壁破れども破れども
信じ切る俤せ人間味に触れる
日焼けして働く父に憧れる
美しい犠牲母の髪白くなる
無の境をさまよわせてる秋夜長
倅せは私わたしの手でつかみ
星霜の重みへ松のひとりごと

大阪市 津山刀水

点数を稼ぐ尻尾がちぎれそう
正直に生きたい肩をたたかされる
平凡な母を愛した父である
ふるさとで行方不明の俺に遭つ
パンザイをすれば積木が崩れ落ち
旅行から帰ると鳴っている時計
泣きたい日もあろう人形同じ顔
冗談を許せない日と許せる日
よいことをするのはかみをふと感じ
土砂降りの中で男の嘘を聞く

松原市 本多洋子

さあ出勤鏡の中で主婦を捨て
久しぶりに逢つたに主人や子の話
お噂はかねがねなどと闘志みせ
校庭の桜チャイムの音に散る
燃え尽きるまで忠告は無駄のよう
道連れはだあれもない向い風
真直ぐに立つと涙はもう出ない
初霜に母の腰痛問うてみる
帰り道だんだん主婦の顔になる
口紅を少し濃くして梅雨過ごす

大阪市 吐田公一

別れから女おんなをとりのどし
従順な妻にも母の芯があり
秒読みとなつても不惑まだ知らず
底がない勘忍袋を母は持つ
留守番が好きと老母の反抗期
歩き初め大地が揺らぐほどに踏み
たかが歩と踏んだと金に泣く王手
大さえも欲得すくでワンという
青春の拡がる夢に梓はない
呱呱の声若い父への或る序曲

大阪市 西森花村

お互いの誤算にふれず老夫婦
決算に桁が違つてた老年期
老人のやつと起きてもよい時間
老人の居処点だけ許される
OB会椅子取りゲームのように減り
肋骨の数だけ木枯し突きさささり
ロクサーヌに逢えぬシラノの養老院
父の日に子を偲んでる養老院
我が道を行く犬塀の下を掘り
回転木馬何日か追ひ抜く意地を持ち

島根県 星野侑正

主治医には内緒漢方薬を飲み
包帯の白き麗人目立ちすぎ
包丁のリスムで知つた娘のきげん
貧富の差見えぬ夜景が僕は好き
嘘言えぬ男同士の日やり場
胃袋へカメラすなりとは降りず
乾盃の手もが狂つた紙コップ
聴診器胸のふくらみそつときけ
十二月の風に逆らう君も馬鹿
来春は標的絞つて射てと言つ

大阪市 杉本智慧子

新聞を読んでるふりしてみんな聞き
時差ほけに熱い梅干茶がうまい
さしすせそ女の灯り確と付け
姉妹三人寄つて老後の話など
初夏の匂青い紅葉を添えて出し
十円安い土曜の豆腐買いに行く
水仙を切ればあふれる水の色
バックミラーびたりとついて来る車
蒸シタオル時が暫く静止する
海見えて外人墓地は暖かし

河内長野市 糸 谷 春 草

空で見るきれいな鳥の地震國
明日また来てねと握手して別れ
相乗りの單車ひやひやさせ走る
冷えた茶を飲んで相談まとまらず
空の青海の青見る地平線
母子家庭母に散髪してもらい
湯もみ唄流れる窓は吹雪する
エプロンの腕で押売追い返す
ドライブの二人華燭の日がせまり
看護婦と歩けば浜の風も春

松原市 佐 藤 藤 子

生きてると思う布団の陽の温み
日本酒とワインの違いもつ夫婦
苦手なこと苦手と言つて楽になる
仏壇の灯りで母のいるを知り
わたしだけ主婦専業でいる焦り
疲れたと言いつつ女よく笑つ
失敗を気にしているなよく喋る
気がころが分らずベット裏めておく
横顔にこんな寂しい母が居る
この夏も着ない水着を仕舞いこむ

岡山県 浜 田 久米雄

灰になるまでの色気を持ち合わせ
八十を越せば天寿を全うし
まだ生きていた寿命とは恐れ入り
恐ろしい現実医者が死んでゆく
酒のある限り自動車酒を飲む
ネクタイの嫌いなわけは首を締め
猫の手を借るとは猫も腑に落ちず
役人も巡査も人の血が流れ
二級酒でよし年金の酒の味
隙のない男きれいな靴を履き

和歌山県 天 満 三千代

村中を祭りの音にする太鼓
夢でもよい賭ける子のある張りで生き
陽だまりで女冥利のかましき
底しれぬ沼の下水澄んでいる
あきらめた心の底で身もだえる
他所ゆきの顔をさがしている鏡
横向いたままの返事が突きあたる
満月へ門灯点滅して拗ねる
平凡という幸福を忘れかけ
指きりの指に本心覗かれる

大阪市 川 口 弘 生

三日月に祈る日もある離れ猿
子の頬を叩いた手にある痛み
ふるさとの鷺に紛れた摩太郎
お釈迦さんも一三夫の朝寝には苦笑
傷心へ神は時間という処方
孵卵器で生れ産卵機で果てる
友ありて山頂印の年賀状
四ヶ月に誕生日がある華やかさ
久し振りの友へ指輪は嵌めず会つ
繋がれた犬を野良犬見て通り

泉南市 大 谷 弘 平

ぶらんこの女の足がそろつて
本借りにくる友だちを待つている
一人来て一人で吊るす拝み絵馬
酔っている河童地下鉄に乗っている
花びらを一枚のこす碌でなし
標的を二三歩前で撃つ女
偶然が偶然を呼ぶマツチの火
電車から手を振ることも久しぶり
ポツンと見える駅雪が降っている
ましがえはすく零にする計算器

富田林市 岩 田 美 代

機をつかむ女かるーい音をたて
気弱な一日で萩を挿している
コーヒーの熱さ神経つなく刻
痛い程明日を知つてる絵空ごと
秋晴の縁私の刺が抜けそうで
信じねば梅もらつきよも潰けられぬ
血圧に男の哀しさ見つけたり
はなれ雲理由がありそにはなれてる
ずるい男の釣針に餌がない
ゆく雲に私の終えたこと告げる

長野県 高 峰 柳 児

見せしめにされて落ち目の身をかはい
過疎せめて豊かな民話盛り上げる
引退の花道天下り身をぬくめ
珍らしいサーピス罌がひかえてい
その誤解とけて笑顔になる拳
神棚に灯をあげ迷いやわらげる
風化した民話息吹き返す過疎
灯下親しめばいきなり眠くなり
自嘲して尚更取柄のなさを知り
法話説く住職世俗と距離があり

米子市 石 垣 花 子

腕を組む父の背中がまだ迷い
バラのトケ花泥棒をあわてさせ
相好をくずして孫の馬になり
演技なぞ出来ぬ男に運がむき
信じてもおらぬ神話で喰うて行け
手さぐりの指の隙間を運が逃げ
妻ある日忘れた筈の傷にふれ
別々に初老の夫婦バスを待ち
陽に向けて何回目かの糸通り
首に鈴付けて名跡継がされる

大阪市 村 山 光 輪

実力にブラスアルファが彼の地位
ボロクソの批評最中ホームラン
タンポポも食べたであらう牛引かれ
末の子も金魚すくたと自慢する
おしめ干す手さばき妻の座固し
幼稚園育ちを見て歩いてる
じいちゃんと競争で言う里帰り
ステレオは清元雨の日曜日
手造りの茶碗人柄しのばれる
大声で名前をよんでほしい仲

八尾市 松 下 蕉 露

曾根崎署每晚違つ虎を飼う
調停は愚痴話から聴いてやる
サラ金の調停エリートでは出来ぬ
頃と見て調停委員案を出し
一流の弁護士金釘流で書き
判決文わからぬ日本語こかしこ
裁判官酔えば女の手も握る
裁判所でも鬨争のピラ貼つてある
食堂も裁判調となる会話
寒木瓜が裁判所に咲きました

大阪市 山 根 いつを

子宝をさすかり指の石外す
運のない時も母だけ温かい
俺が買う僕が払うとビヤホール
台風に糸瓜辛抱し通した
浮き沈みじつと見て来た古箏笛
賑やかな祭淋しい人も住み
日の丸がはためく鳩も舞い上る
なだらかな山は行者の意に添わず
組み合せ出雲の神に間違われ
生きてゆく恩に一つも報いず

吹田市 西川景子

おそ咲きの初恋病癒えし春
マルチーズ老いてもリボンつけられる
風みどり樋口久子になる帽子
釜めしも日本ラインのしぶき浴び
珍しい苗字ルーツは同じ村
猫の家と聞いてもらえばわかります
口紅をたしなめられて抜糸の日
一年で笑い話になる手術
湯上りの肌さましつつ読む由來
豪雪にはや辛酉の兆しあり

八尾市 山下みつる

父も子も働いていてなお赤字
物忘れなかなかない老母がいる
逆流に負けるものかと初日の出
一言の重みかみしめ早や三十瀬
豆狸可愛くだます役で出る
懐しい地名地図から消えて行く
みそ汁のない日が続く妻の留守
河内野の宴 裨脱いでから
コンテスト美人の脚を測る役
勘忍の緒を切る時期を見失ない

八尾市 宮崎シマ子

寒気団頭上にあるに立ばなし
野良犬よ一緒に渡れ青信号
囀りに新聞少年励まされ
一枝が欲しくてバラを讀めちぎり
言いにくい事あり鏡を先に見る
白も黒もなくてはならぬ綾錦
貫禄か妻の座に居る小女房に
白髪一本抜けて派手目の服を着る
背を向けて心はこちらへむいている
盲点をつかれ煙草に火をつける

桜井市 河合茂雄

先頭を走れば走る程孤独
どちらかに歩幅を合わす夫婦駒
命棒の二つは持てぬ渡り鳥
馬鹿にされ馬鹿で通した丸い石
闇討をかけて男の名を捨てる
風紋は風が歌った音譜かも
影武者は所詮味方のない命
こんな世に誠の旗は誰ぞ振る
切符握って一寸先を考える
どの顔も上を向いてる吹き溜り

大阪市 北勝美

つかの間の人生星が笑ってる
人生を楽しくして四季の風
残念のこぶしを神は見すてない
釈迦の耳億の悩みを聞いている
千手観音一手一手にある祈り
病床の二三歩歩く妻の肩
一日がこんな静か妻の留守
散らばれ白も醜いごはん粒
年金を補うくらしのガラスぶき
元日を神に詫びてる旅の留守

熊本市 北川一進

快方にむかういびきを見守られ
鼻と鼻たしかめ犬の初対面
プロボーズはつきり言えた赤電話
網棚に忘れ帽子の一人旅
医者の際に希望があった回診日
ガイド嬢城へ上手に話しかけ
郷土史の中にのれんは生きつつけ
紋付が背なで眠った七五三
窓の灯の向うマンション派手に立ち
ポロポロのシャツは舞台の晴姿

三重県 川上 溪水

人間の知恵が上下の差別する
勇み足になるまい詰めの言葉撰る
冗談半分その半分が許せない
おもしろい思い出となる恥がある
母が居て毎日狂いのないリズム
ついでとは思えぬ仕度の母が来る
新妻の名を呼んでみて用もなし
遅刻してせめて走って行く誠意
保険きく入れ歯の奥がかみ合わず
助け合う夫婦決して口にせず

東予市 小山 悠泉

耐えている妻に小言を言いそびれ
ふびんだと思う妻から感謝され
妻無心好きなドラマを見る限り
子の事になる譲らぬ妻となる
どちらへも合槌を打つヤジロペー
君が代へ父真直に立ち上り
もぐら取り仕掛けて春の種をまき
木枯しの詩電線が眠らせず
風頼るヨットに風のないあせり
貧しさに負けまい朝の靴磨く

宝塚市 傍島 静馬

裏切った友にも一度貸してやり
ひとすじに道をきわめて世にうとし
長電話指でそこらを書きなぐり
何よりも阿呆になれという見舞い
ゼンマイを巻いても心がゆるんでる
寝つかれぬ夜はそこらが痒うなり
憶い出のどの頁にも酒があり
北山杉気ままなポーズ許されず
受付から奥を日参まだ知らず
涙まで出してうまそな大欠伸

倉吉市 奥谷 弘朗

平凡な日々は夫婦の愛あふれ
決着は玉虫色でごまかされ
二人きり言放題にすぎる日々
竹割った気性で妻を案じさせ
どっちかと言えば動より静の人
顔出して置くだけでよい顔に成り
辻つまを合わす手腕は別に持ち
菊鉢に心機一転茄子を植え
案じてもくれるが愚痴もたんと言つ
明日あるを信じ時計のネジを巻く

米子市 政岡 日枝子

奥様のため息抱かれて猫は聞き
負け犬が身振り小さく雪はらい
どうせ嘘知ってと言わせる朝帰り
装えば華麗に鏡化けて見せ
鏡いきいき子連れの男に春が来る
道化師の耳嘲笑を聞きわける
郵便で来るさよならにある背信
コンパクトひらいて女言葉選る
吸ってまたむなしく吐いて生きている
米といひ漸く私の今日終る

米子市 寺沢 みどり

住み慣れて円くくぼんだ妻の椅子
持ち慣れた袋とあゆむ細い道
子が癒えて空の深さを知らされる
白無垢を着せて恥じない娘に育ち
想いはるか笛の届かぬ位置にあり
葉の陰に虫一匹の雨やどり
シーズンに咲く花だから信じられ
ひと息をついた隙間へ亡夫の貌
狙を嫁に渡して急に老け
朽ちかけた橋へ必死の足預け

大阪市 中西 兼治郎

おれの浴衣あつただらうと友を泊め
駅程に自転車のあるパチンコ屋
手のひらを灰皿にして祖父達者
二三人晴着待たして着る晴着
素うどんをゆつくりたべる雨宿り
ピカピカの自転車こない安定所
下戸同志つぐまねだけの思いやり
友のない心へバーの灯がともり
老人のホームいろんな運が寄り
団結をちぎって渡す交差点

島根県 柵 みどり

子が眠るとんとん昔を聞きながら
真白なエプロン自我を主張する
石蹴ってバックボーンにひびく音
故里のれんげつむ野に帰る夢
老母の手にふれて休まる里帰り
虫の声鐘の余韻へとけてなく
物忘れするのも円い屋根の下
秋の葉へ一葉一色思いよせ
今日の日のをのぞく鏡へ賽をふる
罪一つおとして帰る寺の鐘

西宮市 藤村 女

老夫婦歩幅が揃う花の道
色っぽい噂に春の夜が匂つ
惜春の筆をふと置く風の彩
あまりいい月夜私を歩かせる
遠い日の郷愁母の結城着る
公園でひとり石蹴る影がのび
花しようぶ雨よ降れ降れ訣れの日
ある日ふと蜘蛛の巣作り見てあかず
むらさきのささやき枯梗露にぬれ
萩白く咲いて女がひとり住む

呉市 横田 英詩

合掌はひととき神のふところに
四肢踏んで男に賭ける夢があり
文机英知月より盗むべし
秒針チチチスランプを何故せかす
悲しいとき笑える人で世に負けず
夫婦円満セリフをとちることがなし
人の字のつかい棒に妻がいる
三つ指の指の白さに茶をよばれ
拝まれて添つた私が何故愚妻
すれ違ふ近所の奥さんみな美人

倉吉市 渡辺 苦句

大砂丘砂生きている飛んでいる
水生れ変り電流の波になり
つきあつてこの女にも羽根がある
顔に色すぐ出る奴だが好きな奴
大山で仮寝でつかい夢を見る
無為徒食布団の何と重いこと
いつ死んでもいい顔で鏡の中に僕
詩に惚れた因果死ぬるまで惚れな
言葉ひとつちいさな悪がすぐ芽生え
月光のぬくみ眉間に帰ります

柳井市 弘津 柳慶

桜から日本は春の姿なり
悲しみを抱けば海も悲しんで
隠し芸御苦勞さんと酌いでくれ
駄目な男さと生酔がからんで来
実社会一たす一とはいかなんだ
それからを女大胆に生きて行き
罪を悔い再出発の目が綺麗
耐えに耐えてそつと別間で嗚咽する
団扇まで合成樹脂の味気なさ
カスニ発寝床さわやかな寝ざめ

名古屋市 越村 枯梢

ついでくる影もやっぱり木偶の坊
句読点打てば未練が疼きだす
窓閉めて自画像像いのままに描く
燃え尽きて落ちる運命の流れ星
マツチ棒並べて夢の設計図
夜更けて影絵は腕を組んだまま
落し穴の上に漫画が描いてある
ウエルテルも悩んだ俺も悩んでる
血税は死の商人の手にわたり
コンバインの軌跡一直線に秋

米子市 雑賀 美世

駅弁に留守の夕餉をふと案じ
孫の齒を覗く茶の間の笑い声
初孫へころころはずむ毛糸玉
若き日の癖まで消えた老父の肩
恍惚へもう雑音も来てくれず
飯盒が平和の棚で忘れられ
突然に向う岸から来る波紋
錦絵の皿にサラタが落着けず
やっと出た芽に大輪の夢をかけ
傾いた屋根で意地張る鬼瓦

米子市 青戸 田鶴

なに祈るらん幼な兒も掌を合せ
素晴らしい瞳で手話同士みつめあう
悲しみの貌へ非情にライト降る
心足りながらうつろに秋暮れる
なにもかも水色にして川流れ
結ばれたえにしの深さ姑を見る
子をいさめるベンに思案の夜が更ける
浮きくもり朝のガラスを磨きあげ
七日七日亡母との深さ身に沁みる
阿弥陀堂如来も秋の風を恋う

大阪市 谷田 常子

亡母の目が静かに優し秘伝展
茶が熱し朝の男の深い読み
イメージに似合わぬ根性持つ女
屋台酒足だけ見せて時事談義
手伝いを労働と書く子の日記
振り向かぬ女の憎いシルエツト
台風へ睨みを利かす鬼瓦
灰皿が妥協したい嵩になる
悔やしさを反省とする日記帖
おしゃべりの口から洩れた社の秘密

和泉市 西岡 洛酔

雲流る明日という日の期待のせ
一秒の誤差へ絶対くずれ出し
大空へ鳥ともなりたい日の焦り
病床に孤独開つた日の白さ
明日への鼓動確かな寝に付く
子沢山いろいろ産んで母達者
善人の切符は表も裏も白
憂さ晴らしにしては淋しい酒の顔
凡人のまままで定年駅につく
捨てた犬の明日を知らずに夕陽燃え

今治市 新居田 胡頹子

教室に明るさ放つ更衣
旅に出て娘の名と同じ店で酔い
風死んで風鈴虚無の中に居る
天も地も人も病んでる核ボタン
棘のある言葉背中で聞き流し
家中の話題をさらう孫ができ
言い勝った妻が他人のように見え
母に似る野仏温い肌ざわり
埋れ火をつつく女へ燃える恋
空缶が自然の中で拗ねている

羽咋市 二宅ろ亭

鈍くともガソリン要らぬ足がある
喉元を過ぎて性懲りもなく忘れ
定退は座った椅子を撫でている
ロボットは八時間学働など言わず
はやらない八百屋野菜に水を掛け
笑わせたコンビ素顔の終電車
名僧の杖抜いた跡清水湧く
歩かせるとこも残して観光地
いつかはと凡打が狙うホームラン
優勝のナインは夕陽に頬を染め

呉市 林野甦光

子が画いた蕾が風に転げそつ
吊皮の揺れる初心を握り締め
昂ぶりを押えてしつけ糸を抜く
少し吃って税務署から帰り
温い手が言葉になつてゐる訣れ
ジーパンの汚れに充実感がある
考吉学の空間を飛ぶ赤とんぼ
羽根ぶとんの夢にあしたの虹が見え
ハンモックの過保護童話の種が切れ
もどり梅雨あじさいの首くたびれる

東大阪市 米田喜一郎

他人の子叱れず我が子叱つとく
目先だけきかしておいた鼻葉
戒めた子供当分近寄らず
新米の水加減妻書いてゆき
発声を初歩から音痴やり直し
物真似を癖だけ音痴覚え込み
上機嫌妻は虎の子小出しする
逃げ腰に見張りの役をつけておき
かくし芸本番前で人がやり
実力が暑さの精でぐるい出る

熊本市 有働芳仙

踏まれてもいい春闘の靴で出る
雑然と記者の机は生きている
泣かされて石を握ったまま帰り
渦一つのこし笑つて息を引き
ブランコへしはらく過去と揺れてみる
行先を告げずに出たい用があり
にこにこで嘘聞いてやる妻に負け
どうにでもなれと風仙花が弾け
人生の傾斜へ首を立て直し
薇薔の棘ぐらゐに若さ傷つくな

箕面市 中尾藻介

友だちの十指に余ることはなし
うまい絵の描けないわけが多過ぎる
時は矢の如く理解者にはさせた
海坊主女はそれを見たいという
憎しみのとどかぬとこでひろがる絵
百年の恋はビデオに取つてある
やすやすと女に返す守り札
クラリネットは失恋のときに吹いた
ごくふつうの夫婦で犬が飼いやすい
有情無情自分で彫つた蔵書印

岡山県 嘉数兆代賀

つますいた石に人生観を問う
千羽鶴の千羽を飛ばす今日佳き日
生きていく試験を昇る縄梯子
生きる刑鳴らぬラッパを吹きつづけ
だまし舟きのうの海は振り向かぬ
運命とは鬼から逃げて鬼に逢う
咲く花へ苦勞はなしは秘めておく
踏み絵踏む甘い自分に勝たたくて
余生なお靴の重さに敗けられぬ
沈む陽にもう逆らえぬ冬帽子

尼崎市 西村 かすみ

空想の視野を横ぎる赤とんぼ
退院の女に還るコンバクト
小春日の寺へ手袋つい忘れ
病名は同じカルテのふえる町
節約をしると故郷から為替くる
南風山一つずつ春にする
内縁に甘んじミンク着る女
定位置に坐り一日無事に終え
売れない店へ西日が強すぎる
青春の残り火燃やす繩のれん

唐津市 木塚 素石

町内もハガキですます寝正月
餞別にます気になるはみやげ物
這いはいを真中にして初節句
仇討ちと笑顔で挑む暮の敵
月斗の碑太閤のごと韓望む
死ぬまでは神経痛が連れになり
土に生く心映え見る桜島
嫁いだ娘寝だめに来たと母の愚痴
見舞われた方が元氣な精神科
妻は寝て目刺二匹で粥する

吹田市 与三野 保

目標の頂に立ち嬉しい日
叱られる毎に大きくなる子供
学校も手を焼く程の困った子
花嫁の耳の向こうに機之音
ケロイドの青春肌に生きている
父の風呂節約をせよと言うぬくさ
駅弁の蓋の飯から食う明治
肩の荷を降ろして笑顔取り戻す
城郭へ地藏尊まで野面積み
約束の日が来て売られゆく仔牛

米子市 桑原 伊都

駆け足で沈む夕日は振り向かず
蟻の道たどれば疑問とけそうて
少年に席ゆずられて老いを知り
思い出はよそう花火はもう消えた
水中花コップの深さで愛される
はるばると離島へ来た医者神に見え
気がつけば空気にとけて妻がいる
袋小路と知らず選んだ道を行く
信じてるサンタの夢は壊すまい
やりくりで乗りきる妻へ歩を合せ

米子市 菅井 とも子

ほどほどに意見も添えて丸く老い
新旧の憶いが孫を橋にさせ
本当のことは聞かずに娘をかえし
一言を添えて波紋を消して去に
裏方に徹し祭りを盛り上げる
何気ない辻に歴史のある町で
預った鉢から先に水をやり
窓ガラス磨いて病室広くする
もっ少し生きたく道を速回り
この椅子が汗を知ってる定退日

唐津市 浜本 義美

独り居の老人いつも鞆提げ
高年の汗を会社は安く買い
翹びそうな女翹べそうな服を買い
終着が早まるような酒を飲み
山崎子聞こえ帰校の子が走り
酒ふくみ紙の白さをじつと視る
団体に知らぬ男の二人連れ
内幕を知らぬ男の大アグラ
あの人へ素直になろう冬がくる
路地うらですだれを洗う元中佐

大阪市 堀口欣一

お日柄もよくとやっぱり昔から
いつまでも忘れぬ故郷の水の味
現代青年熊襲のようなも交り
老いらくの恋タートルの白を着る
万葉の昔そのまま奈良の鹿
プログラムとも言えません五百円
去年まで空気のうまい村だった
ああジャンボ娘に狭い広小路
その言やよし人生の下足番
席譲る人のスラリと長い足

米子市 野坂なみ

梅一輪ご縁頂き候て
花の彩残して暮れるふきだまり
肩越しによその不幸を覗き込み
清め水亡夫を起こして対話する
自叙伝へ亡夫が出番を問いかける
プランクトン狙う魚群も追われる身
円く住む事に疲れて孤に返り
初曆春の行事にうれしい朱
水切りで一日の茶花いとおしむ
正直な道に石ころ多過ぎる

唐津市 久保正敏

事勿れ主義は男の怠慢だ
溜飲は下げたが敵が一人増え
一般論というても承知しない妻
お手盛り歳の歳費に革新異議が無い
群集の一人一人の孤独感
責任の所在をほかす判の数
見も知らぬ神より馴染みの鬼に依る
咳払いそれも男の価値のうち
安心を買えと命の値踏みする
カラオケが白秋の酒を蹴散らかし

大阪市 清水健司

のんびりとバスを待つてる時もある
四面楚歌川の流れは変らない
故郷に梅干し漬けるつぼがある
物証になるマツチなど持ってない
長男が電話をかけたどこへ行く
石けりの石をけつたらもどれない
二三本柱を抜いた子算くむ
硝子戸の向うに偉い人がいる
子の寝顔蠅がいっぱきとんでいる
美人だな毛皮をすつと買っていく

大阪市 清水康恵

ふる里の空によく似た雲を見る
人生の終りに結ぶ白い帯
くじ運の弱いところが似た夫婦
停留所まだ眠むそつな顔もいる
三面鏡悲しい顔はうつさない
息子には曲った釘は打たせない
木枯しの中を夫婦で橋渡る
重荷なら夫婦で少し軽くする
ごめんねと素直に言える子に育ち
霜柱サクサクふる里の音がする

藤井寺市 児島与呂志

凡人の趣味がわかつている妻で
いい人に成りたい母は過去を秘め
お中日頃に亡き父はは思う
引きすつて来たフライドが寄せ付けず
律儀者一つの細胞乱れさせ
母だけがひと息つけてる部屋が無い
弱虫の意地決着付けて来る
背中合せになってから寝付かれず
好きな事してて平和な父の位置
人間のどん底忘れ無い読経

富田林市 林 澄子

くにの川流れも瘦せて石が飢え
新春の悲惨なニュースに耳が冷え
生き甲斐を感じる暇もない若さ
やんわりと話せば企みばれそうで
根性を見せれば陰で敵が増え
悪びれぬ姑で保てる夫婦の和
世話好きが損して足りる天秤座
耐える事詰めた袋が破れそう
錆びついた防火バケツにある歴史
逆って来たから素直さ生きて来る

島根県 角 耕草

まだ作る気かと種まき笑われる
百姓に作る五穀が見当らず
うるさ型来たと新茶に切替える
クレーン吊る先に故郷の空があり
出稼ぎの父が進学踏み切らせ
冷凍魚買うのに鯛も覗いて見
出稼ぎが種の指図をする電話
御先祖に金の仏壇まぶしすぎ
大層な霜よと葱を引いてくる
梅咲いて浜の干綱よく乾き

大阪市 金井文秋

古稀をまだ若く見られるのが嬉し
晩年になって夫婦の歩幅合う
老けるのは嫌でしつかり背を伸す
足るを知り他人の生活覗かない
大当りはないが無難な道を選ぶ
はがゆいと自分も思うかたつむり
汗のない暮しを墮落だと思つ
医の無料つもり貯金を思い立ち
貧乏と思つ心が貧しくて
辞める汐時を他人が知っている

尼崎市 荻野江 唯夫

桃節句愛ほのほのと感じけり
女との交際上手はとくな人
微風に甘い香りがのつてくる
思いやりそれが恋に変わり行く
向い合い飲んだコーヒーに愛がある
約束は土手のあたりと土筆とる
指切りに固い約束示し合う
世の中で一番大事は愛すひと
その人の心に何時も鍵はない
逢えぬ日はそのひとつも目に浮ぶ

兵庫県 奥野 テル

胎動に絆の重みかみしめる
円満の裏に耐えてる影法師
屋上へ吐き捨てて来る老いの愚痴
御詠歌の余韻が続く雨の音
小包の中に癖ある母の筆
古日記母の苦心を埋めつくし
背く子へ限界越えて追うも母
良心に再起誓つた鉄格子
心音の乱れをかくす紅を引く
芸術を煙に見せる昇り窯

堺市 藤井 一二三

目標へ男は一直線を擡る
大ジョッキこの満ち足りた汗も飲み
無駄と知る汗を男の意地でかき
肩書きが本音と逆のことを言い
決断の高さへ札の束を積む
峠越すたびに聖書を出している
定年の背中を時が押してくる
欲捨てた日から鎖が解けてくる
歳月が目でものを聞く妻にする
風の動きも聞いて夫婦にあるしじま

寢屋川市 野田 實

天下り転々として御大尽
嘘のない世の味気なき思いいる
人の行く裏に道なし出世道
店屋物なにもかにもが砂糖漬け
よくもまああれほどしゃべる種がある
罪深し水子供養の寺まいり
病んでから娘しみじみ有難い
優先座席若い狸が占領し
びしょぬれのでる坊主すみません
結婚式嘘のはじめの誓詞読む

鳥取県 林 露 杖

書初の一字歪みて納まれり
黙殺という手もあつた言わせとけ
花曇り胸に蠢くものを抱き
お節介嫌い放つとくの不満
流木の甕に流転の詩を刻み
ふるさとの山の囁き聞く孤愁
熱帯魚女涼しく身を裸す
男一匹避けて通れぬ道がある
煩惱も年相応に色を変え
好日とみられ無職の年の暮れ

今治市 長野 文庫

正社員待遇とあり募集欄
かぶと蟹守り固めたまま減ぶ
困宝になって斬れ味謎のまま
人相の悪さも使い途があり
絶対というのに心ゆさぶられ
迫力のないバイブルの口語調
損得のない相槌を打って置く
ぼっくり死頼み神様まごつかせ
アンケート当らぬくじの使い途
買いためた雑誌を売って行く左遷

鳥取県 林 原 一 尚

ゆっくりと走れば道連れ出来てきた
女ひとり推理へ沈む角砂糖
土踏めば足の裏まで来てる秋
梨娘笑顔の秀も添えて売り
健やかで余生は神が司どる
家族みないたわる臨月美しい
見ぬ振りをする目に同情住んでいる
詠まれてるなどを知らずに松が枯れ
旅帰りみやげの風邪を皆で分け
雪月花日本が戀う季節宴

岸和田市 島崎 富志子

娘が嫁けばこんなものかと夫婦酒
あの声は合格らしい受話機とる
寒い春庭の蕾が老いてゆく
親の顔知らぬ小鳥にしたわれる
欲を言えばと欲の深い事ばかり
母と娘の話へ父は入りたがり
自惚れた耳は意見を通り抜け
どうにでもなれと不敵な顔のひげ
結局は夫婦二人となるかくご
そのあとを言わねばよかつた悔い一つ

堺市 久井 富子

親子連れわけありそうな遍路笠
母と娘の揃わぬ視野も歩は揃い
まだ続くドラマに向けて深呼吸
遠く住む心をつなぐ愛の糸
泣きボクロ泣かぬ女にある不思議
衣紋掛け母の暗示が掛けるある
ゆるぎない意志の伝わる鳩の脚
三月を打出の小槌欲しくなる
左手の高が小指と侮れず
目玉品だんだん主婦に舐められる

青森市 工藤甲吉

みちのくのさい果てここで石拾う
津軽まで太宰と酒を飲みにくる
津軽弁都加留蝦夷の血が流れ
みちのくの風さわやかに青りんご
火の神をねぶたのゆれるときに見る
月は煌々と山唄透きとおり
風花の舞う日ちろりと猪口ならば
鱈ちりを囲み吹雪もすてがたし
民謡も民話も雪に埋もれる
冬の夜を独り素焼の肌をなで

橋本市 中山修

もつ一本も無駄には出来ぬ残り髪
鮎を追う釣りの奥義を子に学び
人はみなひとの知らない長所もち
学歴を笠にもの言う愚かしさ
格式の壁に良縁邪魔をされ
ごり押しをすれば必ずくる破綻
言い負けて相槌ばかり打つ男
年齢と若さは別のものと知り
ライバルは自分自身と見つけたり
六十路でもまだ青春の血が残り

西宮市 林はつ絵

夕やけの真つ赤な向う太郎住む
すぐ騒ぐ鬼が一匹胸にいる
残照に賭けるアッサン朱く塗る
ひと言のごめんなさいを借りたまま
愛憎の錆色となり若葉道
一人病んで家族の距離を無くさせる
自我の殻花咲き終る日を捨てて
いのち綱少うし長くしてもらおう
吾亦紅あなたが霧をわけてくる
雑音の一つが胸につき当る

和歌山県 中根勇太

書は師範お茶は奥伝まだ独り
過ぎたるは及ばず男近よらず
漁父の辞を思い出させる世の濁り
驕る者驕らぬ者も遠からず
冴える月流転の過去を照らしたす
建国祭日の丸揺れる右左
方円に従う水のころろ汲む
忠勇が死語となる世に生き残り
百までも生きると言われ怖くなり
十善を積んで極楽疑わず

松江市 小林孤呂二

おおらかな日の民謡を聴いており
年の功にされて寂しい酔い加減
花をきる花の心になつてから
男が拗ねると片割れ月がでる
冬こそよけれ酒は男を虜にし
熱中時代それも過去なり懐しむ
人間は数に騙れる癖を持ち
胸くそが悪い男性化粧品
定年の延びる丁寧な朝の櫛
方程式どおりの男で酌ぎにくい

唐津市 田口虹汀

華も葉も根も役立てて蓮は生き
母の日の花は外国生まれなり
短命な花で力の限り咲き
滝となる水も河鹿と住むゆとり
思い出も土筆もブルの下に消え
忍ぶ丈け忍び桂馬は身構える
歩も金に成ると睨みが利いて来る
平穏な入日私も鍛洗う
おいおいと古稀迄妻を呼びつづけ
子の事になると石女口を閉じ

富田市 中村 優

花びらが微風に踊り猪口に落ち
ブラカード持って歩いた足のまめ
明暗を二つに割って花と旗
悶悶に母の言葉の鈴が鳴り
ハーモニカで二つ覚えの枯すすき
爪立てることを忘れた膝の猫
銘木の艶を老父の顔に見る
幻の戦陣訓を聞く木馬
人前で亭主関白許される
貧乏が聞かせどころの立志伝

京都市 伊藤 入仙

改札のいざこざ見てて乗りおくれ
出稼ぎに出る大安の日をさがす
養老院にいてまで派手な元女優
梨の皮蟻が一族従えて
どんな色に焼けるか刺青の死体
農園の主婦貫禄のある日焼け
食通が無理に誘った回り道
孫誕生血液型が気にかかり
児を抱いて女家裁で待ち疲れ
晴れて来たらしいストロー飲みつくす

大阪市 本間 満津子

成田着長屋へ帰る顔でなし
手袋を脱いで握手をもつ一度
お手洗いでしみじみ我家だと思
お茶いっぶく飲めば何でもない話
失った財布の中味が言にくい
こんなときへそくり出そうか出すまいか
そうであらうそうもあらうと鼻をかみ
そのときはそない思つた日記帳
親離れ子離れとつとつ孫離れ
春うらら電話かけたなら何処も留守

大阪市 橋元 美恵

ドック入り乳房も髪もつとましい
きれいきれいに辛い日の髪洗つ
旅便り貴方の歩く音がする
抱きしめてもらいたいから冬が好き
今日の服母である事主張する
ときめきもグラスも汚れ雨つづき
過去の愛遠くの空の虹のよう
髪さわる心の痛み包むよう
ブルジョアの大きな吐息バラ匂う
ジ・エンド行先は風に任せる

大阪市 菅江 多希子

先ず泣いてゆつくり笑つた合格者
有能が恋の一字で挫折とは
滔滔と清濁併せ呑んだ川
立志伝石に矢も立ち花も咲く
反抗期日々かくし芸出すように
肺腑つく老僧の声静かすぎ
白旗をあげた策略読みとれず
今日も又内面夜叉で悔い残り
児の笑う寝顔に親の夢重ね
しがらみにかかるでないを流しびな

仙台市 川村 映輝

元日の日記楷書で決意書く
敬老の席有難し萩まつり
わが事となれば行革大反対
一億の落し物もある日本
免許証受けて歩行者邪魔になり
北方領土嶋の子孫が今も住み
広島の空から消えぬきのこ雲
世界観ピントの合わぬ目で批判
老若男女病院に病人あふれてる
スト中止結局仕事手につかず

和泉市 岡 井 やすお

吟行会終つてゆつくり景色見る
押出しの四球でもよいこのチャンス
研究へ国内処遇不十分
泡立草作つてるよつな休耕田
美談にも汚職にも出る義理の二子
公取委安い方をも摘発へ
ポーナスがなくなり募金忘れてる
大手術成功運があつたんや
初雪が消えぬうちにとカメラ向け
一睡もせず点滴を見てる妻

寝屋川市 宮 尾 あいき

老体の私を風邪はみすてない
風邪の奴私の体を年を越し
又風邪か亡夫の笑い声がする
芳期正に七十一の新春よ
初風呂の肌はまだまだ湯をはしく
湯あがりのぬくもり抱いて一人寝る
まだ若い鏡へ自問自答する
墓詣り亡夫へあまえた声になり
就仏して欲しい亡夫へ無理も言い
天国の道案内に亡夫が居る

綾瀬市 大山 と 金

溺れかけ救われ銅貨握つてた
俺もしたことがあつたと子に言えず
おしつこを知らせたときはもうしてる
苗植うる大地と話をしてるかに
十年振りの賀状に居どころ書いてない
なつかしく話す相手の名が知れず
鏡など見たこともなし水鏡
自由主義資格無ければ生きられず
うまければ良いに調理士栄養士
今に見ろ資格家庭の主婦も要る

一宮市 伊 神 敏 子

四季の花咲かせて缺遊ばせず
嘘一つ言わず儲けた五つ珠
内心を探り未来図書き替える
運命線頼らぬ男運がむき
暮の鐘戒めと聞く父の声
嫁迎え心の窓も開けておき
紫蘇もむ嫁も家風に染りかけ
喪に服す女とまり木などいらぬ
髪形も変えて初秋の風に合い
飛躍した日本を語る明治村

岸和田市 古 野 ひ で

風化した積りの過去が疼き出し
性哀し女大罪犯すはめ
虫の音が冴えて耳なり遠くする
蟻の列どんくさいのが矢張りいる
資源ない国と云うのに粗大ごみ
寡婦ひとり哀しい歴史繰返す
花といて素直な心とりもどし
塩焼にされても鮎はポーズする
美しい道があるかも曲り角
冬の雲母のない子の涙かも

寝屋川市 里 小 路

満員車降りておたいこ見てもらい
踏み台で届くところにある秘密
靴べらを返してはられたなと思ひ
あら煮きで飲む箸先に鯛のたい
珍しいこととする妻の酌きこぼし
樟脳の匂う着物を医者で脱ぎ
櫛の歯に大事な髪がついてくる
大阪の三十階でとろろそば
大阪が残つたさかい甲子園
おっさんとこつちのナリを見て巡查

大阪市 国定 姫代

嘘の中の真実のようおもとの実
また嘘と分つていても母の愛
定年に朝の目覚しご用済み
朝寝して夢に見る夢定年後
俄雨駅の置傘出番です
裏表みせて友情長つづき
裏方に徹して生きる芸の道
初春をこたつに向い賀状読み
つつがなく賀状眺めて年が明け
北の友春待ち顔の雪だより

堺市 高木 幸太郎

神鶏も夜は鶏舎に寝に帰る
大和橋渡ると神輿灯を入れる
堀り当てた宝に暗い翳がある
一石が波瀾を呼んだ査問会
婦唱夫随本日も晴天なり
研修と云う名で疊拭かされる
寝正月寝かせてくれぬ電話なる
寒い日をテレビも鍋を煮いている
熟年の三人思うこと同じ
盗聴器今も昔も壁に耳

岡山県 岩道 博友

幸せは何時ものパターンで蝶子が切れ
譲歩する愛の限度を小声にし
脇役で破れ窓から月を見る
小さい愛神を信じている平和
本当の涙は父が拭いてくれ
主役から降ろされ寒道独り去ぬ
騙されて帰る列車に乗り遅れ
腕組の隣の空席すぐ着けず
赤電話待ってる人の咳払い
雲隠れしたのが選挙に舞い戻り

岡山市 井上 柳五郎

検温を斜線で結ぶ闘病記
減びゆく朱鷺は流人の悲話に似て
篤農の土塊一つも売らぬ眉宇
ダム湖底沈んだ村ごと山は抱き
捨石となった裏にもある打算
腹立たんか他人様が歯痒ゆがり
まな板のくぼみへ暮しの詩が棲み
逃げ足の遅い人が持つ人間味
保護色の連れ抜けてから風当り
ばれたかと言えばこいつで済んだ嘘

和歌山市 野村 太茂津

手の鳴る方へ行かぬ挑戦だつてある
頼りない男女が三度のめしを食う
一本気修羅場で生きた時が好き
目無し達磨よ八方美人に決めようか
軽い眩暈で機長が自殺したくなる
或る仮定押すかも知れぬ核ボタン
なんとなく破滅に近い世に生きる
倅せな手を貸すことだけ考える
大陸の孤児は倅と同一齡
失敗のとき泣きに來い俺がいる

和歌山市 野村 きみ

角栄を攻めてはならぬ越後つべ
情念の糸をまさぐる佐度おけさ
爪びけば雪のまきけと替女の唄
掌のひらに染まりて花のおぼろ月
三十八度線孤児よ私も泣いている
老齡と書かれ年金筋に落ちず
ただことではない窓際にもノルマ
反撥を秘めて夫婦の迷いごと
ほころびの電話一杯飲むはなし
急くなよ焦るなよ歳が追っかける

和歌山市 西山 幸

水蓑の水尽き涸れてゆく話
花いちもんめ一途な妬心いとおしむ
裏切りのみごとさを知る玉手箱
誰も居ない駅に着くのは貨車ばかり
情に棹流されて行く紙の舟
二枚目の舌ですらすら嘘を言う
春の陽へ背中を向けさせるト書
ぶどう酒の甘さに素顔見失う
あきらめて回るしかない風車
何を恋う虚しい自負と知りながら

和歌山市 内芝 登志代

石仏苔が生えても童顔で
惚れこんだ分だけ女泣かされる
有難く借りて晴れ聞へ邪魔な傘
着せたくて針の手はずむ夜の音
細道を手描きの帯が小走りに
先立たれひとりとは独りの音で生き
素っ裸の心が似合っ五月晴れ
満ち足りたくらしへ溺れてゆく不幸
手おくれと知りつつ聞き入る美顔術
美しい花も緑の葉が命

和歌山市 浦野 和子

残り糸集めて母は虹を編む
美しく訣れて電話もつ鳴らぬ
日本中同じテレビを見る怖さ
ひざを抱く男にバズルまだ解けぬ
夕映にもみじ散るちる曼陀羅因
釘一つかけ忘れてる自画像で
恋終るケーキに飽きた無邪気さで
水を得た魚が泳いでいるロビー
子を産んで女は青い海になる
海風いで銀波の果ての瑠璃観世

和歌山市 堀端 三男

赤信号きれいに別れる言葉選る
煩惱の踏絵ともなる遺産分け
自負心の崩れる音に眼を覚す
足跡を消す砂ならば盛って見る
見物の野次より恐い大欠伸
例えばの話が痛く突き刺さる
計算した積木崩れた日の焦り
偶然を装い一バス遅らせる
何気なく階段十三まで数え
囁託はおとりの鴉かも知れず

吹田市 西岡 豊

一言と誉めて皮肉る協議会
困憊のうたた寝に母ふとんかけ
バイタリティー今日も厳しい朝の靴
床の花洗心の軸日曜日
ユーマアに忠告混せて酒を注ぐ
上役も気のあう者で破目ははずす
狸寝で部下の噂を聞く課長
誰にでも厳肅な顔内示の日
麻雀に負けた女に絡まれる
愛愛のスリル満点炎えている

枚方市 一宮 山久

錆びついた鎖貴男と結んでる
凶星から覚めて明日を考える
背筋ほら伸ばせと妻は背を丸め
吠えることわすれた犬にある平和
衣替幾度女は目をさます
多忙です色恋どころじゃあやしない
飲みおえて我れに帰りし夜半の月
握る手にぬくもり感ずも母の手に
子育てもはなれ静かな夫婦酒
好きだから貴男まかせの舟に乗る

西宮市 朝山 千世子

土筆野の出逢いの夢は永遠に生き
雲の張り胸の炎が声となる
咲き残るあじさいロマンよさきようなら
油蟬女の業を責めるかに
萩桔梗余生を飾る彩はなに
逝く秋や時効の傷を温める
冬至南瓜嫁と無言の陽が昏れる
漫才で笑い飛ばせぬ時期が来た
三ヶ日目の丸忘れた街をゆく
雪の洗礼女の魔性赦せるか

奈良市 伊藤 シズ子

娘にご縁あるたび父の意にそわず
帰省した息子に母のえびす顔
女ゆえに許されることの淋しかり
学園祭ジーパン粉で白くなり
秋晴れに親が浮きたつ七五三
イタチゴッコまたも物価がさきを越し
玉ねぎを切つて青芽に腹をたて
強犬へ尻尾が媚びたりたのんだり
嫁つてほしい居てもほしい親心
タレントの名をあげ好みさぐる母

倉敷市 水粉 千翁

花濡れて生き抜く性の鮮やかに
泣いている笑うてもいるおもしろさ
茶に如くはなし端然と安らぎぬ
生きさまへかたじけなくも風薫る
てのひらの五指のさだめはみなひとつ
産土のいのちを匂うかなさくら
老いぬべし妻の横顔かがやきぬ
笑み給う母なる皺の深さかな
うなずいて又うなずいて夫婦老い
その隅のさすがに野菊だとおもつ

兵庫県 円増 貞子

老いの身のゆらぐ思いにふとあわて
歳月かいつか吾が家の味になり
出かかった愚痴を押えるのと仏
ささやかな侍世家族皆達者
ない袖の不義理が足を遠のかせ
嫁の座も変りましたと古障子
喝采の中で苦心の花が咲く
見栄を捨て一から振り出す夫婦像
親として見果てぬ夢を子に託し
芸は身を助ける破目の不仕合せ

兵庫県 森脇 和子

朗報を胸に逢う日待ちつづけ
節高い指で盃丸く受け
同じ道歩いているのに凶と吉
里帰り欲の袋をもつ一つ
みどり児の指の揃いに安堵する
安心と不安で送る子の首途
父の背に踊りつかれた子が眠り
カニ売りの声背に聞いてパスを待つ
一人占めするには惜しいよいはなし
組立てたようなお世辞へ耳貸さず

堺市 大道 美乙女

日の丸がかすんで見えぬ金メダル
変骨な父でも唄う夜がある
耳の日に悲しい言葉ばかり聞く
信じてた息子別居をすると言う
カンナ屑ボンと払ってお茶にする
綺羅飾る女うしろにすぎがある
逆境に立つても初心崩さない
不慮の事故紙面にむごい字がはねる
寡婦の意地汚れた物は着せてない
泣いた日を笑いばなしにするゆとり

神戸市 仲 どんたく

影追つて影ふみ合つて月の道
紫煙追う昔の音に弱い齡
嘘包む風呂敷が無い父である
もうとまだ古稀それぞれに受けとめる
身障の絵にひたむきの色がある
思い出に炎の色と水の色
同居して孤独がほしい旅に出る
阿鼻叫喚小児科午前十一時
嘘つかぬ鏡へ嘘をついて見る
秋の味ヘルスメーターの罪ならず

西宮市 野 呂 鵜 汀

芽が出ると急に植木を構いだし
通夜の席誰も知らない美人が居
抱く孫は我が分身の分身さ
本人は還暦祝う気になれず
鍵っ子にやがて悲しい星が出る
凜々しくも娘のフィアンセは憎きかな
見事なる床に汚い壺の見え
野仏の影がそのまま残雪へ
フンフンと聞えた振りへ滴の音
参道は下駄にふさわし石畳

今治市 月 原 宵 明

生きるため無難な中間色を撰り
仏より世間が怖い花をたて
手ぬかりがあつて可愛い妻で居る
妻の座の居心地すこし肥えてくる
マイホームだじに花の種を買つ
娘をやつた夜は夫婦で酔つばらい
よろこびも悲しみも妻米をとぐ
泣きやんだ女がめくる鏡かけ
中年を過ぎれば専守防衛派
合槌を打つうちかわる旗印

長崎県 野 田 宵 風

梵鐘も這うようにゆく昏れの道
悠々とまではいかない土いじり
風花が海鼠売る荷を重うする
この坂を越さねばならぬ今日の靴
何がしの雑魚の行商若き母
月明り鋭くささるもぐらの背
体験の老いのひと言決をとる
ゆく春を惜しむ野点の色みやび
どちらが勝つても花がいる宮相撲
初新春へ樹々の新芽も身がまえる

豊中市 満 仲 きく子

光はもう春のものです針供養
麦笛を吹くひとときは素直なり
命枯れる日までの月よ陽よ星よ
振りあげたこぶしわたしが打てますか
人形は答えてくれず失意の日
生かされている心配ない素顔
白粉のはける心配ない素顔
われ鍋にとじぶたこじやこじやいなながら
白梅に雪舞うそんな故郷とす

寝屋川市 柴 田 英 壬 子

ピリオドがあるから思い出美しい
鎖あみ愛を育てているセーター
言いなりになる髪女はずんでる
夾竹桃の一途を享けてくれますか
恋に身を灼くと帽子が味方する
マイナスになる直感はいよく当り
満腹をゆるさぬプロの道がある
時雨聞くところは仮面などつけぬ
妥協することも覚えてすこし肥え
魂のゆとりに出逢う彼岸花

大阪府 林 春栄

落選の涙こんなにからいもの
生あくびこらえ名曲もてあまし
家事一切下手で翔んでる女です
嫌われて毛虫は変身してみせる
円満を心得ている妥協線
有頂点にさせたお世辞が知らん顔
親不孝心で詫びてゴールイン
恍惚の余生に胃腸丈夫すぎ
積木にもあきて無理言う雨つづき
ふと恐くなる程豊かすぎる日々

東大阪市 本 多 清 人

元日の空気がうまいランニング
酔いざめの六腑にしみる寒の水
関取りが歩いて美にわに春来る
ラッシュアワー美人の胸から春が来る
土拾う青春もあり甲子園
腹立ちに蹴った石さえ横へ外れ
雨降り来て分譲地又思案
高架下雨に打たれる屋根でなし
雨水一滴大海までの運不運
中流がどっと師走の百貨店

四条畷市 加 藤 瑞 恵

雪国に生まれて白い雪憎む
愛し合った二人が放物線を描き
今はもう泣き伏す母のひざも無く
苦しさに飛びこむ父の胸もなし
再会を月がのぞいたティールーム
友の訃に黙って出したコップ酒
ここからはそっとしておく思いやり
枯れるまで驚草の花空を恋う
平凡なしあわせフランスパンを抱く
たんぼほの種飛べるだけ飛んでゆけ

柏原市 大 峠 可 動

人間の層はいくさを持つている
一直線に走って真実と並ぼうか
雪の日に男を売った靴を干す
残業の蟻同士平均台にいる
中年の男点線ばかり引く
人間を描くと父の顔になる
思想激んで落穂拾いの兵隊よ
流れ矢となって絶叫する命
点線をつなげば兵の顔がある
軍手干す男苦節の詩を持つ

岡山県 横 山 一 声

集金に行くには惜しい花の道
靴下の穴に気付かずかしこまり
影二つひとつになつて気をもませ
忘れ物しといて口説に戻つて来
好きな娘の家は犬から手なずける
決心がついたか女ついて来る
煙はたてまい世間が騒ぐから
秀才ではないが潤滑油に使い
二十年添うて万事が目てわかり
倅せの道にも大きな穴があり

豊中市 安 藤 寿 美 子

末法の世の新聞をたたみけり
余生への覚悟白髪にうながされ
史書百巻時の流れがあるばかり
豊饒な海がこころの中にある
黒潮にのる椰子の実と丸木舟
北焔行背中ぬくい日もあつて
左手も重ねて握手する別れ
ゴキブリよお前空巢を見たのやろ
ひらめかぬ女に無事な日が暮れる
おばはんの十四五人も居りぬべし

大阪市 神夏磯 道子

忙がしい愚痴こぼしてゐる立話
差し向い望み叶つた頃は古い
老眼鏡少し気弱な母にする
言い負けた日に抜く白髪二三本
短針の自由に動きたい日もあつて
景色見るゆとりが出来た下り坂
切れかけた糸つながつた結び玉
少しづつ妥協をしてる三角形
すりこぎの丸さでゴマのいい匂い
どの星も私を見てる歩まねは

鳥根原 鈴 江

野仏のそばにより添い無縁仏
鴨が来て斐伊の川原を掘り返えず
忍べども沈丁垣根をもれてくる
アルバムがわが家のロマン秘めながら
あり余る中から拾つものが無い
春宵一刻枯木もすこし艶を出し
余燼なお静かに抱いて粧いぬ
妻の座に甘えて見たい春の宵
すがりつくほどの杖などありはせぬ
冷え切つた心へ野火が迫るなり

米子市 沢田 千春

押花の褪せても亡母の香を残す
秋いとしりんどう深く誰を待つ
流れ雲私も旅をしてるよう
潮の香よ故郷の港が鳴ってくる
つり橋を渡る向いの灯もゆれる
幼子の瞳に亡父と呼ぶ星がある
ふさぐ日は雨まつすぐに責めてくる
鳥籠の孤独へ鈴が鳴ってくれ
うなだれた花に詫びつつ水をやり
思い出を消して女は炎をもやす

平田市 久家 代仕男

言い張つて海豚提灯に似た夫婦
人間のエゴを檻より眼鏡猿
赤絨緞を鷹派が踏めばきな臭し
雑草の踏まれて拗ねたままで吠く
末法の政治あざける晩鐘か
昼の風呂豚舎の父を呼びにやり
医大バス父は植物人間で
押しやれば手元に戻る流し雛
横ビントくれた老師を囲む酒
教科書の改竄紙魚に当てられる

熊本市 高野 宵草

皮むけばは林檎羞しそうな肌
口喧嘩しながら銀婚式の膳
楽しきは貧しき中の無駄づかい
人形の顔の憂いが身に沁む日
叩くまね逃げるまねして恋たのし
父さんと指切りした子の毬はずむ
駆除もれの毛虫が今日は蝶となる
悪者になつたこう平和が乱れそつ
枯草の中にほらほら春がいる
束の間の安らぎ独楽の軸眠る

岸和田市 武 俊 春

二百号塔の高きへ広い空
留守番は留守番電話セットする
若草山消防人に付け火され
かみころす通夜の別れの生あくび
年の暮れ嘘でつないだ筈がばれ
寒椿凍てつく朝へあるいのち
生かされるいのちへ感謝初日の出
貯金すら出来ぬ笑顔の妻の朝
葬列へにわとり隅へ追いやられ
たち切れすこの交差点あるかきり

宝塚市 吉田笑女

ゆずり合う席へ他人が来て座り
桜満開明日は夫のドック入り
植物の話なら合う老夫婦
心配の種はぼろぼろよくこぼれ
半分税に引かれて仕舞う二人きり
三姉妹今年も揃う父母の墓
夕顔の老夫迎えるように咲き
寄りそえば支えて呉れる菊の竹
独り酌むワインよ満で六十六
半分はこぼれる孫の握り箸

姫路市 梅谿庵 不醉

太子さん裏返したりすかしたり
与野党の骨折一人に五百円
禁煙で浮かねばならぬ煙草代
不調法が盃出さずに湯のみ出し
減税を首相税吏の尻叩き
税務署が来た夢を見てかく冷汗
金貸すが朝の元気を先ず問われ
戻し税満足して五百円
誰に似たうちの胡瓜は皆曲り
四捨五入やはり裏口効いている

東大阪市 崎山美子

空ビンに野草を活けて満ちたりる
大海を知った蛙の不幸せ
一条の光信した確かな歩
吉報がいつきに我が家かけぬける
告白をさそうムードが用意され
人生の余白は好きな色をぬる
七人の敵むかえうつつネクタイで
同病の体験談にささえられ
許された試歩を伝える赤電話
たよりない愛の噂を風に聞く

堺市 阪本増美

カラオケに老いを忘れた唄聞こえ
伴奏が追いかけているのど自慢
計を聞いた体の中を風が行く
海猫が観光船のバンを追う
もめぬいて漸つと決まった設計図
留袖に貫禄の増す今日の妻
倦怠期妻が酔ってるメロドラマ
妻の顔鬼に見えます御前様
心よい夢破られる春の朝
ジョギングのメンバー一人増え一人減り

宇部市 平田実男

評論家そんならあなたやれまずか
養老院子供はいないことにする
日の丸を十人十色の目で眺め
七人の敵がいるからわくフアイト
こそばがる妻へ残っていた若さ
酔って乗るタクシー代は苦にならず
飲ませたら自白たやすいなと思つ
この汗がやがて希望を満たす汗
豆で逃げる鬼ならベットにして見たい
嘘をつく舌がもつれるお人好し

京都市 山本規不風

筆跡の温くさに従いてゆくつもり
鎖はずして信じた犬に逃げられる
手の届く距離を保っているリング
無縁墓にならず女系が続いている
拾われて伴せ篤い桜貝
狐火が揺れる女の溜息で
大人にはなれぬ女で残される
猿芝居の猿の真面目な顔に逢う
ひげピンと張ってゴキブリ立派な死
外国で肩組んで来た老夫婦

鳥取市 北野 天人

遺練りの家計へ値上げ追いかける
セーターを送られ老妻の話題増し
川の字に寝る日夢みて産着縫う
満足の一日早寝の息軽い
ふるりの味覚ふるりの匂いかぐ
総入歯食い物だけが古い染みる
人の目に馴れて明るい車椅子
ただ酒の前後の穴に気付かない
琴に笛あわせて雅境の古い二人
にらまれてにらみかえして筋とおす

京都市 松川 杜的

着つくして本当の白の良さを知り
滝しぶき心の中へ落ちて来る
公害の空へは飛ばぬ竹トンボ
独楽が回ってる楽しくなってる
風鐸を雲に合わせて古都を撮る
打水の虹へしまい込む今日の幸
喪の家で一さわ匂う沈丁花
雑草の悟り踏まれても踏まれても
無住寺に燃えるものあり曼珠沙華
旅情とは営業係数に逆比例

和歌山市 坂口 公子

天体をめぐる温い目冷い目
霧の降る夜で泣いている山灯り
ほらほらどこも綺麗に見える島
飛行機が忍びの術で星座ゆく
たまゆらの生命をつたいあげて蟬
緑山へ死ぬぬ死ぬぬと見惚れ居り
茂みから、居たよ。と冬へ柚の顔
釣りをする糸に夕月からんで来
やすらぎは神とふれあう鈴の音
正直な鏡よ虚勢へ目をつむれ

和歌山市 松原 寿子

日記帖虹を抱いたはこのあたり
愛を得た日の海の蒼今に満つ
触れた掌におおらかな海鳴り
黒髪も大樹の熱い胸が好き
風いでの海に抱かれた一刹那
ひとときの仮眠を包む花野かな
鈴が掌に踊るあなたに逢えた日は
むらさきの雨の余熱が唇に
好きだから連の白さを妬りぬ
掌を振らず別れ一途な想い抱く

倉吉市 今村 夕路

暖冬の裏があるぞと自重する
懸命に吠え番犬の役もすみ
生花は当座は水でしゃんとする
この医者もいつも自分の舌を見る
歩道橋交通地獄見て通る
盛り場で財布のありかたしかめる
柿をカラスはちゃんど知っている
主導権握って勝をあせらない
自惚れの絵をほめ長居して戻り
野仏の柿をねらっているカラス

東大阪市 桑原 喜風

合掌の指に悟りの血が通い
盲目の指に全知をかける詩
公園の墓地魂も浮かばせる
磨いてる平素に冴える雲の幅
晩年を賭けた保険の稀少価値
難民の掌に暖い米の味
風船に平和を委ね原爆忌
国富みて海外旅行弾む民
叩かれて弟子は夢ある職に耐え
倅せは欲得のない世話が好き

東大阪市 三宅 旭

除夜の鐘親の意見のように聞く
はじめから決つてたんだよと佐藤
如才無く佐藤を男にして帰し
愛ちゃんのお人好し振りありありと
何が苦であの娘やせるか夏姿
ベン先で家も車もつまみ食い
むせかえる中に若肌涼しそつ
子がおもちや飽いたら放すよに捨てられる
光熱費のツケがまだ来ぬ太陽から
我が輩の誤算と冥途でマッカーサー

大田市 藤 田 軒太楼

疎遠託び静かに法会の人となり
それぞれに耐えて来ました夫婦箸
胸張つて去る花道はふり向かず
知恵をつけ首尾を待つてる煙草の輪
コンペアの動き見詰める無感動
招かれたわけが解らぬ顔が寄り
根っからの世話好き忙わしき口にせず
誘われて引立てる世話をよきたがり
敬遠をされてる世話をよきたがり
白バイをバックミラーに見るスリル

境港市 細 木 歳 栄

あばら家のような障子で子沢山
仲裁をしては未つ娘泣かされる
外孫の馴れぬが少し気にさわり
親一人面倒みきれぬ世相とは
女閨も御勝手口もない暮らし
私にはストレスさえも背を向ける
食べ残り勿体なしとまた肥り
買う気などなくても柄を見値札を見
見栄を張る嘘をカラスに嗤われる
用のある時だけ姑撫でられる

和歌山市 中 島 正 博

打たれても杭は飛躍の夢捨てず
雨音が軽く詩心をノックする
街角の風を讀んでる白い杖
雑草も恋も芽生える春の土手
生涯を詩で綴れば土の唄
人間が来る迄菜園だった島
とまどいに決断つけた自動ドア
無意識の指音律を外さない
心配はいらぬライバルふるえてる
老農の欽美しく夕焼ける

和歌山市 福 本 英 子

スタートで走ることだけ考える
二級酒とことわりも無しコップ酒
酒の爛人肌にして誰も来ぬ
酒かりてやつと言いたいことが言え
本心に遠く離れた言葉撰る
裏判を押して悪夢を見続ける
腕組みの紫煙へおんな近寄せず
贈られて唯それだけのペンタント
嬉しいことに米櫃の米が減る
人生をまだ捨てきれぬ注射針

和歌山市 垂 井 千寿子

一日を自分を出さず平和とか
もう母の世で無い実家の台所
少年院温い家庭の子も混る
えくぼからすらりと毒のある言葉
愛憎は彼方興福院の尼
一呼吸して憤り素通りし
眼鏡のくもりパンのみに生き
戦争の渦に青春置いて来る
羨望の矢がささってるミンクの背
忘却の彩はワインの底に溜め

和歌山市 山路 佐代子

覚悟するまでの長い夜があける
長男の船に乗りかえのんびりと
誘惑を迎える本心切り出せず
言論の自由書店でひしめいて
伝言板二人だけの文字があり
若い娘の指輪ドラマの序曲かも
畦を焼く炎春へのページェント
飛躍する女軌跡を覗かせず
男らしい男は酒の威を借りず
全力で挑み敗北感はない

和歌山市 細川 稚代

適当に散らかっているあたたかさ
悲しみの涙へ遺影明るすぎ
ムードない唐菱木に賭けてみる
霊場も避暑地にかわるサングラス
どんちゃんさわき時にはそんな夢も見る
母と子にかけ引きのあるかなしさよ
三界で一人位は惚れてくれ
親不孝未だ出来そうな親が居る
曖昧に言うから罪が一つ殖え
あおるだけあおって逃げてゆく他人

鳥取市 森田 熊生

自信ある道直線にみえらぬ
青春の汗に賞状などいらぬ
忘れたい過去は砂丘にうめてくる
子には子の秘密小さな鍵を持ち
働いてあふれる汗に詩がある
点と点まだつながらぬ日のあせり
稲光り五つ数えて安堵する
不意打ちを縄心得たよりに逃げる
天と地の恵み豊かな稲ができ
夢のある暮しの中で鍋がふく

出雲市 原 独仙

お薬も入れておきます旅靴
またしても文化の国にジャンボ事故
身籠った腹でうやうやしく筆式
女性から電話あんなのなんなのさ
杖ついてまだ妾宅へ用があり
労働は神聖糞尿処理係
敬老の裏面に人口過剰記事
点滴だ酸素と延ばし苦しませ
父の過去扉の鍵は母が持ち
茶飲み友貫えに含み笑いする

島根県 小砂 白汀

眠ってはならぬゲームがまだ続く
子をさとすための余白は空けておく
夢すててしまえば何が掌に残る
床柱直立不動のままの艶
耐えて来た足跡深く砂を掘り
なめんなよ残る半分目あきだぞ
ウィオロンもダンテの弟子も腐りだし
子が巢立ちカスターネットがもう鳴らぬ
判コだけ信じて人を信じない
飲みきれぬ嵩だが薬返されず

島根県 松本 はるみ

古里を離れた夜に川千鳥
情熱を冷ます芒が開拓地
壁越しにかかわりのない笑い声
胸もとにしこりをためたままの罪
一日のざわめき一人湯におとす
木蓮の白さをなつかしく辿り
雪解けの雫に刻をささませる
死ぬ日などないと思うた父の背
幼な子の髪さらさらと陽をはじき
めがね越し青い炎がからみつき

島根県 岩田三和

一匹がはねればみんな跳ねる魚籠
柿右衛門一生ほれた柿の色
胸あげの最後に受けてくれる人
四十二歳分解掃除してみます
助けあい五本の指で箸つかう
悪代官米作らんで良いという
汗かかぬ人も勤労感謝の日
つまみ食い叱りながらも味を聞く
柔らかいとこをやや兎にほぼほらせ
光さす方へとにかく歩く虫

島根県 谷岡芳枝

透析の鎖の重さ引きすりつ
太くなるシヤニトと共に歩を刻む
透析の日を遊ばせる白い雲
雲追ってあの青空を歩きたし
生かされる世のもろもろへ掌を合す
どん底のリズムを変えた孫の顔
雪しんしん雨天絵となり詩となり
雨の窓蝶々の様な傘走る
善人に腰かけ兎が酒を酌む
青空へ唄う音痴のこと忘れ

松江市 恒松叮紅

別居して嫁の意見について押され
牡丹雪人が倒産する話
芸が身を助けて無職忙がしい
正直のレールを父が敷いてくれ
酒好きと見たかグイ呑みの旅土産
瘦せましたねエと気になる事をいい
定年へ朝のゆとりを羨まれ
肉食と菜食別居して平和
あらそえぬ血筋に高所恐怖症
責任がないから孫を可愛がり

尼崎市 奥山美智子

沈む日はひたすら聖書に飢えてくる
愛用の筆にすてきな愛がある
束ね髪未練もいっしょに結びあげる
地平線に佇つと初心がよみがえる
影武者のスリルが欲しいときもある
虚しさは行き交う人の亡父に見え
めし粒の白さに飢えての国おもう
年の瀬へ日めくりばかり調子つき
やすらぎを明るい日ざしからもらう
さようなら逢える願いもこめておく

兵庫県 平野百合子

峠越す手綱は妻が握りしめ
一人居の悲劇へ我を置いてみる
目分量それで答が出るお味
出る杭を信念とする父が好き
神の鈴心洗って折り返す
寝たきりも知らず表札いばつとる
欠点は妻が背負うて美しい
夢だけで終った父の骨拾つ
尺貫でなけりや決め手が揺れ動き
鯨尺仕立てに生きた糸切歯

大阪市 林ひろ子

詫びられず沈黙続く意地をはり
ねぎらいがすんなり言葉の老夫婦
コーヒーの香今日幸福の第一歩
語らずも秘めた真実悪く秀句
握る手に希望持たたい温かみ
目覚しへ素直な朝で気持よし
胸中を秘めて別離の強い愛
点と線つなく柳友へ日が登る
忍耐を積んだ幸福笑みで見る
愛しても主婦の要は外されぬ

八尾市 内海幸生

生きてゐることの一つに酒の味
俺抜きの地球が回るよ正確に
家一つのこして男小さく果て
金借りる声は男を捨てている
王様に終焉告げていると金
一線に並ぶと駆出しそうになる
ベンベン草棲みにくうても生きてゐる
色即是空その真ん中にある自由
蠅の死や詩人の酒は冷えている
味噌汁に花嫁朝を試される

鳥取市 武田帆雀

立ち読みの知識早速試し斬り
年輪の刻みが一人承知せず
名演技ビエロに拍手するも忍
倒産の杜調息の根を残す
耳ONに拡大すれば分が悪し
喫つたばこ加速つけてる来訪者
棒グラフ陥ちていずこへ消えたやら
支社長の上の人来て観る立場
肩書が邪魔する職へ挑戦す
やぶさかでないがと言葉弱くなり

八尾市 高杉鬼遊

野仏の茶碗に雪が盛つてある
合格をしない絵馬にもさくら咲く
キリストの仮面とミサでよく出会う
百匹に嫌われながら生きる鬼
大臣もその日に食つたカレーの日
三里塚ぼろぼろ落ちる日記帳
語り部の背にケロイドの跡があり
一人一党頭を下けることがない
願わくば柩に辞書を入れ給え
葬儀屋の車知つてゐる浄土

八尾市 高杉千歩

はつきりとさせる言葉で辞書でひく
相談にきた娘連れ出す市場籠
やおら立つ勤めの肩へ傘をさす
流れ川愛が生れて愛がゆれ
健気にも生きる手段のいろには
親も子もいとし野布施のおもちゃ菓子
石仏の群れへ浄土の野花満つ
穢土浄土一筋に生きる道なれば
ふり向けばけし粒ほどの苦が笑つ
何処までも変らぬ答持ち歩く

竹原市 古田鈍舟

父の夢子の夢明日の雲の色
目標を少しゆるめて五十坂
欲を捨てるにはまだ早い五十路
あんだ坂こんだ坂とや五十坂
時をまつ朱子の哲学読み返し
赤々と燃えてみる日の充実感よ
筆洗う満足感に遠い道
良い紙に出逢いさえてる墨の彩
一日の終りを墨の香にひたる
のんびりと吾が道行くか蝸牛

竹原市 古田比呂子

0歳の瞳の中にいる私
つみ木つむ私とくすす一歳と
肩車ほうら夕焼けきれいだね
二歳の瞳に少ししたじろく時があり
子の視野の真中にある母として
バラ一本買ってリッチな一日よ
立秋や姑と煮しめのこぶ結ぶ
風鈴の音にいらだちを論される
墨色のにじみにやすらをかき見つけ
堕ちてゆく私にすつと蜘蛛の糸

島根県 堀江正朗

温かい布団の中で欲かぞえ
意地張って何カローリーか逃げて行く
ほめられて盃を持つはずかしさ
意地悪はできそうにない耳という
伴せな舞台のなかの酒の味
花ほどに綺麗な正座してみたい
大の字に手足伸ばしてあきらめる
停電で音半分の静かさに
いくら寝て起きても僕の目は見えぬ
下駄の音妻の歩幅で鳴らす音

島根県 堀江芳子

去ぬ孫を待つてたよりに夫あまえ
秋祭り獅子も天狗も孫泣かす
妻と書く欄へ幸せだと思っ
山陰の風はころつと雪に変え
うたた寝の炬燵に酒の香が残り
その中のいい鬼も呼ぶ豆を撒き
苦勞みな淡く点滅してるだけ
師も友もみな温かしわが匂集
子の想い親の想いで酌みかわし
久し振り年のまるみに会ってくる

島根県 槻谷一葉

松と菊活けて心をとり返し
ゆく春を惜しむか水の落ちる音
雑念を捨てて毛糸の目を拾う
散ることを知らぬ造花の冷やかさ
感覚のずれで話題も途切れがち
波に身をまかせ水鳥くずれない
さよならも言わずにつばめ軒を去る
しゃべり続けて誘惑の手をのがれ
椎の実の昔のままに落ちていた
いまさらに夫の位置の広さ知る

松江市 舟木与根一

泥んこを叱らず泣いたのを叱り
子の知恵はすでに葡萄の種を出し
マネキンが着るから素敵と気がつかず
イヤリング男へつんと見せるもの
すらすらと他人の始末書かいてやり
頬髭の痛さをうつかり女言ひ
上席のゆえに若さが目立つなり
原色で土地成金の家が建ち
養老の滝を探しにUターン
末っ子が一番父の海泳ぐ

八尾市 高橋夕花

風のように花のようにには生きがたし
いちこ皿右も左も男の子
かなしみの数だけちがうあね妹
母と子で渡れぬ橋が見えてくる
ころがった毬のゆくえに亡母がいた
鬼灯が亡母よ亡母よと赤くなる
ブルーで塗りつぶした或る日の自画像
空白の日記落花さかんと書き始め
たとう紙花の姿で老いていく
夫のまわりばかり歩いている足だ

和歌山市 若宮武雄

人間に飽いて赤ちゃん抱きあげる
みな水に流してしまえとは他人
達者でなただそれだけを言う名残り
八時間ぐっすり夢のない男
三度目に吉ひき当ててみたものの
コンピューターの答えを信じない神箋
銀行のカネならどって事なから
まつりあげられて落ちつく鬼瓦
水仙の匂いへ恥じる今日の事
うるわしい花よ匂いをもつ少し

海南市 牛尾 緑 楼

子の余白埋め尽したい母の色
差し伸べる手に母親のエゴがある
T.H.E.・S.E.N.R.Y.U一致団結しませんか
献体へ裏金積んだメスの切れ
モーニング着ても父は哀しいぞ
白黒の写真で父の青春記
本音捨てきれず敗者の席にいる
四面楚歌ひとつは妻の顔である
手鏡にはいる二人の人生だ
シャンソンが流れて少女に秋がくる

和歌山市 坂部 紀久子

一冊の本読む前と読んだ後
現実生きてチャネル変えられず
寒に咲く花の主張は曲げられず
水仙の少し汚れた白が好き
突つ込みをボケが受けている夫婦
おむすびが拝む型でにぎられる
にんにくのかけ台所包み込み
焦るまい焦るまいという焦り
洗濯のしたくなる様な川に出る
逆らわねばこんなきれいな空がある

鳥取県 小林 由多香

過去捨ててのひとりの旅は雨がいい
保護色に己の好みなどはない
蟻ななを迷うて俺の臍上る
残業から帰れば巨人負けていた
平凡な石で蹴られた方へ向く
盛大な拍手嫉妬の音がある
落選のポスター笑顔持ったまま
ポスト今日機嫌の悪い手紙抱く
一浪へ母あたたかく父きびし
反省の横顔ピンタ待っている

島根県 榊原 秀子

ゴム毬のはずみにも似る若い恋
紋白蝶つかず離れず夫婦かな
雨宿り貸して貰った赤い傘
遠く住む娘ほど母の日大事がり
送りたいそれはつかりのちまき巻く
喪の胸に菊は見事に咲き誇り
冬枯野謎めくままに白い風
望郷や雪の深さと掘りこたつ
鏡開き小豆コトコト煮えてくる
さっぱりと忘れろ夫が酌いでくれ

出雲市 石倉 芙佐子

紅珊瑚きわく深まる日の胸に
わたくしが笑えば笑う日の人形
世を拗ねたまじらぬ帽子は唄が好き
水引草なまじらぬなど売りはせぬ
冷静に返れば哀し彼岸花
人妻を騙しつづける彼岸花
もう一枚女に足りぬ皿の数
美しい方の仮面をつけてゆく
精一ばい生きねばならぬ秋の蝶
人形の情を嫌うはたん雪

竹原市 小島 蘭 幸

またの名をウルフと言いいぬ男の眼
サーカスの象の涙を見たような
夜の汽車過去を捨てると走り出す
ほら穴よむかしむかしのあたたかさ
鳩はあふれていくさを忘れ飢え忘れ
子を抱いて宇宙の果ては思いうまい
産声をしっかと聞いてきたみどり
父の皿狙う次女の眼長女の眼
指きりげんまん子の瞳は見ないことにする
なさけだな灯りがひとつつけてある

倉吉市 渡 辺 独 歩

吠えている犬にも思慕の声を聞く
束の間の出逢い札束との握手
マニキュアの爪に百鬼を忍ばせて
妻の勲章夫が磨いている
鈴に閉じ私の心を振らせたい
終章の愛は血汐の中に抱く
ロケットに組みこんでおく射程距離
晩年に埋めてる若き日の虚ろ
鏡との問答秋の日が落ちる
明日を見ぬ推理は瓦礫だけ残す

岡山市 荻 野 鮫 虎 狼

本当の涙は腹の中へ落ち
実印を捺す友人は無言なり
太陽に胸張り2D K朗
湯上りの化粧は夫だけのもの
ふるさとの友がついでに寄ってくれ
三面鏡母から妻の顔に変え
痛い程肩たたかれて久しぶり
湯煙りへ妻が浮んで来る旅情
ライバルの無い人生を持て余し
赤字線ほんまの日本が残ってた

富山市 舟 渡 杏 花

号泣へ葬儀屋狂いなき手順
八ツ裂きにされるさだめの花名刺
一張羅いまはき溜めの鶴となる
なめらかな舌もある日は人を斬り
しあわせを裏から覗くのも他人
マイペースなどと怠惰をすりかえる
定説へ凶たく生きる泣きボクロ
一芸があつて自信のはぐれ鳥
古傷を撫でるおんなの遠会釈
荒削りのおとこが残す掌の温み

岸和田市 福 浦 勝 晴

初雪や前だれ受ける子供かな
郵便屋ひと月走って十五円
水牛の背に鳥とまる日の長さ
年暮れて売れぬ小説書く男
糟糠の妻の背中に灸の跡
阿呆の限界煙突を折つたらか
大臣の魔羅逞しく講和成る
オサケバカリノムトウチャンバカヤロウ
妻と別れ泉にくれば湧く疑惑
釣り銭を読みながら飲むコップ酒

大阪市 藤 田 頂 留 子

どう逃げて見ても地球の枠の中
九官鳥口止料は何がいい
もつたいないが大師と今二人
すれちがいざまに女の火花ちる
風止んでひもじい顔に鯉のぼり
何時の日か星に成るのが砂の夢
カーテンを開いて朝を深呼吸
大阪より古い平野の歴史道
念願の新車に階下を明け渡し
年よりの今日に自分の明日を見る

大阪市 松 本 涼 一

真実は一つ気にせぬ後ろ指
土の雑貧しき民話ひとつ持つ
一日一善きつと女神に出会うだろ
集金は寄らず落葉が舞い上る
子の誇り力仕事の父を持つ
カクレンポ髪がかすかに匂い出す
一周忌までは目先にすぐ浮ぶ
青梅が匂うと亡母が生き返る
捨て犬と共に帰って来た夜警
停電へ仏壇役に立つところ

大洲市 米澤 曉明

真実を言えはあなたが怒ります
またおいで必ず来ます手のぬくみ
もう見えぬ子を見送っているも親
潰けたまま壺で届いた母の味
芽を出せば快い風荒い風
東大が受かり女に戻ります
着陸をして空港は広いとこ
一人来るとこでなかつた觀光地
つままれる蜻蛉はおらぬ青い空
故郷はいいなとんびの輪に見入る

大阪市 西川 善紫

御仏にいのち預けて今日も生き
年金が何より頼り古い二人
金貯めていつか家内とフルムーン
我を折って婦唱夫隨の日を送る
凡人の愚かさすぐには有頂天
春の小川めだかの学校に新入生
せんべいはもう飽きあきと奈良の鹿
魔法のランプ金の成る木出して欲し
えーものやろと俺の馬鹿に薬くれ
馬齢重ねて六度迎えた戌の年

大阪市 松尾 柳右子

キュービ一の両手無心に生きつつけ
長電話叱れば娘銭を出し
二、三浪してまでくぐる門一つ
働けど吸取紙のよう娘が二人
先方から掛けてもらつて長電話
關病のバラ見つめてあきもせず
安とする結納すませ不安増し
姥桜せめてネグリジェピンクにし
春風に悪口も乗るににくい人
詣つてぬ娘彼岸タンゴは腹二杯

島根県 藤井 明朗

人生の峠へ夢を抱いて新春
坂道に来て幸せな風に逢い
札束の魅力におとこ笛を吹く
自然の恵みを忘れてる人間の罪
気がねする事もないのに母の愚痴
いつか話が作られて渦中の崖に立つ
金出来てからバランスくすれだし
先生の信念くすれる無難主義
平穩に慣れて自分を見失い
十代の非行遠巻きして騒ぎ

竹原市 森井 菁居

針山の向こうに罪を許す海
袖染舞う鬼百姓の匂いする
サギ草の情緒を犯してはならぬ
負けて勝つ男がかさす白い旗
望郷の枕の中で蝶が舞う
自動ドア礼儀作法を否定する
転落の詩集に戻れ愛の文字
魂胆を持つと酔えない酒になる
すっからかんになつたら渡る丸木橋
花好きの僕にはわかる花の私語

竹原市 古谷 節夫

春の序曲へ雑草背伸びする
節分の豆へ国籍問うてみる
市場かごチラシが春を連れてくる
正月へ三日続きの悲報来る
熟年へ情性のように回る独楽
病院で風邪を貰つた妻の咳
病名を問えば姉妹員となる
旬の味二級酒汲んで満ち足りる
スランプへなみなみつけぬコップ酒
ジャンケンポン男は石で勝負する

松山市 谷 真風

新聞の日付で今日を確かめる
妻に病まれ茶碗も洗う寒の水

妻逝く

当てのない慰め花が咲いて散り
蠟燭の灯と線香とひとりの夜
影もない足跡もないのちかな
美味しく炊けたよ亡妻にも供え
心の灯自分で点すほかはなし
セールの影もやっぱり鞆提げ
片付かぬ事のみ余生流れゆく
稲光り遠く戦う国がある

八尾市 大路 美幸

港にはやさしき霧がある
海は青空は青なり敗戦忌
果てしなきゼロの真下のいのち達
耳もて囁やく言葉は信じない
雪ぞ降るまっさかさまに母が降る
十二月八日の月に放尿す
百点を知らぬ子に買うぬくい本
精いっぱい生きるあしたは謎だから
それだけのサヨナラを持つ終電車
走馬灯千の交際千の色

竹原市 山内 静水

政敵は同期の桜左派と右派
脱税の桁憎しとも哀れとも

『同盟』の二字暗号が詰めてある

手応えは確かに闇に投げた石
秋最中個展の中で茶をよばれ
若い気へ老人手帳とはシヨック
窓すこし開けて娘を送る朝
呑んだくれよその奥さんばかりほめ
あの方と話せば善人ばかりなり
くすりほど飲めようこびの中に居る

竹原市 山内 房子

生かされておかげと思ふことばかり
しあわせは夫と法話の中に座す
二人でギッチラギッチラ漕いだ海
山畑へ通うわたしは作る人
それなのに愚痴こぼせないこぼせない
ホーナスが出たよそ様のお買物
旅ゆけば旅のころにさせる風
春光に過疎のつらさも溶ける音
末っ子よ負けるな父母はまだ達者
ひそと咲くすみれ裏切りなど知らず

藤井寺市 楠 昭子

夫婦茶碗旧憲法を守りぬき
老いた母杖の変りに乳母車
階段の少い室を予約する
これからも同じ顔見てついでいく
稼ぎ蜂同じ間取りの巢へ帰る
看板の裏はベンベン草の屋根

二階借り妻の身内に囲まれる
石橋をたたいてチャンス逃がしてる
勝つ人を生まれつきだとあきらめる
急がない息子晩成型と見る

東大阪市 金本 不二夫

呼んだ妓の唄は温泉音頭だけ
取引所目先と運が絡み合う
新進の気魄欲しいと解説者
温泉で消えた女の過去を知る
猫のひげ家庭不和を感知した
野心家は絶えず笑顔を忘れない
南港で釣った魚は猫にやる
置き手紙あなた自由にして上げる
煙吐く女の顔は憎らしい
味だけは絶対負けぬと屋台引く

美祿市 安平次 弘道

平凡な影は夫婦の安らぎか
信号が青に変わると隙が出る
退屈なドラマ普通人ばかりいる
盆栽といつまで語る人嫌い
酒ちびりちびり仮面がずれてゆく
結果論また責められる非常口
良心が麻痺して闇に目がなれる
銀婚式妻が抱いている空手形
ただし書きにどんでん返し秘めてある
影武者がその気になって来た謀叛

玉野市 小谷 仙山

良縁に桜の花は八分咲き
死ぬまでに解けと仏が謎をかけ
正と邪とその境目で剣を研ぐ
大風呂敷広げて包むものがない
七十のまだ老人に成り切れず
平等と下から上に腹立てる
泣き寝入りこれも蛙の生きる道
細く長くみみずの夢はどこまでも
どの鏡が真実なのか裁判所
士農工商徳川様はまだ続く

米子市 林 瑞枝

宿題へ父の辞典も錆びてくる
都市砂漠虹へとときめく詩もなく
燃える胸理性の壁にさえぎられ
蝶一羽採まれ光の粉を撒く
相和して人類玉虫色に溶け
手さぐりの絵筆自問自答する
物豊かなるあけくれで愛に飢え
傷心へ山はカンフルめく力
灯を映す疎水は愛を繋ぐ水
野は茂り乳房のルーツさぐる雨

大阪市 大坂 形水

辞職して済む責任はしれたもの
番組を一人二役して埋める
りハーサルでは台詞ゆっくり言えたのに
だと言つて妙な受け皿でも困る
向う岸の方でもこつち覗いてる
よく眠る男に運が向いてくる
コーヒーに誘いコーヒーだけで出る
留守番をすると電話がよくかかる
日曜の夫を縛る雨が降る
孫はもう遊び盛りを塾通い

大阪市 西田 柳宏子

冬の陽がわき見するまに露のとう
もつ誰も期待せぬのが気にいらず
スタートは一直線とみた誤算
熟年の知恵はよいけな口出さず
ちよぼちよぼのライバル同士牙をむき
陰口をせんとたいたい口ではめ
喜寿未だ余生といわぬ竹刀ダコ
お互いに悪友として信じあう
裏方に誇りもつてる生一本
余生など未だまだ遠い定期券

羽曳野市 塩満 敏

大声を出して地下鉄待たしとき
妻の指せてめで真珠でかざりたい
七人の敵を求めて朝の駅
耐えてきた土は緑の春を生み
乱世に生きるこぶしをにぎりしめ
信じ合う無言の友の手が温い
どんぐりも今に大樹になってやる
桜島おこれ不正がある限り
幸せな夫婦になれとにらみ鯛
人間になつたか孫は歩きだし

大阪市 長谷川 春蘭

古き良き明治がおう愛唱歌
母に似た人に手を貸す歩道橋
印象はあんな白髪でなかったが
いただきますごちそうさまの孫をほめ
中元は妻と合意の塩昆布
お年玉孫の期待を裏切れず
團児の絵象は鼻から画き始め
雑布をろくに絞れぬ子の世代
水中花土のぬくもり知らぬまま
稲荷山赤い鳥居をくぐる春

大阪市 小出 智子

卵の黄身をまことの愛と思つべし
道ずれが必ず傘を持つてくる
大人にはいまだになれぬくすり指
楽器屋も花屋も応援してくれる
諍うた夜も枕が二つある
七十はさほどに遠きことならず
樹を伐った日から聞える風の音
あじさい寺の冬を想像せぬことだ
風花の舞う日を父の忌と憶え
山の絵の下で今夜も眠ります

大阪市 河野 君子

合掌の母指先に子を宿し
家族の中で夫他人になりやすき
わたくしの素顔に出会う午後三時
夫婦と言う絆で自由席にいる
喜怒哀楽夫婦は同じ面拾う
家族とは湯吞二つが置いてある
暖炉囲む夫と齡の重さなど
くさり編みが続くよ夫婦の足の跡
てのひらに戻る子らはもういない
いちばん頼りになるのは私老いぬべし

大阪市 神谷 凡九郎

ユタでない時が時々僕にある
散り際と言う言葉だけ考える
本当の愛貧乏が言い聞かす
本当に深い祈りがユタがする
あの時のあれが決心やつたのか
転がした心と一緒に生きて行く
音ひとつまでが女を捨てている
貧乏が息切れもせずついて来る
オイ活字ピラと一緒に死ぬんかい
大声で呼んだらユタが飛んで来る

豊中市 橘 高薫風

われもまた己を知らずお元旦
シクラメン伐折羅大将より激し
禅僧の描く円に似た大根煮
ぎんなんの水平線も遙かなり
花の散る今日一日は物言うな
かなしみの西より来れば西へ旅
自愛とはこの一杯よ誕生日
砂時計突如龍巻母が死ぬ
合歡の花母の乳房を焼いて来ぬ
亡母の闇この世は雨が降ってます

八尾市 香川 酔々

古傷が少し痛んでくる港
方言を逃れられない地の絆
サイコロの一本目が出て雪になる
赤電話八百屋お七が掛けている
ためらいも無く警察が肩に来る
大根の白さ故郷の彩になる
噴水がだんだん低くなり暮れる
河内葡萄の出来考えているささみ
カナリやも一緒に歌を忘れてる
屋根越えた毬は白さを失いぬ

大阪市 江城 修史

巡る四季素直に巡るそれもよし
子が走るレールよ錆びること勿れ
掃省子を送る心に切り火する
余生とは私に遠い虹の橋
凋落の木々の葉音よわが命
再会の約束空し雲の峰
生さる嘘小さな悻せ守る嘘
偏見へ戻つ尾を振らぬ誇りもつ
荒れた掌を苦にせぬ妻の人生譜
真珠婚幾度妻におんぶされ

岸和田市 宮園 射月芳

宮仕え函車として判を押す
大半は意見を持たぬ多数決
精勤な男意外な裏の顔
宿命のふたりに椅子が一つある
敗けた日にとてもやさしい目に出会う
狭くとも円い我家の灯に帰る
四駒の漫画で足りる人生か
たのしみの時間は束の間に消える
好き嫌い言えぬ私は飢えている
人柄を買われ和解の使者に立つ

藤井寺市 笠原 吸江

何を見学したのか議員のバスポート
觀光に媚びぬ秘仏の輝きよ
無言の中に男を馬鹿にする
特売場きのう来た手がかき回し
酒うましわたしは薬と思つてる
生ささまをあらわに枯葉流れゆく
据え置きのない人生のまがり角
子よ孫よわが家の楽譜で歌うかな
恍惚となつても妻は妻である
妻よりは先に死ねないのも輪廻

七尾市 松高 秀峰

栄転の荷札が風に染しそつ
三天婦の羽織が続く渡り初め
宴会になつて候補者顔を出し
医者かえて薬も変えて年でした
健康もコンピューターに左右され
三代目減多な事でさからわす
顔ぶれを見て焼香の順を決め
剃刀のよふな言葉にある寒さ
親と子の絆送金ある間
痛い目に合うまで懲りぬ現代子

鳥取市 両川 洋々

枕木の寝言も聞いて旅ひとり
冷え症の巫女バンストを二枚はく
試験管ペビーが神をまごつかせ
ノーマアの核が地球の裏で裂け
僕のドラマのああ真中に妻を置く
いただいた視力ウイנקなどすまい
傷ついた自負を癒す日バラを買う
火消し壺へおんなの性を封じ込め
ローカル線死ねと政府が補助を切り
親の気も知らず二浪の腹を決め

吹田市 園田 文子

わらぶきにこぼれる野菊バスの窓
山さるの温泉浴びる牡丹雪
わらぶきに積つた雪の懐しさ
鈴の音ものどかに巡る島の茶屋
名コック帽子の重さ業の道
豪華船プールに遊ぶ老夫婦
台風を甘くみているスケジュール
逃亡の女は化粧厚くする
波まくら島のきびしさ過疎の子等
ウエディング泣かぬ約束だった筈

米国ホノルル 前山北海

金の成る木求めハワイに移民稼ぎ
呼び寄せた妻と穠く蔗畑
親子の絆を繋ぐ日語校
二世以下生れながらの米市民
溜めた金元に独立店開き
パイオニア讀えて移民百年祭
日米戦本土に抑留生活す
終戦後帰還店舗を妻守る
有吉知事日系社会の地位固め
引退の余生を趣味に生く暮し

富田林市 田形美緒

生む期待靴のカカトも低くなる
おふくろと呼び名が変り親離れ
うまくいくイメーシ通りのお姑さん
ローソクの情熱受けて走馬燈
銀行のカメラに向つてハイチーズ
御前様ボチだけ寝ず待つてくれ
觀光化された祭りに血は湧かず
墓参りやつと涙が出なくなり
やきいもは美容か肥満か定義つけ
親切の傘が荷物の雨上り

岡山県 濱野奇童

一本が素直にならぬ朝の櫛
焦点の定まらぬ日よ木の葉舞う
陸橋で働き蜂の列を追う
計算の底に沈んでいく愛よ
ひとり酌むグラスへ罪が浮いてくる
輪を抜けた奴は照らさない炎
喋らねばその灯は消えるかも知れず
主張するバツジが冬の陽をはじく
ローソクの炎へ弥陀となる母で
満願へ父は頷くだけで良し

大阪市 那須鎮彦

安全な明かり選んだまわり道
あこがれの輪抱いて壺無言
からくちの母の躰が煮えてくる
凡人のきめ手は健康だと思い
地に落ちる度胸をきめた果実達
一言がその人生の糧となり
一ト筋に生きる豊かな眼に出会う
賛成の手はあかさされた主婦ばかり
群を組む鬮先鋒うたがわす
ああ夫婦一つの星になれるだろう

兵庫県 仲井素水

他所ゆきの言葉で上手に持ち上げる
空腹へ隣のおかず匂うてくる
片足になって重心定まらず
事始め縁起かついで磨出し
茶飲み友などと体よいことを言い
横飛びの止らぬ桂馬の道覚え
蠅螂の斧振り上げて瘦我慢
口だけは立つが立てない足の怪我
これでもか神の試練の鞭に耐え
ふるさとの土の温みが性に合い

尼崎市 伊藤春子

追憶の花へ砂丘の白い風
賑やかな中の孤独が身を削る
豊かさへ静もる老いの美しさ
冷やかな言葉自立を願う母
決算を終えて車座うまい酒
路の臺首をか上げてわらべ歌
立直る沁みる言葉を胸にため
深夜の決意明るい日さしに揺ぎだし
認め印押しして不安になつてくる
立たされた岐路はまねかぬ試金石

千葉県 中村 有人

一枚の名刺で足りた紹介状
思い出をたんで女旅の宿
女房の名前はついに呼ばず古い
郷愁も大川端の舟着場
やり取りは紙一枚の事になり
いい文句だから都々逸おしえよ
花言葉忘れて今日も種子を蒔く
わかるよなわからぬよな第三者
男なら洗っておこ首根っこ
世の中はおかめひよつとこあ夫婦

富田林市 福田 きぬ

昼寝してる間にドラマ終つてた
稲光りあれも火花か聞きに来る
あの声は去年の逃げた鈴虫か
台風はもう来ないかと曼珠沙華
台風は北海道へ旅まわり
郷里からは餅が届いて秋祭り
池の面に紅葉うつして秋深し
柊にあられのような花が咲き
悲しげに梅雨空見ている鯉のぼり
二上山まで泳ぎ着くような鯉のぼり

橋本市 岸本 木魚

持てあましながらいいとただけを賞め
あつさり出す不安の影うつる
ブレーキを掛ける社業は急カーブ
土深く先祖の汗を感じさせ
いそいそと怪しい傷に触れもせず
手腕家も大きな傷となる短氣
人のよい父の判には泣かされる
スーパ一の横で愛想よい八百屋
赤字だと言いつつ店舗建て変える
ふるさとを素直に守る鎌を研ぐ

出雲市 尼 緑之助

減反の怒号むなく米の貌
足一本残してバツタ飛び去りぬ
顔ポスター胸からは見せられぬ
貫禄も金が支えの剣が峰
咲くまでが花の運命か雨ですみ
風走る山の寺にも鯉織
欠伸してもひとりしよぼしよぼしぐれ
内ゲバの殺人活字が寒くなる
能面の白さは既に髑
誰がために残す日記か書きつづけ

富田林市 板尾 岳人

ケーキ屋の時計に年齢は聞かぬもの
コスモスに知られたくなし腹上死
ませ御飯好き男のさらし首
冬の葉で飾る柩は軽い骨
弔辞読む便器の中の人形の死
自慰する吃る少年旅仕度
乳母車妊る猫の三分粥
騙されなくなった積木の性知識
風と住む中途半端な処刑台
影法師首なし地蔵にある喜劇

奈良県 植村 寛治

年を取るほど早く来る同窓会
えべっさん詣りの心へ福が来る
お水取り春の山里雪の花
引き返えず勇気が欲しい山男
酒飲んで気弱な河童踊り出す
見舞客帰れば淋しい水枕
馬耳東風あげくの果ては四面楚歌
井戸水も換えねばならぬ母の知恵
山の峰雉木林が人に見え
立札にカブト買います登山口

大阪市 小野風童

生い立ちは貧しさという試金石
 ポーナスを下見しておく百貨店
 新進の苦節十年妻がいる
 恋語る大阪弁が淋しそう
 半鐘のやぐらが残る遍路道
 これだけははっきりさせた妻の位置
 うちそとの孫には生まれ七五三
 お義理でも孝行のまねしてみせる
 橋渡りそこから町が若くなる
 どちらでもよいことを妻許さない

堺市 河内天笑

あのダンブおんな運転してるがな
 やり切れん音で空缶捨てられる
 マッチの早業ライター引つ込める
 修養がまだまだ足らん遊びよう
 ぼろくそに言われた出合い大事がり
 ひと目惚れ天から降りて来た女
 指切りの橋を渡って嫁がくる
 春の街少女は魅力たしかめに
 地獄とは三原色の亀裂かも
 おわかれの握手へ桜どつと散る

堺市 河内月子

若菜摘む倅せそうな背を向けて
 昼の酒女のぐちは聞き流す
 欲捨てた日から夫婦で土に溶け
 種なしのアドウは嫌い楽天家
 立話西陽が背中押しにくる
 つながりが欲しくて寒い街に出る
 断絶をちぢめるパイプ太く継ぐ
 幸運をつかみそこねた細い指
 隅っこで隅におけない顔をする
 やさしさに飢えると電話したくたる

藤井寺市 吉岡美房

抜けるよな空の向うにある戦
 制帽をあみだに順法列車着く
 辛抱の限界伝言板に見る
 帯きりり締めて女は過去を断つ
 留守番も出来ぬ夫と惚気られ
 家出人願ひに幸せな日の写真
 涙もろい父で刑事の職を持ち
 看病の窓三月の雪が舞う
 癒つたらという約束を抱いて逝く
 砂山を越えれば蟻の視野がある

羽曳野市 吉川寿美

曼珠沙華人の計をきく時燃える
 堪えて来た重みに母の背のまるさ
 世界一ギネスブックに若い夢
 春愁の花に葬送られ初七日
 想い出の宿にせせらぎきく夜寒
 ハイミスを背中に痛い新年度
 バイブレーヤー芸一筋のいぶし銀
 埋れ火を心の奥に四十坂
 花時計愛の翳りの時刻む
 パンドラの匣に入りたい筆のあと

藤井寺市 赤木和子

鋭角の視野青年に夢があり
 社の顔を自負交換の声美人
 保護色になって女が爪を研ぐ
 ペンネームここに奔放な私小説
 この出会い男と女になる予感
 堕ちてゆく女理性の矢を持たず
 胸中にあなた命と彫つてある
 来ぬ人を待つて女の意地を抱く
 女からおんなに変わる夜の静寂
 晶子から一豊の妻になるつもり

松江市 柳 楽 鶴 丸

半分ずつと言う落し穴がある
夫婦喧嘩ルールのないゲーム
正しい言葉を取りッ子は知らぬ
叱ってから何時も反省しています
コントロールがよくて更年期知らぬ妻
かけひきの道具と女読んでいた
マイコンが嫌う女と静電気
馬鹿になれる男は素晴らしい
落ちこぼれ死体順序を間違えた
湯上りの女美しい嘘を抱く

藤井寺市 吉 田 喜代志

雪国の雪を知らない雪見酒
マイホーム夢みて通る植木市
嗅覚に味覚が刺激される秋
孫が掘る一畝残す芋畑
反論が出て投書欄活気づき
めでたいと誰が決めたか鶴と亀
成人の決意きりりと帯結ぶ
戦争を笑う男性化粧品
安全の限度つかめぬ防衛費
おだやかな夫婦に見える倦怠期

八尾市 飯 田 悦 郎

もうよいと軽く笑って淋しそう
故郷の海が聞える船頭唄
秘密抱く女は鍵の音が好き
上手には言えぬ別れになる名残り
安定剤持って張り切る船遊び
掴もうとすればトンボに羽根があり
切り札があるので眠る真似をする
吠えてやる人が来たなと犬の鼻
無邪気さが少し残った反抗期
怪我をしてそれから指を工夫する

八尾市 西 尾 栞

へそくりを稼いだように言うも妻
おはぐるとんぼ川の流れに逆う気
定紋を入れた先祖の自己主張
水芸の傍に淡き恋心
さくら貝波のささやききいてねる
ホーム炬燵妻の名簿も置いてある
見学の出口でもらうぬくいもの
命の恩人いつしか賀状だけとなり
雪の峯越智水軍の島を指す
脱稿のポストの道の木の芽垣

第6回全日本川柳大会

日時・昭和57年6月13日(日) 正午開場
会場・青森県農業会館六階大集会室

(国鉄・青森駅より徒歩三分県庁向い)
宿題・第一部(事前投句5月10日締切)

「北」 時実 新子選

「時事雑詠」 広瀬 反省選

「手紙」 川俣 喜猿選

35×18センチの句箋一枚に一句ずつ記入、
句箋は無記名、封筒に住所、氏名明記、投

句料千円(定額小為替か現金書留)同封、

5月10日必着 〒556・大阪市浪速区敷

津西2丁目6-15、日本川柳協会大会係宛

宿題・第二部(当日出句・午後一時締切)

「雨」 永田 帆船選

「母」 臼倉 寿夫選

「こけし」 菅原 一字選

「笑う」 鈴木 青柳選

各部各題とも二句あて、未発表作品に限る

会費・千円(第一部投句に投句料納入した方

は無料、投句者、出席者全員に発表誌を後

日郵送)

表彰・文部大臣奨励賞・川柳大賞・大会賞

主催 日本川柳協会

東子市 田中柳人

寝たきりへ緑の窓を開けてやり
養子には手頃と次男すすめられ
逆らわず夫について来た月日
叱らない母の小言がよくこたえ
ふるさとの土になる気のウターン
栄転の背なにしつとの瞳がささり
混浴の裸あわてたのは男
いつの日か主役夢見る馬の足
年輪を刻む句帳にある手垢
愛情をからめて夫婦おるドラマ

寝屋川市 藤村亜成

余白の意味にひっかかっている名画
放心のごとくフランコ揺れたまま
プリズムを通して世相の色をみる
洗濯をしても落ちない悔いの悔い
太陽がまともに落ちてきて目覚め
鈍行の車窓ばかりばかりと陽があたる
一日が短い仕事増えてくる
約束してから固まってくる気持
手術待つ時間灰血にたまり込む
子が生まれ母親生まれ父生まる

八尾市 宮西弥生

ゴミ一つ拾って豊かになるころ
ひび割れの茶碗を抱いている絆
桶をもつ女を盗みたくおもつ
中年を一つの区切り鎖解く
独身のまわりに鬼が出て困る
草燃える敵も味方もない大地
女でもいたすらしくなるラッシュ
一枚の絵になる女の大ジョッキ
満月の宴と約束などしない
雑草が伸びて廃家に詩のこる

寝屋川市 高田博泉

美しい母はアルバムの中で生き
大声の方へ片寄りかけている
灰皿は朝のまんまで置いてある
やさしさはトイレに置いてある
さわやかな顔で任地を引揚げる
火事跡で明日の事業考える
肩書はなくても明日を背負う人
当店の味はのれんに聞いて呉れ
ファッションの一歩あと追う金儲け
蜘蛛の巣へ風さからわぬように吹き

高知県 赤川菊野

古木には古木の彩の花を付け
海峡の向う還らぬ人想う
酔えばまた哀しい過去が追うてくる
元旦に積んだ積木がもつくすれ
美しい夢を育てる毛糸玉
小雪舞う窓に写経の墨をする
春雷を遠くに聞いて春を病む
海峡を越える女の土佐なまり
千枚田文化に遠い灯を守る
子を生めぬ女童話を抱いて寝る

ご協力ありがとうございました。

<応募総数 351名>

川柳塔社

句評リレー

柳 楽 鶴 丸

植 村 客 遊 子

小 出 智 子

山 内 静 水

に伺えて可としたい。

厄年を無事にすごした出勤簿

小 西 雄 々

鶴丸―嬉しさがよく出ている。実感句。

客遊子―厄年というから一年間病欠なしに努めつくした作者の生真面目さそのままの句である。

智子―さりげなく、その人の生き方が描かれていて、「出勤簿」と体言止めされたのが、この句を引き締めて纏まった句と言えるでしょう。

静水―一見平凡な句に見えるが、「出勤簿」には一編の小説に勝るドラマが秘められている。もし「タイムカード」だったら……。

鶴丸―この句の命は何んと言っても出勤簿にある。作者の勤めでの地位を示している。無欠勤もさることながら責任をはたした喜びも又ひとしおであろう。益々の御健吟を祈る。

客遊子―鶴丸さんの申される通り現職では管理職であった作者、工場だから一般職員は「タイムカード」である。それにしてもよく枯れた句だと思ふ。

智子―身辺句として、地に足を着けた作品だと思ひます。

静水―体験は何人の心をも打つ。生活句云々と言う方もあるが、結局、川柳人は生活句

影だけがよろめく筈がない自覚

河 村 日 満

鶴丸―句はよく解るが「筈がない」で自覚している事がわかる。止めの自覚は説明になると思ふが。

客遊子―私は、日満さんだからこそ、そんな「筈がない」と強く心に言い聞かせているのだと思ふ。

智子―男性のちよっとした迷い、そんなものへの自問自答のあと「自覚」と構えてしまわれたので、余韻のない句になってしまっている。

静水―日満先輩の句にしては少し物足りな

い。「自覚」を行動に移してほしい。

鶴丸―どう考えても「自覚」に納得出来ぬ。智子さん、静水氏と同感である。

客遊子―この句、智子さんは「自覚」と構えて仕舞ったのがまずく、静水さんは弱いと申され、鶴丸さんは賛成され、四面楚歌となったが、各方面から突き詰めて行ったら自覚より外にないのではなかろうか。

智子―どうしても「自覚」にこだわってしまいます。「自覚」を省いたとしても、おおかたの句になっているのではないかと考えます。大先輩の日満さんの作品で、この句を抽出されたことはご迷惑なことだと思います。

静水―自戒句の味い方は人によって、当然のことながら相違がある。従って三人三様の意見が出たが、結論としては自己意識が充分

に始まって生活句に終るのではなからうか。

手の届く距離を保っているリンゴ

山本規不風

鶴丸—よくまとまった句と思う。「リンゴ」は娘(恋人)。

客遊子—私ならひと口かぶりついでいると思ふ。

智子—この句は男でなければ創れない作品かもしれない。はちきれそうな初々しい女性に対する心の現れかと思われませんが、これも川柳のたのしさでしよつね。

静水—相手が知っておろすが、おるまいが、一線を引いて眺めている作者の人格が伺える。かぶりついたら夢が消える。リンゴが実によく効いている。

鶴丸—智子さん、静水氏と同感。着想は一寸古い。

客遊子—智子さんの申される通り、心の現れ、客遊子なら一遍にかぶりついた。川柳は恐い物である。静水さんの申される通り、作者の人格が伺え、折目正しい人格がよくわかります。

智子—はじめに若い女性に対する心の現れか、などと評しましたが、何度か句を読み返してゆくうちに、この場合の「リンゴ」が動かし難い抜い方で、若い方の作品のような感

じがして好感のもてる句です。

静水—読明解しかも内容は広く深く、特に下五のリンゴは心憎いまでに効いている。私には着想の古さを少しも感じない。

人間の想いは何時の時代も大同小異、着想の古さを如何に表現するかが大切と思ふ。

鬼女の面いつか祈りの舞となる

八木千代

鶴丸—「鬼女の面」の着想は古いが、よくまとまった句。「いつか」で愛情がよく表現されている。

客遊子—心の推移を巧みにまとめておられる。

智子—作者は、鬼女の面に秘められている女の祈りを感じられて「いつか」に深い意味性を籠めておられるが、「舞となる」で華麗な舞台を連想される。

静水—み法を聴かされても、聴かされても所詮は罪深き私である。鬼面をつけたまま、ただ只、み仏にお任せするほかのないことをこの句から強く教えられた。

鶴丸—トップバッターであったため、一番時間をかけた。一度は智子さん、静水氏同様に思つてもみたが、どうしても同感と膝を叩く事が出来なく、平凡な只の面になつてしまった。小生の勉強不足が恥かしい。

客遊子—女の性を適切に詠まれた句である。

智子—「舞となる」とされたので華麗に流れたきらいがあり、句の纏まりにもの足りなさを感じて、下五の大切さを思いました。着想の素晴らしさには、さすがと敬服しています。

静水—客遊子氏は「女の性」を適切にと言つておられるが、私は人間の性と受けとる濃淡の効いた一幅の水墨画を見入る思いがして、強く心を打たれた。

妻の座でかみそり何気なくいじる

福本英子

鶴丸—幸せという感じがよく出ている。かみそりはオーバーかも、でも「何気なくいじる」で生きている。

客遊子—女の性を「うまくまとめられた心象句」である。

智子—「何気なくいじる」にこの句のテクニクを感じてしまうのです。お幸せなのでしようが、どうしても私の心にびつたりこないものがあります。

静水—「いじる」しかも何気なくの表現に一瞬不気味なものを感じたのは、思ひすじでしょうか。

鶴丸—この句にも何も言うことはない。何時迄も幸せに。

客遊子—皆さんもおっしゃっておられる通

り美しい句とありますが。

智子—何気ない動作が納得した作品になったとき、喜びも大きく、そして読者に感動を与えるのですが、この句には少し思わせぶりな面がみえてしかたがない。でもこんな作品を手がけられるのは作者の勉強の現れだと思います。

静水—私にはどうしても、この句から幸せとか美を味うことが出来ない。

むしろ、のんのんと胡座をかいてる吾々亭主族へ対しての警鐘として、神妙に受けとりた。

主語述語あいまいにして義理の仲

西出 楓 楽

鶴丸—読した通りの句。義理の仲は嫁姑であろう。『あいまいにして』はうまい表現。
客遊子—良い意味でのあいまいさに出合っ
て心あたたまる句。

智子—お二人のお説の通り、よく纏められた作品ですが、作者が女性であるだけに、主語述語と固い言葉をお遣いにならず、女性らしい表現をされたらと感じました。

静水—矛盾があつたこそ、この世がうまくいってると、現役時代に上司から諭されたことを、この句から思い出した。

智子さんと同様に上五が少し気になる。

鶴丸—智子さん、静水氏と同様、上五が固い感じがする。惜しいと思う。

客遊子—智子さんには悪いですが上五はこれで良いと思ふんです。義理の仲をうまくやって行くのには……。

智子—客遊子さんのお説のように佳い作品だと思います。この作者は本をよく読まれる方で、それだけにいろんな知識をお持ちで、ついむつかしい熟語を組み入れて作句なさるのだと思います。句評から少し逸れましたが、静水—初回は気になった上五も、諷誦しているうちに、これで佳いのだと思つた。

「主語述語」と大上段の構えから「あいまい」にしてとは、並の人間には出来ない業を習得されている作者は流石、羨ましく限りである。

自画像にだけは聖女の目を入れる

吉 岡 きみえ

鶴丸—「聖女の目を入れる」は死の瞬間、前向きで生き抜く姿勢がよく出ている。

客遊子—心のしつかりした佳句。

智子—昔から美しい瞳の人は心も美しいとされていますが、「聖女の目」といわれるのは、美しい瞳と解釈致します。女性らしい作品だと思ひますが、少しもの足りなさを感じさせる作品で、静水さんのご意見を伺いたい

と思います。

静水—作者にとつては「だけは」が命と思うが、第三者には、それが余り感じとれないところに物足りなさを感じる。

鶴丸—「聖女の目」は美しい瞳、智子さんと同感です。「だけは」と「入れる」に強さを感じる。努力して美しい瞳を入れて下さい。今回は七句中、四句よく知つた人ばかり、その上トップバッター、大変困りました。編集者の陰謀か、本当に不勉強を恥じております。

客遊子—瞳は心の窓とか、人間の見にくさにあきあきして、美しい姿を想像し聖女のよくな清くすがすがしい心にあこがれている今の世の中、作者はこのようなやさしい美しい心の持主であろう。

智子—作品の甘さはありませんが、作者の願望と受け取れます。読み返しているうちに無責任な評が出来ないことを感じました。

静水—作者の願望はよく伺える句であるが私だったら「聖女」を素直に「おんな」として鑑賞したい。

編集部はお人が悪い、時も時である。塔社改題二百号でもある、栄光の五月号を飾る句評よろしくと、選りにも選つて私達に速達で回つて来た。勇気を鼓舞してペンを執つたものの、思いのままが文字にならない。

句評の評を戴けば幸いである。

愛染帖

橘高薫風選

青森市 工藤 甲吉

早春の光も翳るビキニ・デー
啓蟄を雪の穴から人が出る
おおらかな羽ばたきシベリアへ帰る

鳥取市 河村 日満

先へ逝く心算で妻に好き勝手
好きなこと言うてきた身の敵の数

富田林市 岩田 美代

想い出すために北風に向う
やき芋としゃべり過ぎてるむかしの話

和歌山市 若宮 武雄

中年の貌が哀しい落椿
関係がないのではない平行線

和歌山市 浦野 和子

春や遅々フランス級を読むように
青空へ弾む辛夷のトウシューズ

大坂市 小出 智子

豆腐屋の時計と毎朝くいちがう
妻のいう通りに雨が降ってくる

日本語がちつとはわかるうちの豚
小公園犬のお供に孫の供
サイレント映画のように梅林

兵庫県 遠山 可住

友情が一つ小犬のしっぽから
お見舞の客が笑いの芝居する

唇が花に変わった嬉し泣き
忍耐は芸の一つぞ握り飯

岡山県 浜野 奇童

言い勝って自我の崩れる音を聞く
自画像が涙をこぼしていた夜更け

春雷や走ればゆれる耳飾り
春に病んで花の華麗を妬むかな

兵庫県 野々口 ゆう也

胸襟を開けば遮断機下りていた
鬼の面つける弱さを鬼嗤う

なるようになって東が白んで来
屈託のない若竹の直線よ

富田林市 中村 優

生きざまに暗示をかけるVサイン
銘柄はどんなでもよい茶碗酒

今治市 越智 一水

玉虫色そんな減税あるものか
反核の旗それならば僕も振る

やさしさが欲しい二月の飢えた街
手話の娘の指春風が吹きぬける

高知県 山下 登舟
一人でものがさぬ過疎の選挙カー
畑のものをすべて茎たち蓄もち

奈良県 森田 カズエ

痩せている国民服が自分です
豆腐を賽の目に切る妻の辛

傘小さく握って不倫の歩は急ぐ
生きてたら転宅しふる位牌抱く

倉吉市 奥谷 弘朗

血税をカラ出張という浪費
焦点がぼけて輝くものがない

熟年に錆びないように辞書を買っ
濁る世に唯我独尊目白押し

岡山県 稲岡 正之

熟年でまだ梶のない舟を漕ぎ
へアカラー濡れ羽色など昔事

負け犬は負けて勝つなど思わない
動かない標的狙う銃揺らぐ

土踏ます四月の砂をしつかりと
今治市 月原 宵明

水面に愛が浮いたり沈んだり
大坂市 神夏磯 道子

武者人形よいつまで母のにぎり飯
八尾市 高橋 夕花

生も死も鑑兜の夢のあと
和歌山市 西山 幸

次の夢練習曲も弾けぬのに
米子市 八木 千代

紅に燃えた余燼で生きてゐる
八尾市 松下 蕉露

いくじなしピエロのままがいいという
大阪市 津山 刀水

良い子良い子ママの呪術で育てられ
大阪市 川口 弘生

旧姓を残しておきたい日記帖
兵庫県 森脇 和子

吊橋も不安につれてゆれ動き
米子市 桑原 伊都

楽しみは人が来る日の夕支度
富田林市 藤田 泰子

花吹雪石仏春の顔で座す
出雲市 吉岡 きみえ

夫婦茶碗もすこし欠けている余生
岡山県 嘉数 兆代賀

掌に育てた重さだけ残る
浜田市 佐々木 裕

灯よ夜霧はかくも人を恋う
島根県 小砂 白汀

高僧にうつる浮世は丸い虹
島根県 岩田 三和

長話女の業の吹きだまり
岡山県 松本 元江

独りいて銀のスプーン選る自由
和歌山市 福本 英子

樹海からの風に止まないかざ車
和歌山市 松原 寿子

どっさりと手土産持つて天下り
和泉市 岡井 やすお

吹田市 西川 景子

一日の違いで定年二年延び
島根県 堀江 正朗

春の土手僕の緑はどこへいった
島根県 堀江 芳子

待たされて注がれたお茶の湯気見つめ
唐津市 山下 勝一

風邪までが俺の盲点突いてくる
唐津市 牛尾 緑楼

去って行く女歩幅が定まらず
堺市 大道 美乙女

埋れ火が燃えるドラマににくすぐられ
西宮市 奥田 光子

俺の子と思えど半ば妻の血か
京都市 松川 杜的

里程標消えかかっている女坂
兵庫県 速水 房子

母と子の思いは同じ道を行く
尼崎市 奥山 美智子

デジタルの響きは鼓動かも知れぬ
島根県 榑原 秀子

幾度の間に冷たい寒の月
大阪市 清水 康恵

終着駅見えると恐い廻り道
平田市 久家 代仕男

器用さは誰にも負けぬおちこぼれ
米子市 小西 雄々

熟年に色香忘れたわけてなし
東大阪市 竹中 綾珠

ひとり居の出るも這入るも鍵がいり
伊丹市 榎谷 寿馬

確かな私がいる朝の洗面器

笠岡市 高木 桃里

作業衣の繕い無事故祈りつつ
橋本市 森脇 善太

情熱の花へ素足になる男
守口市 野呂 右近

これ子等よあえぐな五十坂等で
岡山市 原田 凡太郎

赤旗をオモチヤのように振っている
青森県 五十嵐 操史

煮て焼いて炒め勝手な捨て台詞
今治市 八塚 三五島

流行をつけて学歴差を縮め
兵庫県 奥野 テル

淡雪へ南天の実の自尊心
鳥取県 林 露杖

伝説を秘めて湖月を抱き
島根県 山根 峰雪

往年の闘士養老院の人でおり
唐津市 久保 正敏

待てるのも待つておれないのも女
唐津市 筒井 朴竜

レーガンの鞭へ尾を振る調教馬
高知県 曾我部 つぎお

日向ぼこあれが余生と思つまい
富田林市 田形 美緒

五千円親しき仲もすかしに見
京都市 山下 桐下

妻と乗るお伽電車のぬくい席
大阪市 中西 兼治郎

花見掃り花のことより人出言
松原市 佐藤 藤子

女二人助け合うには平和すぎ

鳥取市

吠えるだけ吠えて瘦せ犬うすくまり

枚方市

原点にもどれば空は真青で

山口県

土足にて入りこむごと週刊誌

堺市

水温むそんな言葉に春を恋う

喜屋川市

真心が通じなかつた日記書く

堺市

ふり返る心の迷いありありと

鳥取市

春や春恋の矢みんな外れたり

唐津市

真夜中にひそと囁く雨雫

奈良県

摩崖仏風雨に荒れた眼鼻立ち

大阪市

ライバルに手をひかれてた丸木橋

守口市

わが身から出た石なればいとおしき

大阪市

しみじみと月を仰げば子守唄

東大阪市

スポーツも新進気鋭で氣勢あげ

岡山市

どの仮面つけても父はお人好し

岡山県

開発を諷い文句に立候補

堺市

進んでる様で曆に任す式

鳥根県

すぐ落ちる涙嬉しい日悲しい日

大阪市

首ったけ神がかりめくあの瞳

豊中市

啓蟄へセーター淡い色にする

旭川市

農を継ぐ子なくサイロの影ばかり

岡山県

野仏に声掛けてみる独り旅

橋本市

これまでと思ふ命へ橋車

米子市

正直な瞳に内心をみすかされ

岸和田市

三面鏡の後姿に鬼がすむ

米子市

鬼の面借りて小心カパーする

米子市

B面の疵に女の歴史生き

松原市

鶯もほんものが鳴く田舎歌

大阪市

一年は早いコーヒーでも飲もつ

熊野市

食べ物の恨み野良犬知っていた

今治市

バリウムに七転八倒の姿させ

河内長野市

赤い灯に魂抜かれ夢遊病

米子市

野仏に願いをこめた赤頭巾

松山市

どこにでもあるわけでなしよい空気

米子市

メニユーにも春の彩雛まつり

青森県

肝臓は薬も酒も所望する

東江市

出張へ公私混同せぬけしめ

高知市

小商い五時から針が動きたし

大阪市

異端者の独り哀しい笛を吹く

大阪市

風薫る陽気に浮かれ遠出する

鳴門市

親の癖子に芽生えてる他に分り

吹田市

焼肉で部下に切りこむ管理職

唐津市

雨期戦闘俺等は勝てるゲリラ隊

唐津市

人の世は騒がしうなり北帰行

大阪市

つっぱっていて所詮負け犬よ

鳥取県

田崎 あき子

井上 喜酔

田中 亜弥

谷 真風

寺沢 みどり

岩淵 一星

小山 悠泉

北川 竹萌

藤森 小雅子

欄 蘭

八木 芳水

西岡 豊

新岡 回天子

木塚 素石

江城 修史

清水 一保

降参をしておしまいと又値上げ

唐津市 仁部 四郎

常連の遅れを始発が待つてやり

米子市 石垣 花子

樺太が欠けたまんまの日本地図

和泉市 西岡 洛 醉

孫の背に幼き日の我垣間見る

大阪市 大野 武太

童顔の現役兵にある愁い

宝塚市 吉田 笑女

筆まめの嫁から届くエメール

岸和田市 古野 ひで

花でさえ日陰は小さいままで散り

松江市 豊田 巡歩

核廃絶ベン容赦なく書きたてる

寝屋川市 宮尾 あいき

娘の新居を祝う

鶴が舞い亀が見あげる新居かな

富山県 舟渡 杏花

落款が落ちて手荒くあしらわれ

今治市 新居田 胡頰子

その先を読んで識者は慌てない

西宮市 杉浦 婦美子

夜桜や亡母もわたしも臆なり

西宮市 林 はつ絵

一人病んで家族の距離を無くさせる

西宮市 妹尾 春江

はじめての着物日本語で話したかろ

西宮市 朝山 千世子

半生をロマンが醸す芸の艶

米子市 菅井 とも子

ゴールもう見えてのんびり老いの坂

唐津市 岩崎 実

映画迄勧善懲悪がうすれ

今治市 萬本 昌道

建前は上司本音は友へ吐く

倉敷市 藤井 春日

子の看病老母は既に八十過ぎ

鳥取市 武田 帆雀

支社長の上の人来て見物人

仙台市 川村 映輝

飲むだけで満足花は二分咲き

鳥根県 福岡 芳枝

電話でははずむ話も逢えば出す

羽曳野市 麻野 幽玄

身内から秘密洩らした通夜の席

貝塚市 行天 千代

五人目の孫にランドセル買ったのしさよ

岸和田市 清野 こう

ひな祭りすめは端午のコマーシャル

京都市 都倉 求芽

行けぬのをわかっている女と旅話

岸和田市 原 さよ子

商人の裏や表と持つ貯金

愛知県 国分 甲子郎

フリーパス日の短かさを嘆く足

東大阪市 金本 不二夫

なぜかしら私を買えは株下がる

八戸市 島田 昭治

そっぴいば朝めし忘れも忙しさ

京都市 山本 規不風

直線の信心デコボコけつまずき

鳥取県 羽津川 公乃

長持の歌で目度度く荷を納め

八尾市 山下 みつる

つながれた犬ジョギングを眺めてる

西宮市 西口 いわゑ

思い出のページ優雅にめくる風

室戸市 浜口 秀子

やすらかな寝息聞いている人形の眼

西宮市 伊藤 春子

母とテートゆかしい花の寺めぐり

西宮市 藤村 宏子

筒袖を着た娘がうまい里の唄

尼崎市 黒川 紫香

投句先 千560 ★ 豊中市中桜塚三丁目13-15

橘高薫風 (ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題 「赤電話」 選者 橘高薫風

締切 5月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

大阪放送局 老後をたのしく係

発表 5月23日(日) ラジオ第一放送

午前10時から

川柳塔 改題 一二百号記念川柳大会

昭和57年4月4日(日)

阪急グランドビル26階

谷垣史好

二百冊の「川柳塔」を積み上げれば果して幾許の高さになるであろうか、阪急グランドビル26階の会場から眼下に広がるパノラマ的景観を見ながら、ふとそんなことを考えた。

夜来の雨はすっかりあがり、春霞の中を淀川は蛇の如く、その向うに北摂、六甲の山々、おもちゃのような阪急電車がゆっくりと梅田駅に入って行く。眠くなるようなこの風景は超高層というものを肌で実感させてくれる。二百冊の本の高さと、ビルの高さとも、もちろん比較すべくもないが、一つの仕事に注ぐ情熱と知恵と努力においては、何ら甲乙あろうはずはない。

会場に私が着いたのは午前十時ちょっと過ぎ、句箋の番号は69だった。シックスナインか…、人間妙などここで妙なことを連想するものだ、などと感心している間にも、エレベー

ターが着く毎に受付の混雑がひどくなる。前日大華バスで来阪された山陰の皆さんはじめ遠く四国、九州から懐しいあの顔、この顔。昨年十一月以来、病氣静養中だった川村好郎副理事長が前にも増して元気なお顔を見せられたのも嬉しい限りであった。

午前十一時半には二百五十名、十二時前には二百八十名を突破、もちろん場内は満席、桜は散り初めたが川柳ザクラはまさに満開とあったところだ。

十二時二十分、西田柳宏子氏が司会のマイクを握り、張りのある美声が流れる。さあ、いよいよ大会の開幕。

菊田いさむ氏がやや緊張の面もちで開会の辞を述べた後、中島生々庵主幹が挨拶に立たれた。(要旨は4P参照)

病気になって感じやすく、涙もろくなった

といわれる主幹は、予期以上の大盛會を眼のあたりご覧になり、時に言葉がつまりがちになったが、そのお顔は晴ればれと見受けられた。

ついで創刊以来、表紙に麗筆を揮われた直原玉青氏、エッセーを連載された東野大八氏に西尾菜副主幹から感謝状並びに記念品を贈呈。

来賓の祝辞は時間の都合もあり、日本川柳協会大阪事務局長永田帆船氏から代表祝辞を頂戴する。

「川柳塔の今日の発展は新しい感覚をもつて進んでこられたことが大きな原因と思われる。川柳の目覚ましい隆盛は、庶民の文学であることもあるが、それよりも皆さんが情熱を燃やし続けておられるからで、今後とも日川協への変らぬご支援をお願いすると共に川

柳塔の限りなき前進と消ゆることなき栄光をお祈りしたい」

ひげの俳人、伊丹三樹彦氏(俳誌「青玄」)



あいさつする中島生々庵主幹

主宰)の講演が楽しかった。われわれの川柳に対する取組み方について示唆に富んだお話でもあった。遮眼帯を付けた競走馬の如く川柳以外に見向きもしない、そんな姿勢がありはしないか。氏はまた写真家としても高名で今年はじめ印度、ネパール百三十日間の旅で撮った写真が七千枚(半分はカラー)、そのごく一部をスライドで紹介されたが、誌上に載せられないのは残念である。

〈講演要旨〉

『青玄』という誌名はどういう意味かと、よく聞かれるが、これは青空、もしくは大空という意味である。今日のような青空が青玄なのであり、してみると佳きお日柄に青玄の私を呼んでいただいたのは、青空を呼びこんでいただいたということにもなるかもしれない。現代の「高殿」ともいうべき阪急ランドビルの26階へ昇ってみて「高殿にのぼりてみれば花霞」と書く俳句であり、「高殿にのぼりてみれば城小さし」とうたえば、これは川柳作品になろうか。私は常に川柳に引っぱられるよきな思いで俳句を書いている。

俳句や川柳は伝統の詩であると言われている。しかし伝統ということで比較して言えば一番古いのは短歌であり、次に俳句、川柳という順になるが、私は川柳は俳句より新しい

詩である、俳句は短歌より新しい詩である、そう考えている。だとすれば日本の定型詩の中で一番新しい形式と内容を持つているのは川柳ではなからうか。新しいものに常に惹かれる私は、だから川柳にはいつも心惹かれるわけである。

俳句を書き始めて約半世紀、今から約十年前にヒゲを立てはじめ、また写真を始めた。人生五十年を過ぎて、あとはおツリの人生、思う存分、どこまで自分は自由でありうるかひとつ戦ってみようと思っただからである。写真と俳句と両方やるから「写俳亭」という別名をつくった。

ここで皆さんに「写柳」をおすすめしたい。川柳の方が写真の持っているドキュメンタルな要素、或いは批評的な要素に鋭く迫ることが出来ると思うから。

「写俳」の次に「音俳」というのを始めた。これは音楽と俳句のドッキング、つまり俳句に作曲して歌をつたうというものである。

どうせせににならない川柳や俳句だから、機嫌よく歌ったり、写真をとったりして川柳あそび、俳句あそびをしたいものである。

最後に「音俳」の見本?というか、自作の「またも肩をすくめて失語の落葉のバリ」という句に作曲して歌われたが、これがイヴ・



生々庵主幹と小石奥さま

モンタン顔まけ？の渋いシャンソンであった。休憩なしで兼席題の披露にうつる。(協取 岸本吟一氏が都合により欠席されたため、水粉千翁氏、磯野いさむ氏にそれぞれ代選をお願いした。披露終了午後四時十分前。閉会の辞 黒川紫香氏。

二百八十名を越し熱気あふれた大会を顧みて、川柳塔は新しい時代へ入ったという感を深くした。

帰途、仲間四人と一盞を傾け、ターミナルまで来ると新聞売店にスポーツ紙の早版が積まれていた。『そらや今日はセンバツの準備

勝戦やった』はじめて気がついた。好きな野球もすっかり忘れ川柳のことはかり考えていた一日が、かくて暮れていった。

席題「花」

橋高薫風選

花散ってドラマの序曲はじまりぬ
身のうちにひとつ開いた曼珠沙華
大根の花も見事に咲いている
朧夜は花も女も匂うべし
花が好きですすこし積極に欠ける
カレンジャーの花が匂うてくる茶の間
散る花を敷くと野犬も眠くなる
牛乳瓶にさした金箋花を拝む
大川に遊ぶ家鴨に花吹雪
名の知らぬ花遭難のあった山
散る花を何とみている忠魂碑
留守の花を浴びて戦中派の無口
宙返りに来たおんが赤い薔薇を活け
花の宴むかしと違うこと思ふ
満開のむこうは白い別離かな
さらし首花一輪と山に棲む
母はあかるくて気丈な花咲かす
花の香に少女の狂れがすこし止む
白百合の白さへ九条武子おく
エープリルフルール桜も満開す
凡人に桜が早く咲き過る
花流るるの小川が生き返る
ひすい婚花の重さをてのひらに

和子 哲郎 花梢 紫香 秀果 やすお 勝美 和友 鬼遊 巷雨 英比古 松原寿子 岳人 鎮彦 好啓 日満 道夫 与呂志 文平

逢えぬ日は花冷えばかり膝ばかり
花びらを蝙蝠傘に持ち帰る
美しき花だと思ふ西の塔
似顔絵にひとつの花を書き添える
秋海裳わたしの涙溜めたのか
元宮殿悲劇の王は花愛す
仏さんの花をときどき忘れよう
飾るものは花より他にない墓石
①花屋の花に思い出などはない
②黄菊白菊ボスを仏の顔にする
③鬼あざみ墓の狭さを苦にもせず
④花の散るとき弦ひとつ落してやる
⑤満開へ呪詛のささやき聞こえてき
⑥さくら咲き火山は今日も火を吐きぬ
⑦地水仙にボツンと庭の亡父の咳
⑧天ロボットもやがては花へ手を叩く
⑨花の雲川柳塔はとこしなえ

兼題「旗」

山内静水選

さざえ売る旗も渚を遠景に
風のなか桜のなかのめし屋の旗
青春のドラマの中の連隊旗
そしてなお夫婦の旗は貧に耐え
味噌汁の匂い旗日の旗を出す
春闘へ少し弱気な赤い旗
降参はいやだ赤旗僕はふる
若い気をまだ失わぬ老いの旗
母ちゃんが道路普請の旗を振る
何故あかんのや日の丸で君が代で

みゑ子 豊次 憲祐 井上信子 英千子 いさむ 藻介 絹子 水客 夕花 大八 哲郎 亜鈍 醉々 雄々 如々 薫風 作一郎 作二郎 正司 巨城 冬二 瑛二 一水 行天代 日満

いささかの自負日の丸を買う若夫婦
 八方美人で黄色の旗を持つている
 日の丸が残留孤児の目にしみる
 旗を持たされた信頼されている
 踏切で旗を振ってるお父さん
 油断すると旗振りになまされる
 終章を飾る男の白い旗
 熟年の旗も染めかえのきかぬ彩
 祝日の国旗にかけて啞になる
 風化する平和旗日に旗がない
 城持たぬ男に重い旗印
 旗じるしすこしばかしてパンを買う
 どん尻の私に振ってくる旗
 春闘の旗へ一揆の血がさわぎ
 万国旗の下で果し状を読む
 ころよき訣れ告げよう旗たたむ
 生き恥と一枚の旗野に埋める
 身中の虫が食べてる薙旗
 沿道の小旗へ完走してみせる
 旗拳げの旗へつぶて飛んでくる
 背後から吹く風がある旗手となる
 核の旗カッパが持つて遊んでる
 (注)ちよこまかとするから旗をもたされる
 (注)星条旗に媚びるほかなき街に住む
 (注)アカンベをして白旗を振ってやる
 (注)安全旗スト関わりなく靡びき
 (注)頂上に掲げると旗は罪をもつ
 (注)人おきまらうチの旗よいくさにつながるな
 (注)号令はなくとも集う旗がある

光穂 春生 三窓 こう 健司 刀水 鬼遊 刀水 明朗 代仕男 茂雄 幸生 紫香 みど里 沢子 井上信子 喜代志 博泉 涼介 爽一 千梢 洋敏 正司 堯巨 白溪子 滋雀 冬二 柳伸



直原玉青氏（左）と東野大八氏（右）

(天)月に旗たてても小麦実らない
 (軸)音なら旗日私の誕生日
 兼題「節」 浜野奇童選
 静水 度
 節穴で覗く世間が恐くなる
 卒業を節に崩れた理想主義
 胃を病んでひとつの節目とも思ふ
 天井の節したたかな貌をもつ
 新築祝い柱の節を見て回り
 喜代志 一三三
 稲佐岳 一江 千津子 喜代志 一三三

手の節を気にせずしかと握手する
 節つけてあなたを呼べば春の風
 風呂場から自己陶醉のねぶか節
 さすが音痴美事編曲された節
 寝返った女に思いあたる節
 花の山音痴は音痴なりの節
 土からの勲章父の指の節
 正統の外は許さぬ父の節
 節くれた母からもらった綺麗な手
 節くれた指からもれる母の詩
 節高い指と音を語るまい
 わだかまり捨てると節が低くなる
 節くれた指まっすぐに生きた指
 定年の節目に光る空を見る
 畦道を往くもげ節を蝶が追う
 火吹竹ひと吹きことに亡母がいる
 節もなく生きてのつべらぼうの影
 節目とや厄に男の意地がある
 この別離男の節目かもしれず
 安来節だけしか知らぬ父でした
 人の血が流れ歴史の節になる
 一節ごとに竹は慎しみ深くなる
 名文句節があつてもあらいで
 売声の節に金魚を泳がせる
 節々が痛む夜明けの留置場
 節穴を覗くと幸せばかり見え
 忠と孝の話を節穴から覗く
 (注)節穴をのぞけば花火消えていた
 (注)振り向けば節一つずつ恩を抱く

早苗 嬉久子 朔風 凡九郎 双入 松月 幸生 はず絵 瑛二 春江 菊野 涼一 孤舟 鬼遊 牛歩 美代 枯梢 醉々 大八 いち子 律子 成子 白虎 晴代 巷雨 茂雄 藻介 千梢 八木千代

(佳)節々に涙が溜まる火吹竹
 (佳)節くれた掌に安らかなコップ酒 滋 雀
 (佳)節ひとつ越えてメガネを拭いている 吉之助
 (人)ふるさとへ向く一節の父の曲 一
 (地)節くれた指で生き抜く道をさし 千 翁
 (天)塔二百節から新芽明日へ伸び 兆代賀
 (輪)指輪など振り向きもせぬ母の節 奇 童

兼題「椅子」 河村日満選

合掌の暮らして生きる車椅子 公 一
 椅子を蹴る若さを羨しく眺め 正 司
 ロッキンチェアやがたあれも居なくなる 井上信子
 窓際でカレーライスを食べる椅子 熊 生
 再起する決意へ車椅子回る 双 人
 旗色をすくりに読みとる椅子である 夕 花
 ゆり椅子でひととき思考ゼロになり 兆代賀
 妥協したわたしに掛ける椅子がない 一 水
 椅子浅く掛けて心が決まらない 源次郎
 椅子寄せて来て水割へ仲間入り 規不風
 豪華な椅子に座らされて気がかわる ショパン聴くさくばらん椅子で聴く ひよこ
 縁のない椅子を肴にはすむ酒 吐 来
 椅子あさく掛けて始末書書かされる 松 月
 回り椅子狙う狐と狸たち 双 舟
 車椅子戻らぬ足へ虹を追う 吸 江
 特訓の椅子これから風あたり 維久子
 歯科の椅子保険の効かぬ型をとり 没食子
 揺り椅子は古い温みを持つている 良
 栄転の椅子に別居を強いられる 柳宏子



講演する伊丹三樹彦

叱られる椅子で貧乏ゆすりする 雄々
 主のない椅子も日向を恋しがり みど里
 ロボットに椅子取られそう休まれず 右 近
 プロレスの小道具になる椅子もある 堯 巨
 札束で奪った椅子がさしみだし 菊 野
 椅子蹴って立とか寝たふりしてよか 寿美子
 椅子蹴って己ひとり道化めく 康 祐
 座ったら耳に栓する回り椅子 恭 大
 コネのある椅子が四月へ空けてあり 千 翁
 副という椅子で希望をまだ捨てぬ 良
 重役の椅子は身内で揃えとき 白浜子
 椅子ひとつ殺し文句はいくらでも 喜代志
 (佳)物忘れのだんだんひどくなった椅子 千 尋
 (佳)公約は忘れ居眠りしてる椅子 きく子
 (佳)椅子の差で男五十が叱られる 一三三
 (佳)すわりよい椅子で帳簿に穴をあけ 夢 酔
 (佳)核家族めし食う椅子の音がする 爽 介
 (人)頂点の椅子にぬくもり等は無い 右 近
 (地)学歴の差をつけさせぬ父の椅子 小出智子
 (天)回り椅子振り向くことが多くなる 文 平

(輪)みなが盛りたてて温うにおれる椅子 日 満

兼題「腹」 水粉千翁選

三カ月ついつい腹をなせてみる 勉
 消化不良の腹で少年すねている 幸 栄
 腹の虫おさえて見ても嫁の位置 定 子
 腹が出た猿はにんげん臭くなる 無 成
 腹は借りものであった御曹子 栗
 腹芸をみごとに果す落ち椿 成 子
 確かなる愛が囁く腹帯よ 奇 童
 腹芸を好む男で隙がある 堯 巨
 友だちもどうやら腹が減っている 藻 介
 阿呆にも莫迦にもなれる太っ腹 武 雄
 腹抱え笑った昔がありました 幸 生
 腹のある男を浪花節という 水 客
 空腹のまま都会の駅へ降り 源次郎
 腹に持つ分だけ傾くやじろへえ 文 平
 永遠の別れ腹からこみあげる 亜 弥
 腹立てていたのか煙草折れている 一 甲
 満腹の少年軽く礼をいう 弘 平
 くねくねとわたしにもある蛇の腹 麗 水
 家中の愛を臨月受けとめる 重 人
 電卓に腹の企み見抜かれる 稲佐岳
 政治屋が汚い腹を見せたがる 双 人
 腹割って話せば別れたいおんな たつお
 空腹の鬼はともかく里に出る 英美代
 臨月へ夫は爪を切ってくれ 幸 代
 腹するほかなし妻に座らされ 静 水
 腹の中知られて帽子深くする 悦 郎

祖父すこし小指の腹に紅をつけ
食うだけの身銭を腹にためている
夏柑の横腹を刺す赤い爪

成子
如水
馬



佳境に入る披講／尼緑之助氏（脇取は左から射月芳・鎮彦・重人）

我が道を信じ腹から声を出す

一三

腹据えた男に朝の虹が立つ

一

腹の汗拭いてこれしかない男

胡次郎

①腹立てて帰れば妻の走り書き

水客

②腹へったへったと武士の日曜日

良子

③平和とは腹八分目で人を恋う

雄々

④腹黒い男と渡る丸木橋

多賀子

⑤男にはこりこり魚の腹を割く

爽介

⑥人腹の立つ話へ汽車は走り出す

岳人

⑦地腹がたつ話に土産提げてくる

一步

⑧天辞書を引く少し腹を立てながら

藻介

⑨⑩ためらわず切つて自腹があたたかい

千翁

兼題「積む」 尼緑之助選

積み上げる塔の歴史を僕も塗る

正朗

積み上げた夢へ大きな虹かかる

公子

マイホーム建つ筈のない小銭積む

やすお

処女峰へ男冥利のケルン積む

武雄

罪幾重 重ねて務所のわかめ汁

和子

わたしだけ書けるドラマを積んだ日々

堯巨

愛という言葉を積んで片想い

松原寿子

核を積む船をどこかで見張つてる

郁栄

六十歳若さを何処へ積み残し

奥田光子

愚を積んで夫婦は支え合つている

小出智子

罪をつむ女ひとり生きる城

桂太楼

泥舟に欲積み込んで船出する

冬二

友ありて友のなさを貨車に積む

一弘

善行を積むと仏の顔に会う

双舟

札束を積むと崩れる正義感

恭太

積む石を鬼がかぞえて黄昏れる

大八

酒買いに子は積雪を踏み鳴らし

瑞江

山積みの中でおしやれを買つて来る

亜弥

くずれない積木へ愛はたしかなり

桂太郎

道化師の吐息が積んであるロープ

一甲

積み上げた方から売れる同じ柄

恭太

愛積んで花は本音で咲き競う

千春

積み込んで降りる間がない父の貨車

爽介

ますしさが納屋いっばいに積んである

千尋

軽石を積んで男の喜劇です

哲郎

下積みの底で誰にも負けぬ夢

八木千代

本を積む祖父の炎は細くとも

夕花

札束を積むと岩がもろくなる

たつお

金積むと心も九割まで買える

春生

石積んで積んで昨日の傷を消す

茂雄

①生さるとは恥を積むことも知れず

楓楽

②これ以上積むと走れぬ父の貨車

松月

③用心の末に破局の石を積む

公一

④今日を積み今日を積んでの今日がある

蕉露

⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚

川狂子

⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚

正博

⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚

博泉

㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚

文平

㉗㉘㉙㉚

八木千代

兼題「祝う」

小松原 爽介 選

お祝の雪をいたわる兄夫婦
 還歴を祝つてくれる夕露
 祝われている割勘があたたかい
 紙吹雪祝うほかなし風が吹く
 祝唄かなしいことがないように
 開店の花輪を濡らす菜種梅雨
 祝いの盃を濡らして動く時間
 祝ひ酒甘えてならぬ明日がある
 祝ひ唄に男女の性は素直なり
 不斷着の人の祝辞があたたかい
 祝婚歌女の耳はやわらかし
 祝杯の真つ只中にある不安
 祝われた盃一つ棚にある
 一合の酒で祝える父の日よ
 旗出さずごろりと祝日祝つてる
 哲学をひとつ祝辞に入れて置く
 定年を祝うと悪い酒になる
 お祝ひにゆくの嫌う庭簾
 祝電の中の一つに裁かれる
 祝婚歌父よ母よと流れだす
 祝福と妬みの鬼が同居する
 咲く花も散る花もあり祝ひごと
 一つの夢が消えた祝ひを持って行く
 牛から逃げた女をいさぎよく祝う
 金婚式はせめてチューリップを挿そう
 駄目な男に駄目なおんなが祝われる
 祝ひ酒あの日の汐が満ちてくる

千津子
 千梢
 千翁
 道夫
 堯巨
 一弘
 無成
 維久子
 良子
 喜一郎
 作二郎
 双舟
 文平
 一甲

葉玉から逃れて一番祝う鳩
 祝典の見事な嘘に乗ってやる
 いつか討たれる祝盃を胃に落とす
 これしきの祝ひ酒では返されぬ
 人もよかつた紅白のおまんじゅう
 鉄砲もたまには当たるおめでどう
 銀婚の祝ひに夫婦らしくする
 喜寿祝うかこめかごめと逢いにくる
 再婚を祝う言葉を選んでいる
 祝盃に恩を洗めていせんか
 祝賀会大の虫小の虫踊り出す
 地蓮華草祝う心があればよい
 天のひらをいつかは逃げる祝ひ箸
 祝宴の窓から雲を見ていた

兼題「伸びる」

去来川 巨城 選

爪伸びたことも気になり桜咲く
 ハイウエイ出来て鼻毛がまた伸びる
 裁判がのびても無罪ではないぞ
 少年の広野に青い木が伸びる
 伸ばされた返事は鐙で受けとめる
 菜の花の伸びて水子の風車
 髭のびてすとんと落ちる哲学書
 軍鶏の首伸びて明日の敵を討つ
 伸び切ったゴムの悲鳴が聞えるか
 まつ白な画布少年は伸びかえり
 階段でフツと気付いた頸のヒゲ
 好きな帯結ぶとキウウと背が伸び
 如意棒が伸びて無謀を叩かれる

求芽
 稲佐岳
 金沢伸子
 双入
 三窓
 藻介
 郁栄
 嬉久子
 光穂
 八木千代
 清流
 小出智子
 爽介
 英己代
 爽介

草の芽が伸びると戦士始まりぬ
 いんげんの芽も伸び吉日近くなる
 告白をしてみようと花の芽が伸びる
 八月の祈りに神の手が伸びる
 肩抱いてくれるわが子へ背伸びする
 どたん場のおとこへ伸びる縄梯子
 働かねばならぬ爪を切っておく
 切なさをためてきれいに爪のびる
 好きな男に放つゴム輪が屈かない
 手を伸ばす所にペンと灰皿と
 伸びきつてゴム輪かなしい貌になる
 忌中とは知らない髭が伸びてくる
 恋をしませんかと伸びる柳の芽
 影伸びて貧しさばかり掌に残る
 巻尺が伸びると決ががすぐに出る
 背が伸びる少女は鶴を折り始め
 夜桜を待ち野地蔵の影伸びる
 梯子車の梯子は新しい神話
 風の葦生者に伸びる神の鞭
 多数決伸びる若芽を踏む如し
 伸びこばえに昔のことは聞つなかれ
 北山の杉も何時かは磨かれる
 豆の夢すでにわたしは置き去りに
 背をしゃんと伸ばせば明日が見えそう
 二人伸にも生水のこと書いてある
 妻の握る手綱は伸びようとしぬ
 大豆の木を伸ばす小さなトリーシューズ
 花芽花葉まだまだ自由信じつつ

岳人
 英比古
 郁栄
 千翁
 一
 麗水
 奥山美智子
 金沢伸子
 沢子
 武太
 千尋
 恭太
 一甲
 哲郎
 岳人
 好啓
 藻介
 一
 与呂志
 三窓
 鬼遊
 田鶴子
 楓
 千津子
 巨城

兼題「樹」

磯野 いさむ 選

少年が巢箱それぞれ樹にのぼる 冬子
 安楽死を願う樹海が美しい 金沢伸子
 樹々炎えて小便僧に春が来る 英詩
 湯の街に明治を残す宮の松 やすお
 大樹また伐られ文化の風が吹く 佐野みつ子
 寄れば大樹入社試験の長い列 吸江
 山頭火時雨に大樹を笠にする 多賀子
 樹氷との出会いで山にとり憑かれ 文秋
 生きてゆくかなしみ樹液したたらせ 史好
 城跡の民話大樹と共に生き 女
 樹海から消えた女の置手紙 一江
 樹のかけを出てゆくぬくい紙芝居 冬二
 樹には木を接いだと無罪主張する 喜一郎
 火の柱梢の悲しみいつまでも 酔々
 うすものを脱ぎ捨て昭和の樹下美人 正司
 民族は滅び一つの樹が残る 三窓
 立寄らば大樹週休二日制 としを
 忍耐が大樹の影においてある 紅鳥
 殉教も一発も知って大樹かな 静歩
 終章は大樹の下で眠りたき 婦美子
 チェンソーが老樹のプライドまでも斬り 幸生
 戦死した子の史記念樹の高さ 良
 マヒの子へ風垣となる母の樹よ 幸栄
 開放感大樹の下の漫画本 英詩
 学僧の学成り難し沙羅双樹 酔々
 父の樹を倒せばもろに矢を受ける 沢子
 校庭に約束があり樹が育つ 無成

廃校の庭で記念樹花盛り
 街路樹に市電が消えてからの四季
 樹と墓が異国の町の印象で
 不況風寄った大樹も枝を切る
 伝統校キャンパス狭し記念の樹
 植樹した人は失脚したけれど
 植樹祭この樹の果ては何を視る
 退職日金の成る樹を切り取られ
 記念樹へ俺の退職告げに付つ
 戦争に強い銀杏の樹であつた
 酸欠の街で樹木のひとりごと
 ジャングルの樹林に死霊生きつづけ
 巖然と大樹還らぬ兵を待つ
 人わたしを見てるその樹をいつか倒さねば
 地オブジェになつても樹々にある主張
 天記念樹を切る判決に従わず
 輪借景に大樹借家の庭の四季

兼題「塔」

西尾

栞選

塔の基礎しかと固める二〇〇号 武雄
 振り向けば塔はさみしい影をもつ 小出智子
 逆立ちをすると聞える塔の詩 文平
 おとことおんな通天閣の灯の彩に 春生
 塔見上ぐ雨は上がろうともしない 極堂
 甘酒のよしずのあい光る塔 秀果
 塔いまに倒れてきそうに雲動く 白漢子
 底辺に生きたテレサの金子塔 公一
 裏口の風に象牙の塔ゆれる 与根一
 シルクロードに原作はない砂の塔 無成

塔高し咲く花散る花人の波
 彼岸会に塔囲われている補修
 恋人とのぼった塔は今もある
 十年の夢みて塔は風に耐え
 管制塔着地のミスが救えない
 水煙に誇りを譲り塔無心
 苔の塔埋蔵金を知らないか
 エッフェル塔の下は接吻見る処
 豆腐屋のラッパが塔の下に来る
 春の鹿塔の影から歩み出す
 祈る時塔はやさしいたすまい
 家族連れ胸算してる飛行塔
 五重塔仰ぐ団体出雲弁
 池に浮く塔を見て来た子の日記
 巢に帰るカラスと塔のシルエツト
 妻と見る塔がいちばん美しい
 塔霞み三年坂は雨をきく
 どこにでも塔の歴史を持つ日本
 塔ちかく歩幅が揃う老夫婦
 膝折って仰ぐ塔より低き天
 まっさきに塔をぬらして京の雨
 雪しんしんシャッターチャンスとなつた塔
 雪しんしんシャッターチャンスとなつた塔
 釘のない塔を盗みに来た大工
 合格の子と東京タワーに登つてる
 傾いてから稼いでるピサの塔
 塔狂いなく千年の影を持つ
 塔恐しい仮設に塔は傾斜する
 人塔までの距離を知らない蟻の列
 地郭公が啼くと表情みせる塔

正博
 爽介
 和友
 笑俳
 やすお
 律子
 秀夫
 夢醉
 春巳
 菊人
 双舟
 緑之助
 重人
 田鶴子
 田鶴
 寿美子
 いさむ
 正博
 爽介
 和友
 笑俳
 やすお
 律子
 秀夫
 夢醉
 春巳
 菊人
 双舟
 緑之助
 重人
 田鶴子
 田鶴
 寿美子
 いさむ
 幸生
 清祿
 三窓
 勝美
 水客
 寿馬
 敏
 以兆
 豊次
 作二郎
 田鶴子
 兼治郎
 独仙
 冬子
 好啓
 小出智子
 みる子
 孤呂二
 花梢
 千翁
 武太
 吸江
 紅鳥
 シマ子
 やすお
 冬二
 泰
 紀乃
 一弘

(天)勲章を貰うと仰れる父の塔
〔輪〕塔一つ大和の冬を広うする

胡次郎
栞

〈出席者〉

笛生・春巳・寿馬・滋雀・柳宏子・雄々・カスエ・千梢・田鶴子・千里・楓楽・智慧子・(北野)久子・刀木・(小出)智子・峰雪・正朗・明朗・晓明・健司・鎮彦・重人・幸生・あいき・英壬子・萬的・太茂津・公子・千寿子・登志代・喜醉・せつ子・和子・三男・正博・吉之助・武雄・英子・(松原)寿子・桂太楼・(宮地)幸子・一水・柳人・水客・巷雨・奇童・牛歩・柳伸・蘭・紫香・いさむ・双舟・松月・右近・与呂志・規不風・慶三・英詩・魁光・三十四・文秋・形水・杜的・シマ子・秀信・(有沢)道子・射月芳・好啓・史好・常子・茶の子・吸江・入仙・ひろし・不二天・緑之助・弘生・枯梢・静歩・凡九郎・(福一)一夫・(神夏磯)道子・満津子・潮花・千翁・茂雄・雀踊子・吐来・秀夫・源次郎・みつる。(奥山)美智子・日満・千尋・景子・和・たず子・絹子・敏・アキラ・(行天)千代・幸代・操子・婦美子・ひよこ・恭太・一江・こう・さよ子・勝美・律子・ひで・武太・鬼遊・沢子・(佐野)みつ子・梨江・寿・岳人・冬二・作二郎・やすお・孤舟・道夫・紀乃・和友・大八・白木・稲佐岳・メ女・朝風・一甲・晴代・三窓・光穂・万彩郎・文平・無成・正司・公一・百合子・川狂子・一步・春生・胡次郎・泰子・美緒・白光子・豊次・巨城・みゑ子・光子・幸栄・兆代賀(井上)信子・庸佑・麗水・はつ

絵・いわゑ・兼治郎・冬子・春江・笑女・極堂・喜一郎・成子・富喜子・一・あき子・花村・酔々・(岩田)美代・維久子・花梢・千万子・綾珠・夕花・悦郎・一弘・なみ・亜弥・とも子・美世・みどり・いつを・伊都・博泉・日枝子・度・花子・熊生・鶴久・千春・田鶴由多香・亜純・花世・小石・藻介・嬉久子・冬葉・夢介・一三三・叮紅・孤呂二与根一・瑞枝・爽醉・代仕男・弘朗・早苗・菊野・軒太楼・多賀子・きみえ・独仙・郁栄・蕉露・千代・亜成・涼一・良・英比古・生々庵・薰風・珠二・いち子・哲郎・山久・文晴・伸子・如水・清流・求芽・秀果・たつお・弘平・洋敏・芙巳代・春蘭・泰・静水・富子・白漢子・憲祐・喜代志・覚然坊・定子・笑俳・文衛・与呂志・寿美子・双人・白虎・堯豆・菊人・帆船・清祿・越山・きく子・弥生・一夫・勉・良子・いさむ・栞・喜美子・久美・没食子・客遊子・小雅子・欣一・千津子・頂留子・としを・天笑・月子・みさと・喜風・翠光・静江・記代・紅鳥・勝人

〈お祝拝受〉

(受付順・敬称略)

弓削川柳社・田中桂太楼・越智一水・宮口笛生・月原宵明・米澤眺明・長野文庫・越村枯梢・水粉千翁・川柳天守閣・森中恵美子・東野大八・番傘人間座・岸田万彩郎・ふあうすと川柳社・三井酔夢・平野百合子・西村早苗・白百合川柳社・中尾藻介・うみなり川柳会・きやらばく川柳会・都大路川柳社・赤木喜美子・川柳新宮吟社大矢十郎・磯野いさむ

白岩文衛句集「出会い」

出版祝賀川柳大会

時 5月3日 10時開場13時半開会
所 大原町総合センター大ホール(国道373号線大原町古町交差点脇)

兼題と祝う(各3句内 席題なし)

温かい 土居 耕花選
積む 池田あや子選
男 田中 好啓選
流れる 橘高 薫風選
出会い 大森風来子選
西尾 栞選

柳話 本田恵二朗
会費 二千元(昼食代・発表誌代含む)
出席者全員に「出会い」贈呈

欠席投句の方は投句料五百円(発表誌呈)

投句先 707-04岡山県英田郡大原町古町

井上ゆきお宛

奥谷弘朗・川柳京かがみ・時の川柳社・竹原川柳会・電波新聞社・番傘川柳本社

〈祝電拝受〉

(敬称略)

番傘川柳本社・日本川柳協会・川柳展望社・広江天痴人・若本多久志・本田恵二朗・大森風来子・金泉萬楽・堀江芳子・月原宵明・長野文庫・小野克枝・岡村久志良・本庄快哉・柴田午朗

句集「夫婦酒」を讀んで

井上喜醉

川柳は、作句することも大変であるが、それよりも作句をする人の世話をすることが、もっと大変である。塩満敏さんは、この二つ

を絶えず同時にやりながら、他の仕事へも活躍されるスーパーマンであり、非常に正義感が強い不屈の精神の持ち主である。この精神があればこそ、多忙の中で立派な句集「夫婦酒」の完成が得られたものである。

句集を読まれた作家、友人は口を揃えて敏さんの人柄を絶讃されているが、全く、その言葉の通りでもあり、人間が完成された心へは敬服の至りである。

私は、川柳大阪以外の敏さんについては知らなかった。ところが、川柳大阪の句会があった日のこと、羽曳野の川柳句会へ招待され、それから二度ほど出席させて頂いたが、句会の雰囲気から大変な苦勞をされ「川柳羽曳野」を育てられているのを知り、又、立派な三周年記念句集を発売もされており、改め

て敏さんの川柳に対する情熱に心をうたれました。

敏さんは、温好人柄と努力で、家族や、その周囲へは絶えず目を配られて、特に作句以前の問題に対しては、万全の心で作句されていることは句集を読めば証明されている。全編に溢れた幸福な雰囲気、円満な家庭での人間描写は真実に溢れており、他の句集では味えないものである。

結婚記念「夫婦酒」のスピーチでも話題となっていた作品「妻の指せて真珠で飾りた」のように優しさが敏さんの句の中には溢れて、ぼくの風景での夫婦で仲むつまじく酒を飲んでいる写真が印象的である。

敏さんは、幼ない頃から暖い家庭の中で育ち、家族・恩師・友人にもめぐまれて作句され、写生句の楽しさ、家庭の雰囲気、職業上の出来事を暖い眼で眺めて、現実をとらえ、ユーモア溢れる作句に取り組んでおられ楽し

い限りです。

最後に「夫婦酒」の句集の中から各風景の中で感情に満ち溢れた句を左へ掲げて、敏さんの句集刊行の祝意の辞としたい。

川柳に泣いて笑つて年をとる

命綱結んで夫婦の息が合つ

幸せな夫婦になれとにらみ鯛

父の日かそつかそつかと言つたきり

忙しい妻の散歩は芋もつみ

愛してると言えば妻は吹き出した

知床でサクラの終点見定める

花売りが早春一緒に売りにくる

楽しみの酒が待ってる夜勤明け

何色に塗ろうか今日はまだ白紙

明日ありと思えばこそその定期券

塩満 敏 川柳句集

「夫婦酒」

序

装幀・とびら二元会 大泉 米吉 中島生々庵

■ B 6判函入・二六四頁

■ 定価二、〇〇〇円（送料二五〇円）

発行所 川柳塔社

ト ス ポ

葉 尾 西

僕は関西線を利用する関係上、美章園道を往復する。先に書いた郵便物だが、この三百米の間にポストがない。美章園の駅にもない。大概の駅には赤いポストが無然と立っているものである。それが無い。そのかわり黄電話が一つと赤電話が二つある。

ハガキや手紙を投函するのに、僕は大変神経を使うのである。第一ポケットに入れると皺がよらないか、角が折れないかと気を遣う。それで家で書いた時は、ハガキや封書を一先ず下駄箱の上において、靴を履いてから、手で持って百米はなれたポスト迄持って行って投函してバス停へ急ぐ。ポケットへ入れると皺がよるからと思って靴へ入れると、もういけない、すっかり忘れて二、三日経ってからという憂き目に会う。

昨年八月に移転した大阪市阿倍野区三明町の川柳塔社の近所にはポストがない。それで金曜日の僕の当番の日に、塔社で書いた郵便物を帰りに入れることが出来ない。

三明町の塔社へはアベノ橋から歩いて十五分。地下鉄文の里駅から徒歩七分、阪和線の美章園から西へ約三百米の位置にあるから、

或る日念のため駅員にポストの所在を訊いてみると、東へ百米行つて北へ五十米程行った所にあると言ふ。僕は何の因果でそんな遠いところまで足を伸ばさねばならないのかと肚がたつた。それで、駅員を掴まえて、乗降客や、近所の人からポストのない苦情をきかないかと訊ねてみた。

「いや、昔から無いのだから何もききません」という素気ない返事であつた。

「そしたら、近所の人や乗降客に署名運動をしてポスト設置に努力してはどうか」

「それは私の権限外である」

「権限外でも善いことはやつてはどうか、漫然と改札しているのが能じやない」

「それなら駅長さんに言うてくれ」と変な問答をくり返した。そうこうしているうちに電車が来たから急いで乗つた。

はたせるかな、靴の中で封書が二通とハガキが一枚、眠つていた。

脱稿のポストから廻る縄のれん

川柳展望7周年大会

— 第3回火の木賞発表

とき 昭和57年9月19日(日)10時開場
ところ ぎたつ会館

松山市道後姫塚118—2
電話0899(41)3939

会費 一、〇〇〇円

宿題と選者

本	住田 三鈴
念	渡部可奈子
黒	海地 大破
足	渡辺 和尾
みかん	墨 作二郎
近い	早良 葉
煙突	佐藤 岳俊
天	寺尾 俊平
席題	時実 新子
特別企画	☆定金冬一 風談60分
	☆新子なんでも答えます

■ 宿泊希望の方は渡部可奈子(松山市柳井町2-14-2)又は天根夢草(大阪府豊能町ときわ台3-14-17)へハガキで申込んで下さい。

主催 川柳展望社

清水白柳 句碑建立

菊活けてひととき欲を忘れたり 白柳

趣意書

清水白柳氏が昭和四十五年逝去されて早くも十二年目を迎えました。

ご承知のように白柳氏は大正十三年川柳雑誌創刊号から誌友であり、昭和十五年不朽洞会員となり、常任理事を勤められ、昭和四十年川柳塔に改題続刊にあたっては編集長として多大の貢献をされました。

このたび白柳氏のご長男清水健司氏のご同意を得て、故人の遺徳を徳ぶ柳友相謀り句碑建立を決議いたしました。つきましては句碑建立基金の一助として皆様方のご賛同、ご協力を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

記

句碑建立基金

一金壹千円也 (お一人一口)

昭和57年2月吉日

句碑建立委員長

菊 沢 小松園

▼事務局及び会計

〒581八尾市中田二丁目302
高杉鬼遊方(申込書送付、ご送金の場合必ず「句碑建立」と明記して下さい)

◇除幕式

句碑建立場所 阿部野神社境内

大阪市阿倍野区北畠3丁目

句碑除幕式 昭和57年9月26日(日)

午前11時

◇記念句会

日時 昭和57年9月26日(日)午後1時

場所 阿部野神社 北畠殿

大阪市阿倍野区北畠3丁目7-20

祝 題

「菊」 中島生々庵
「職人」 八木千代選
「雑草」 定金冬二選
「先祖」 山内静水選
「板」 森中恵美子選
「仁王」 中尾藻介選
「西尾」 栗選

兼 題

席 題

二題(橘高薫風・岩本雀踊子)

会 費

一千円(記念品・句会報贈呈)

懇親宴

三千円(同会場にて)

清水白柳句碑建立
実行委員会メンバー

顧問

中島生々庵

川村好郎

伊藤茶仏

委員長

菊沢小松園

副委員長

岩本雀踊子

正本水客

阿部柳太

西田柳宏子

金井文秋

高橋操子

委員

児島与呂志

香川醉々

高杉鬼遊

河内天笑

板尾岳人

那須鎮彦

谷垣史好

清水健司

押さば押せ……

野村 太茂津

薦被りの酒樽を積み上げた大阪場所入口で傘をたんでキョロキョロしている、雀踊子、潮花、紫香さんに見つけてもらって、ダフ屋、着物姿のチヨンマゲさん達の出入りを見ながら待っていると、凡九郎、柳志さんが集まった。しんぐう吟社主幹大矢十郎さんの招待である。今日一日を昏れしそつである。ふと不二田一三夫さんを思い出したりして待っていると、十郎さんが「すみません」を連発しながら親孝行息子の喜一さんの車で到着、我々の方が恐縮すべきところなのに。雨で車が渋滞したらしい。『竹亭』でおみやげまで入った大きな紙バッグを提げて、印絆てんで袴の裾を絞ったような、例の『呼び出し』姿の人の案内で柵席に落ちついた。心づくしの幕の内弁当をほおばりながら序の口、序二段、三段目、幕下力士の真剣な土俵上を見ているうちに弁当がいつの間にか空になっていた。

三段目の取組みが済むと、「一番出世の披露」、一人ずつ出身地、名前を披露されて土

俵に勢揃い、まだ親離れしたばかりの幼い顔もいる。将来幕下、十両、幕内と累進するんだナーと思うと、自然に拍手して声をかけたくなってくる。落伍しないようにと、この子等の肉親の気持ちで可愛いさが湧いてくる。

我が人生の少年期と重なってきて、「遣り直しきかんだナー」と、そんなことを思い耽つたりしながらも、首は潜望鏡のように、キョロキョロ回っていると、場内は熱気で満ちてくる。放送席のテレビカメラも動いている。観客や解説者、控え力士の表情も興味深い。

例によって十郎さんが、中入後の勝負予想を書けと言ってくる。私の予想は、その日の力士の肌の艶光りで決めるが、それと関係なく先に晶肩力士、高見山を白星にする。私はいつも彼の故郷ハワイを思う。あのよつな環境で育った人が、特に厳しい封建的な相撲社会に入つて、言葉も習慣もガラリと違つ中で忍耐と努力で、ここまで上がった。しかも長い幕内が続いている根性、そして負けた時の格好、ユーモラスでベーツスがある。そこが晶肩の因である。その次は隆の里だ。彼は大関に上がるまで、他の同期や後輩に追い越され何度も体の故障を乗り越えてきた。

うれしいことに、この二人共快勝したので最終の集計で柳志さんに十郎賞をしてやられ

たが、さわやかな気分で雨上がりのナンバを後にした。

相撲の鉄則は「押さば押せ引かば押せ」だ。しかし人生は、時に退かねばならぬ場合もある。殊に川柳普及には押しの一事も打棄りも考えねばならぬ。それでも私は勇み足で負けても、打棄りで勝ちたくはないと、南海電車の席で自己催眠をかけていた。

勇み足ほめて打つ棄り叱られる

おすすめさん

黒川 紫香

大矢十郎さんのお招きで、本当に十数年ぶり大相撲を見せいただいた。大阪の春場所八日目である。

折悪しく当日は雨だったが、府立体育館に着くとまだ正午過ぎだというのに熱気がアンブンとしていて、入口に溢れるファンを掻き分け取付達が大きな体を揺さぶってくる。まだ三段目か序の口の若いおすすめさんだ。

全員八名が揃ったところで相撲茶屋の若い衆の案内で場内に入る。棧敷の下をくぐり抜けて所定の場所にとどろつくのが大変だった。

土俵を見るとまだ三段目というのにもう半分位座席を占めていた。幕下以下の相撲は仕切りも早くて面白い。土俵と取組表を見ている間に勝負はついてしまっている。

やっと十両の土俵入りが始まる。流石に閑取という貫禄になる。そしてテレビで見馴れた顔がつつぎと登場する。誰か女の声で

「おすもうさんの肌って意外ときれいわね」と歓声を上げる。成程おすもうさんといえは筋肉隆々とした二つ二つの体を想像するのだが艶々として綺麗だ。特に勝ち込んだ力士は美しくて生き生きとしている芸術品と言っているのではないか。

相撲の四十八手は判らなくても外人も好んで見るのもここであるのかも知れない。

横綱の土俵入りが始まる頃になると周囲が騒がしくなり満員御礼の垂れ幕が下りる。北の湖の豪快さ、若の花には同情を交えた拍手が上がる。とりわけ千代の富士は軽快で足を高々上げる四股には大きな拍手が湧く。

取組は淡々として大きな波乱もなく進むが中入り前に頼まれて印した勝敗予想は次ぎ次ぎと崩れてゆく。隣席の潮花君も同様で、これじゃあ白丸と黒丸と取り違えたらしいねと顔を見合せて笑う。

人氣力士の富士桜が大錦に勝ち、高見山が小兵の柵剣を豪快に破って歓声が湧いたが、朝汐が隆の里に負け、若島津がまだまだ千代の富士の敵でなく敗れると溜息が周囲から洩

れる。若島津びいきらしい隣のおばちゃんが一瞬に悄気てしまった。

上位陣に波乱もなく六時少し前、打ち出しの太鼓に送られてムンムンとした体育館を出るともうすっかり雨は上っていた。

出番待つおすもうさんの四股ひびく

愛すべき高砂三羽鳥

大矢十郎

東西東西……。

大阪の街に春を運ぶ大相撲三月場所も、今日(中日)、浪花の土俵に初見参の横綱千代の富士と、更に新大関隆の里、大横綱の風格を備えた北の湖は春場所六連覇を目指して破竹の勢いである。更に、体調を整えた美男の横綱若の花の活躍に目を見張るものがあった。この日まで千代の富士全勝、北の湖、若の花各一敗。それに実力大関といわれる隆の里も一敗で全勝千代の富士にびったりとくつついている。

四者四様のしのぎ合いが、春場所後半をい

やが上にも盛りあがらせる事だろう。

浪花の春を制するのは、果たして誰か？ ウルフか北の湖か、大阪場所を面白くしているのが高砂三羽鳥だ。朝汐、高見山、富士桜の健闘振りにはファンを喜ばせてくれた。この

三人は揃いも揃ってあんこ型であり、同じ人氣と実力を持ち合わせ、猛突張りを武器として、禪を与えず欲しがらず、徹底的な突張り、見る人を楽しめて堪能させてくれる。朝汐より飛込みと出足をよく区別して、前進してくれ大関はもう直ぐだ。

高見山よ、よう見て突け！ 突き放せ！ 禪に手を触れさせずな！ 富士桜よ、禪がきつ過ぎはせぬか。息切れが目立つ。往年の富士桜なら短時間で突張り出すことが出来たが、今の富士桜には取らせぬための禪のきつさが長い勝負に大きな負担となつて、太鼓腹に波を打たせて出足が伴わず、ぱったりと前に落ちるのが気掛かりだ。

頑張ってくれ、愛する高砂三羽鳥よ。昔から関脇の強い場所は面白いと言われている。今場所の面白さは、三横綱の充実振りと大関の安定に加えて、東西両関脇の強さが面白くさせているのであろう。

優勝は誰であれ、千代の富士のあの強い引きつけて相手の体を自分の体にして、前に走る相撲が目には焼きついた。

春場所を荒さぬ綱にある地力
高見山の手刀嬉し勝ち名乗る
富士桜負けて取り口誉められる

微風

神原秀子選

公園の日溜り老婆に吹く微風 山久
 そよ風が二人の頬へGOサイン 志保
 くちなしの花が微風にくすぐられ 登美也
 草に寝て天地の神秘知る微風 春草
 みの虫も微風にそつと囁やかれ 勝美
 そよ風の中を春闊ブラカード 佳雲
 そこはかと微風飛鳥の野は静か 洛酔
 頬撫でる微風に孤児の見る祖国 浪速子
 洗髪にそよ風そつとささやいた きみえ
 離れとは微風の中の老い二人 宵明
 そよ風に託して贈りたい慕情 凡太郎
 諍うて三日目やつと微風ふき 倫子
 散歩道みどりの微風にふと出逢う 多賀子
 そよ風に祝入学の幕揺れる 軒太楼
 微風と共に売場は春の色 実男
 キヤンドルへあるかなきかの風を知り 昌道
 たくらみを微風の中に感じとり 三和
 微風に女素直な顔になる 富子
 鯉のぼり微風へしばし昼寝する 明朗
 微風のまるい言葉にふと浮かれ 一路
 花園の微風に男眠うなり 松本文子
 都市砂漠微風育たぬビルの壁 日枝子

左遷地でみつけた微風土筆つむ ゆきを
 そよ風に髪なぶらせる髪がない 幸一
 微風さえ心に刺さる負け戦 枯梢
 ほろ酔いの頬を微風は知っている 実
 そよ風に小さな恋も芽生えそう 一進
 微風に日の丸殊更美しい道子
 そよ風が撫でると柳の芽が覗き 満津子
 そよ風のような女で気がなごむ 綾珠
 五月晴れ微風に光る柿若葉 代仕男
 かげろうの微風へ胸の火がゆらぐ 可住
 花の香を微風に乘せて春の窓 春日
 サークスの移動へ微風ついてくる 刀水
 そよ風に乘せてきましたいい便り 弘朗
 微風がスリにポケットを狙わせる 蕉露
 昏が微風にふるえている過保護 素身郎

罪

桑原道夫選

罪作るふたり此の世のおもしろさ 重人
 一緒なら罪もうれしい丸木橋 勝美
 輪の中で罪の意識が薄れかけ 一路
 罪のない石が波紋を拡げてる 日枝子
 罪人の手錠はかくしてやるなさけ 秀子
 定年制無罪放免天下り 浪速子

住
 そよ風の罪は移り香運び去り 七面山
 そよ風の木陰に眠る乳母車 芳子
 菜の花に蝶ももつれて行ける微風 里風
 タンポポの綿毛が浮いて行く微風 木魚
 そよ風に訣れ話が円くなり 義美

人
 心地よい微風故郷語るとき 婦美子
 窓際へゆつくりせよと言う微風 木魚
 微風にも襟かき合わす春の風邪 本蔭棒
 おくれ毛をいたわり微風のなかで待ち 軸

天
 罪ふかい男の上げる般若経 枯梢
 大物の罪は玉虫色で消え 弘朗
 罪一つ犯さぬ夫の頼りなさ 七面山
 物干しのピンクに小さい罪がある 本蔭棒
 また逢いに罪深くするあかんだれ 豊
 罪深い男が作るたばこの輪 文子
 そんな眼で見るから罪が深くなる つぎお
 罪滅ぼしですと深くを語らない 芳子
 罪一つとどめて今日の日記閉す 武水
 罪持たぬ顔で待ってる始発駅 規不風
 面白い罪は隣の柿を折る 古都路
 罪ひとつ残して壊れたシャボン玉 枯梢
 水子への罪遠い遠い日を悔い 洛酔

路 集

親の罪と恨めば子からも恨まれる 規不風
 償えぬ罪におびえて寒椿 多賀子
 罪ほろぼしの課題いくつも持っている 秀子
 働いて働いて罪消していく 文子
 うかうかと生きて重ねる小さい罪 大柏
 罪多き舌に生きて重なる小鳥に 刀水
 万年青の実つく小鳥に罪はなし 伊津志
 どんな罪させてやろうか孫の奴 三五島
 掃除機に己の罪を吸わせたい 光子
 ふるさとに戻れぬ罪を一つもつ 刀水
 巡礼の鈴に消された罪一つ 道子
 罪を消す二人を乗せた流し雛 御前
 落椿罪ある形で燃えつきる ひで
 罪人も綺麗に消した墓の文字 優
 恋心ふみにじったらなんの罪 四郎

趣味の花培う土にも癖が在り 朴竜
 土の香が鈴蘭と来る北海道 回天子
 掘りかえず都会の土を汚ながら 不二
 生きている証しの土で捨てられぬ 一路
 土だけがつかない嘘をもっている 蕉露
 嘘のない大地を信じ種を播く 凡太郎
 一坪の土をいじっている余生 秀子
 枯れた木と知っても土は根を抱き 勝一
 土知らぬニワトリせつせと卵生む テル
 捨てるにも埋めるにも土に金払い 倫子
 移民船土になる人乗せて出る 不二夫
 嘘つかぬ土をいじっている無心 伊津志
 喜びを土から貰う朝の試歩 文平
 もの言わぬ土から引き出す考古学 木魚
 信楽の土で狸を生みつづけ 婦美子
 土捨てた男飯場の土を這う 多賀子
 土に生き土の不満に耳を貸す 公一
 開発へストッかけた出土品 芳子
 土は生きていますと農夫の輝く目 七面山
 出たみみず土に帰してひとり言 素石
 一握の土に祈りを上り窯 枯梢
 効率の悪さ空地があくびする 秀峰

土

高田博泉選

アスファルト剥げば地球見えくる 久仁於
 連作へ時々土がそっぽ向く 登美也
 土に生きる女の指に無い指輪 武水
 散る花と又逢う約束土はする 規不風
 土つけたままで連根セリは出す 宵明
 待ち切れぬ春が土をもちあげる 刀水
 舞い落ちて枯葉は土の私語を聞く カズエ
 適当に土堀も荒れて古都の味 優
 土奥い人にも銀行マン腰を折る 裕
 地球ごと上げそうブルドーザーなる 不二
 土の芽が匂う初芽の音をたて 千子
 ハイヒール土を知らないままにへり 甲子郎

一握り地球に俺の土地がある 正敏
 土を踏む素足へ邪念消えてゆく 本蔭樺
 土葬して小鳥へちいさな手を合せ ゆきを
 土に生くために農大出てかえり 三五島
 グランドの土よ補欠のまま終り 素身郎
 土地売った日から太陽拝まない 大柏
 冥土では円がなんぼに換えられる 幸一
 丹精へ答える土の温かみ 悠泉
 千年の杉を護った土の色 博泉

★【訂正】三月号P61席題「曲る」
 人間のエゴに植木の曲げられる 喜風

初歩教室

題 | 呆れる |

本田恵二朗

——を聞いて十を知る——という言葉があるが、十を知るといふことはたやすく出来る技ではない。相当の修練や人生体験があつてこそなせる技であらう。そこでせめて一を聞いて三を知るぐらいまでには到達したいものだと私は思っている。句を鑑賞したり批評をしたりする場合でも句意をどこまで掘り下げて解釈できるか、三までか、五までか、そこに個人差のあることは当然であるが、高度の修練を獲得した選者の解釈は驚くばかりに深い。句主の意欲した句意よりもはるかに深く解釈して、句主をして吃驚させたり、恐縮させたりする場合だつて往々にしてある。

そんな深味のある句を生みたいものだ。

気風よい男が来れば風が吹く

山久

(無欲淡々呆れるほどに良い気風)

長電話叱れば娘銭を出し

柳右子

働けど吸取紙のよう娘が二人

同

(吸取紙のような娘に呆れはて
姑ごころ嫁に届かず呆れはて
呆れ顔嘘と知りつつ聞き流し
(嘘八百呆れた顔で聞き流し)

房 子

ただ酒と承知呆れるほどに酔い
食欲が呆れるほどで伸びに伸び
(食い放題伸び放題の子に呆れ)

同

(口上手へアラまあまあと呆れとき)
どわすれを呆れ合つてる共白髪
謹公害仁王さんも呆れてる
(仁王さんも呆れてごさる佝公害)

武 太

高層ビル呆れて田舎の吐息はく
(田舎者雲つくビル(呆れ顔)

芳 枝

三歳児親も知らない流行語
われながら呆れ人にも物忘れ
(われながら呆れるほどの願ひごと
神さまも呆れるほどの願ひごと)

貞 子

自滅者の記事呆れたローンの額
(自殺者の記事呆れたローンの額)

同

(アラまあまあアラまあまあと親を抜き)
呆れてるうちにどんどん親を越し
大ぼらの巧みに呆れて笑いこけ
(うま過ぎるホラに呆れて笑いこけ)

千 代

街角の呆れる声に暴走族
(ぶつとばす単車へ街中呆れはて)

風 童

雨のジョギング古いの意地呆れられ
(雨のジョギング古いの意地呆れられ)

同

返答に詰りて啞然と眩むなり
(返答の語が見つからぬほど呆れ)

同

役人の乱行民はただ呆れ
終りなき交通戦争にただ呆れ
政治屋の嘘つき矢鱈に腹が立つ
(政治屋の嘘呆れさせ呆れさせ)

昭 治

呆れても親は子の足洗うてやり
(呆れながらも子の足洗うてやり)

武 水

大物の腹に呆れてもの言はず
(大物の腹の黒さに呆れはて)

同

呆れてた方が真顔になる逆転
(呆れてた方が逆転して真顔)

同

血と汗の上で国鉄酒を呑む
次々と日本のメッキ充げ落ちる
(日本とのメッキまた充げまた充げる)

紀 久 子

取調べする警官が呆れはてき
(警官を呆れかえらすほどに酔い)

同

口先の親孝行で呆れさせ
月下氷人は呆れるほどの世辞並べ
(仲人の世辞のうまさに呆れはて)

同

デビュールした歌手の下手さにたた呆れ
(清六のもげ節呆れかえらせる)

同

みつる

逢うたびに呆れるほどの孫の知恵
だまされた後で呆れる口上手

同

同

元 江

同

同

同

見苦しく酔って女の花見客

登舟

(見苦しい姿体女の花の酔い)

同

大杯を呑みほすほどの女傑です

寿子

(女傑かな大杯ぐつと傾ける)

同

春風も呆れるほどの熱い仲

忠広

(春風も呆れ戸惑うほどの仲)

同

呆れるほど走り廻して趣味多彩

胡頑子

(多趣味はよいがよくもまあ暇があり)

同

両隣り呆れさせて若夫婦

同

また遅刻呆れたような主任の目

同

(また遅刻主任の呆れた目に出合い)

同

反抗期呆れた口にもて余し

同

(反抗期の口にもて余しもて余し)

同

人それぞれ才能を持っている。大別すれば先天的と後天的に別れる。先天的と思われものもの芸術的な才能は生れながらの素質の比重が大きい。仮に画の素質だが、素質のない者がいくらか何百枚のスケッチしても駄目だ。音楽の才能、碁、将棋の才能もその先天的素質に属する。後天的と思われるものは環境にむすびつくことが多い。父母や姉兄からの環境による才能の開花をしばしば見られる。これは後天的才能と言つ。社会とその分野において一人一倍の苦勞と工夫努力なしには名

一分間の柳論

斎藤三十四

人上手は生れない。

川柳の世界にも素質のある人は立派に先輩を抜いて立派な作品で名をなしている。勿論勉強努力はなされていることだろう。相撲の社会では体力的素質が絶対要求されている。名人横綱といえども一人一倍の稽古は積んだ結果だ。野球の長嶋、王も素質ある努力家だ。私は川柳素質のない、才能のない者だ。句会でも没句がつづくが私は川柳が好きだ。これからも私なりの努力をした。

肝つぶす呆れた友の四月馬鹿

同

(四月馬鹿呆れた嘘が肝つぶす)

利美

テープから聞いて呆れる僕の声

同

よく我慢したと呆れる聴診器

小雅子

(我慢のしすぎだよと聴診器が呆れ)

同

暴走の修羅に呆れた警邏の目

幸子

(暴走の狂音パトカー呆れさせ)

同

天真爛漫にしては呆れた娘の乳房

同

若い娘の度胸のよさに呆れはて

幸子

すばしい処世もあるにただ呆れ

同

(抜けがけの処世の術にただ呆れ)

同

朝寝して昼寝宵寝とは呆れ

ふみ

満腹を知らぬ息子に母呆れ

同

(腕白が空つたへつたと呆れさせ)

英子

空缶の数に呆れる春の風

同

(空缶の数に呆れる花の丘)

同

何時来ても心齋橋の人の群れ

同

(来るたびに呆れさせます心齋橋)
 対策もフアイトも消えただ呆れ
 現代っ子のモラルの無さにただ呆れ
 (現代っ子のモラル明治を呆れさせ)
 借金を呆れるほどに抱えてる
 (借金を山ほど抱えたじろがず)
 うつぶんを晴らす呆れるほど喋る
 (うつぶんを晴らす気喋りまくるなり)
 呆れてはおれない非行の低年下
 神仏も呆れる人間のエゴイズム
 (人間のエゴが神さま呆れさせ)
 われながら呆れた過去に責められる
 酩酊の口が生活苦をかこち
 (焼酎の舌が生活苦をかこち)
 ナウという意見を呆れながら聴き
 (現代っ子の主張へ呆れた耳をかし)
 中三の食欲段取り狂う母
 (胃袋がいくつあるのよ中三生)
 小一にわざと呆れた顔を見せ
 (小一へ呆れた顔に亡てやり)
 呆れたポーズなつかし亡て母の顔
 (亡き母の呆れた顔をなつかしみ)

題一演技一5月20日締切(7月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一―九一三四
 本田恵二朗

柳界展望

(原稿締切毎月末)

集録・香川酔々

■本社主催川柳塔200号記念川柳大会は、去る4月4日阪急ランドビル26F会議室で盛大に挙行された。本号所載の大会関連記事を、ぜひ熟読されることをお願いしておく。

■塩満敏句集「夫婦酒」が発刊された。出版記念会が3月21日大阪駅前第2ビル地下2階喫茶「うたごえ」で開催された。前大阪府知事黒田了一氏をはじめ、各界の名士百余名参集、著者の交友の広さを示した。句集は、B6判・総ページ20ページ、定価2千円。発行所・川柳塔社である。

■川柳岡山社より「吉備団子・32集」が刊行された。515名参加、自選10句の合同句集である。A5判・134ページ

1シ・定価千五百円・発行所・川柳岡山社である。

■第12回紋太忌川柳大会は5月23日(日)正午。兵庫県福祉センター(神戸市中央区坂区通)で開催。兼題・川柳・灯・つなぐ・袖・安らぎ・枕・ゆれる・挑む・各2句。(会費千円)

主催・ふあずと川柳社

■第14回東洋樹川柳賞贈呈川柳大会は5月9日(日)11時神戸市立福祉センター(中央区・湊川神社西門前)で挙行。題と選者

素顔(下部晴美)点(浜野奇童)雑草(岩井三窓)誘惑(西沢青)男(橋本衛門七)めし(西尾某)許す(小松原爽介)各2句。

講演は、寺尾俊平氏。主催・時の川柳社

■柳都川柳社では56年度柳都賞作家を左の通り発表された。

阿部紫葉作品
平和とは芒が枯れただけで泣き ほか19句
宮川蓮子作品
ギャグにころりと参っている ほか19句

山倉洋子作品
愛よ愛よと櫛のつややかなる孤独 ほか19句

■川柳藤井寺の発会式が2月21日に開催された。新しい川柳会の誕生である。新名称・川柳藤井寺
会長・笠原藤江
副会長・吉田喜代志・児島与呂志

「発展を祈る。なお事務所は、〒583藤井寺市北条町4-6吉田つや方(T E L O 7 2 9 5 2 4 5)」

■古梅句碑まつり記念川柳大会(付生駒番傘5周年)時・5月30日(日)9時30分〜10時30分まで句碑まつり。(国鉄王寺駅頭)つづいて、5周年記念大会が、生駒宝山寺「和光殿」で開催

〈宿題〉
故郷 古川 一高選
駅前 歌藤 一麦選
響く 伊藤 定子選
仲間 西村左久良選
過ぎる 杉森 節子選
酔う 田中桂太楼選
明日 森中恵美子選
金持 西村 芳川選

大東市民川柳3周年記念大会

日時 昭和57年5月23日(日)12時開場
会場 大東市立市民会館2階大会議室
国鉄片町線住道駅下車徒歩10分
電話0720(71)000113

柳話
宿題と選者
事前投句「朝」 山本 翠公選
口笛 平田みのる選 おでん 伊藤千代磨選
漬物 久保田以兆選 道連れ 歌藤 一麦選
仲居 尾谷 清風選 霧開気 中尾 藻介選
前進 安井 久子選 個性 奥田 白虎選
ことは 小松原爽介選 宝石 藪内千代子選
百度石 西村 芳川選 法律 永田 帆船選
接待 中田たつお選 金魚 岩井 三窓選
挨拶 増井不二也選 明日 金泉 萬葉選
仲人 西尾 栗選 残念 龜山 恭太選
時間 磯野いさむ選

各題一句、メ切13時。事前投句4月30日迄
会費 一千元 懇親宴 四千元

主催 大東市民川柳会

新同人紹介 (五月から)

岡 井 やすお

— 栞・薫風・酔々・鬼遊推薦

林 はつ絵

— 多久志・紫香・薫風推薦

坂 本 仙吉郎

橋 元 美 恵

— 以上弘生・満津子・薫風推薦

長 谷 川 春 蘭

— 文秋・智子・小路・柳伸・酔々推薦

野 坂 な み

寺 沢 み と り

田 中 亜 弥

— 以上栞・花子・千代・薫風推薦

発表

田向 秀史選

生駒 岸本 吟一選

締切・12時30分(2句)

会費・2千円(記念品、昼食)

懇親宴・4千円、同所にて

出席申込・4月30日まで

欠席投句辞退

申込先・〒630生駒市新旭ヶ

丘5-35 大神古梅宛

電話(07437)4-1356番

病院に入院、3月29日手術された。一日も早いご快癒をお祈りする。

▼吉岡美房氏(藤井寺市)夫人和子さん3月17日急逝行年53歳。18日道明寺会館にての葬儀には、同人多数参列お見送りした。謹悼。

▼藤村亜成氏(寝屋川市)電話番号が左記に変更。0720-22-2339

▼清水一保氏(鳥取県)より、山陰川柳大会を8月下旬頃開催に変更と通知(町議会選挙のため)があった。

▽句会案内△
■菜の花句会
時・5月10日(月)夕6時
場所・西郷会館(八尾神社境内)近鉄八尾駅下車
兼題||良心、仏、追う、ラ
ンチ、大阪風景

■南大阪川柳会
時・5月19日(水)夕6時

場所・高松会館(寺田町)兼題||退屈、近道、突く、点数。

■南海川柳部
時・5月20日(木)夕6時
場所・南海会館ビル本社地下食堂
兼題||切手、赤、茶

■東大阪川柳同好会
時・5月22日(土)夕6時
場所・東大阪中央公民館
兼題||萌える、繁華街、身
勝手、麦笛

■駒つなぎ川柳会
時・5月24日(月)夕6時
場所・高松会館
兼題||婦人警官、拗ねる、
居眠り、消す。

■堺川柳会
時・5月18日(火)夕6時
場所・堺青少年センター
兼題||城、しるし、ふた、
スト。

なお同氏の孫娘美代かほり(芸名)さんは昨年、宝塚歌劇団を退団し、このたびワールドレコード社よりレコードを出し、先日ラジオ関西より一週間放送された。(曲目「美しき雨」外、いづみたく作曲)
美代かほりさんは六年間月組に所属して舞台を勤められました。
▼村田瓢太氏急病にて松下

「古稀」

岡井やすお著

新同人の岡井やすお著、川柳句集「古稀」がこの程発刊になった。著者は朝日カルチャーセンターの川柳入門講座の出身で、今や作句が面白くて仕方がないという境地、四月四日の記念大会で七句入選というハイレベルの力量を発揮された。句集は、一年半の作品のうち百句を取録、尚子夫人の十句も併せて掲載、夫唱婦隨の床しさを示されている。それに三人のご息女をはじめとする眷族の方達がそれぞれ一文を草して側面からプロフィールを紹介され、小冊子ながら和やかそのものの雰囲気溢れている。

〈作品〉

三代を生き抜きききょうの古稀の春

こんな字を書いていたのか古日記

柿に添え銭箱のある笠置道

ニュートラム思った程の景でなし

砂煙りの中からホームインの顔

薬より孫の電話が利くらしい

化粧室男は見えない方がよい

僕よりも僕をよく知るかかどの
 〈尚子作品〉
 相談に乗って力を試される
 踊る輪が疎らになって熱を帯び

父の川柳に

次女 康子

お父さん、七十歳おめでと。

ますおどろくのは、もうこんな本にする程

川柳があるという事です。父が俳句・川柳を

始めたのは、ついこの間のように思います。

それまでの父は仕事ばかりの生活で、娘三

人が結婚して家にいなくなつてからも、自分

の趣味に時間を割き、自分から習い事をする

などという事はほとんどありませんでした。

退職してしばらく家にいた時に、何か趣味で

もあるといいのにと家族で話していたのです。

が、趣味などというものは、急に湧いてく

るものでもないし、まして人から与えられる

ものでもないで、こればかりは仕方ないね

などと言っていました。

その父が、三年程前に胆石で入院し、六十

六歳の高齢にもかかわらず大手術をすること

になりました。体もやせ、顔つきも変わって

しまい、又、当分、趣味どころではなくなつ

てしまったのです。

父が、カルチャーセンターに、俳句・川柳

の勉強に行っていると聞いた時には、「え？
 あのお父さんが？」とおどろきましたが、それからは、水を得た魚のように次々と新聞雑誌等に、父の俳句・川柳が載るようになり、今では、毎朝、新聞を見て、父の俳句・川柳をさがすのが、私の楽しみにもなりました。

父の健康と、これからの人生のために、俳句・川柳に感謝！

やすお氏のご健康と、川柳ご一家の平穏を祈ります。
 (薫風)

川柳塔社常任理事会 (4月1日)

出席者 水客・潮花・紫香・太茂津・吸江・形水・庸佑・史好・鬼遊・与呂志・岳人・栗柳宏子・薫風・酔々

〈議事並びに報告事項〉

★大会運営に関する事項 異議なく可決。

★本社会会場変更の件 金属会館改築のため、7月句会より、上本町六丁目なわ会館に変更する。(庸佑、岳人両氏のご尽力)

付記 大会設営について、健司氏のご好意に感謝する。

(酔々記)

★5月の常任理事会は1日(土)5時から

春の度胸

■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。十七字以内の句に、下二マスに雅号。

(整理・香川酔々)

川柳ねやがわ

高田 博泉報

土壇場で女の方に出る度胸
交代を優しく告げる春の風
度胸決め一足出れば春の風
準備などもたぬ本番だつてある
ロボットの方が効いた人べらし
雨宿り自動ドアがサツと開き
逆境を笑い飛ばして底力
嫁いだ娘もつ方言で喋べり出し
小心の度胸の仮面すれてくる
あの刻の交代永遠のよき出逢い
主婦の座を嫁にゆずった日向ぼこ
また風邪か亡夫の笑い声がする
交代も出来ず地蔵に春一番
くそ度胸さめると虹まで見えてくる
光から届かぬとこに石一つ
停年後年金だけの靴となり
見かけとは正反対という度胸
スポーツで鍛えた嫁のくそ度胸
屈辱に耐え座布団に座らない

勝美 満津子 シマ子 山久 淳調 一笑 花世 冬葉 清香 三千子 一江 あいき 静歩 度 亜純 寛然坊 柳宏子 入仙 紫香

切り札として温めてる底力
風上に雲雀が揚がり幼稚園
道すれに方向音痴がついてくる
交代の二字で人生裏返る
威張つてる度胸一番先に逃げ
交代をしたらあつさり落ちた城
交代の時期社長の口重い
向うからポーツを漕いで来たチャンス
川柳ウイロ社 前山 北海報
夢うせた約束されし未来像
約束を信じ待って臺がたち
外交の確い約束反古にされ
指切りを信じて孫の瞳がきれい
選挙まえ山程公約並べ出し
約束を果たし一服爽かき
約束のデーロ仕事も上の空
軽々と約束されて後で愚痴
指切りを忘れちゃつたと母は老い
神前で二人の誓いすぐ忘れ
約束は反古には出来ぬ男意地
約束の出世恩師の目が潤み
義理がたい父は約束反古にせず
約束の一弗孫が肩を揉み
政治家の約束左右金次第
約束よ約束風した娘逢いに来ず
約束も無常の風に破られず
逢引の約束思わぬ邪魔が居り
約束を忘れてしてもう程に惚け
約束は今日も風邪だと詫げ電話
約束の日取で会えば物足らず
勝山双葉川柳会 河野 君子報

琴音 よしひろ 亜也子 晴風 一途 野生 一念 英千子 高原子 カロ女 公女 風影 三十四 秀山 梨花女 黄塵 三石 歌子 万里歩 張賀 拝山 雪女 虹宵 紅健 嗣榮 北海 千代女 蒼生

悲しみの深さは口を閉じたまま
閉じた目に夫の笑顔のみ浮かび
閉じている貝には貝の意地があり
愛さめた女の日記は閉じたまま
これ以上妥協出来ない口閉じる
聞き出そうとすればする程閉じる口
下戸二人甘酒ふきふき梅ほめる
足音を殺せば謎の匂いこない
背信の夜の足音が聞こえない
一枚のはがきが過去を連れてくる
一枚の履歴書男の顔となり
セーターを一枚入れる春の旅
ゆかた一枚縫って和裁知った顔
春の声一枚めくれば聞こえそう
背なの子の温みへ遠き夢を抱き
折り返し点から背なを意識する
妥協するつもり背なが丸くなる
背を向けた人は追うまい冬木立
母の背の丸さへ詫びること多く
南大阪川柳会 中川 滋雀報
窓際へ万年平できた頑固
頑固者の妥協が背なに少しある
頑固さにヒケを取らない油虫
勲章を拒む頑固が記事になり
頑固さが顔に明治と書いてある
珉珉のギョウザで飾らぬ女という
ただになるギョウザへ挑戦する若き
客が来てギョウザの息を細くする
過保護からぐずりに育った一人っ子
ぐずなりに行く一本の道がある
ぐずだから開りの事がよく見える

柳伸 恒子 節子 千里 いくの 頂留子 千万子 智慧子 千寿子 好子 秋子 芙佐女 妙子 静子 静香 洋子 楓楽 小雅子 楓楽 柳伸 萬的 滋雀 鎮彦 久美 勝美 静香 洋子

大衆が集つと不隠な風が吹く
展開する景色楽しむ山登り
手内職花に埋もれて花を見ず
展開もせず美しい鶴の列
鈴の鳴る方へ展開してくれず
子想屋の通りに展開せぬレース
どっちへころんでも自信のある軍手
展開の部隊還らぬ兵の数

川柳しんぐう
亡母の顔孤児の臉で生きつづけ
富士山へ歓声孤児の目に涙
懸命に生きて保障もされぬ孤児
孤児の目に母国は夢のパラダイス

雅号ぶつちやげばなし (202)



黒川紫香

くろかわ

しこう

邦晴 綾珠 憲祐 千代三 茂雄 柳宏子 重人 信治 川上 溪水報 富子 勇太 溪水 十郎

孤児として母の匂いは忘れない
にこにこゲストはテレビ喰っている
ゲストの耳くすくりにくる敬語
披露宴ゲスト言葉を上りに選り
ノータイのゲスト言葉も飾らない
お茶席の乱れぬ青い目のゲスト
一枚の誓詞にいつも狙われる
熟年の恋標的が揺れに揺れる
狙い撃ちされる覚悟の回り椅子
順調に馴れた歩幅を狙う石
狙われる女に弱い箇所がある
狙われてそのたくらみに乗ってみる
寡婦の名に堪えてそれから長い旅

大輪 武太 雀踊子 三千代 武雄 登紀夫 幸 白光子 三男 孝一 忠雄 潮花 里美

昭和十年、当時南区の誓得寺で催された川柳雑誌社の本社句会に初めて出席した折、記帳に当ってふと私
が子供の頃亡くなった長兄が俳句か詩で紫香と号して
いたのを思い出して何気なく借用したのがはじまりで
す。

それまで新聞や雑誌から見様・見真似で川柳らしき
ものを作っていました。句会が麻生路郎先生にお目
にかかり、爾來、紫香君、紫香君と可愛がって戴き、
門下生として不朽洞にも入れて貰い、曲りなりにも現
在まで川柳を生甲斐として作句を続ける事が出来まし
たのも先生のお蔭であると思っております。

そんなわけで、一寸抹香臭い感じはありますが、私
には本名同様大切な雅号であると信じて胸に刻んでお
ります。

(無職 七十四歳)

はつきりと言って私の雅号は二代目
です。

結納のそれから勝負の鬼となる
それからは家族の絆強くなり
それからは手綱を緩めたりしない
東大阪川柳同好会 齊藤三十四報

親思う心が孝行だともう
絵ハガキに父を気づかうことすこし
しじみ売る子が露地裏の朝を出る
子沢山孝行なのが一人居る
孝行を行場で誓う命綱
のみこみの早い息子へぶらさがり
受験の子誓いは壁にはってある
法廷で誓う言葉の白々し
誓いなどするから身動き出来ぬはめ
指切りの誓いうれしい日がつづき
庭造り父が形見の椿咲く
糸遣り磯のおりをそえて来る
合格の喜び抱いて恩師訪う
回り道して友訪えば泣きつかれ
出来るものできて訪れの変る顔
仲直りしたくて昨日の敵を訪う
手みやげを提げて師匠にしかられる
退職の日から減りだす訪問者
出来ぬはいよいよ偽造と見破られ

いざも川柳会 板垣 草丘報 儀一
最高の美に飾られた角かくし
途中から笑う余裕を残してる
引揚げの途中で捨てた子は育ち
面会に妻と女のはちあわせ
檀山に面会人はもう来ない
面会の多い女囚はいい女
築地松邪魔するようにホテル建つ

登志代 民代 まさ子 美子 作二郎 湖風 三十四 弥山人 鎮彦 かずを 千代子 綾珠 慶三 喜一郎 白屯 文秋 右近 喜風 久子 滋啓 度

正朝 早苗 立雲 ちかし 昭二 幸一 草丘

御自由にたのしむホテル窓明り
 ネオン点けクラグ泳がすホテル街
 ホテル出て左右バイバイして別れ
 上部だけ飾る政治はもうこめん
 甘藷の芽明り求めて長い冬
 斜陽地にこぼれた種も芽ぐむ春
 わかめ売り村のニュースを持ってくる
 途中から舟を漕いでる長談義
 馴れぬ手で長芋途中からほきり
 長い列途中で返す蟻もいる
 ホテルには仏も居れば鬼も住む
 草花を髪に少女の春匂う

山長川柳会

那須

鎮彦報

良子 孝吉 夢醉 繁則 柳洋 多賀子 芙佐子 軒太楼 独仙 流石 三五 緑之助 轍彦 重信 文夫 初子 忠司 守 幸太郎 吾一 裕紀枝 嘉道 昇 一美 春男 鎮彦 虹月

のし付けて目出度い酒にして貰い
 福引きの品手土産に年始客
 コップ酒酔えば皆んなが評論家
 掃除機が目出度い音で駆け回り
 雨と言う予報が当る行楽日
 ふり向けば挑戦の目がつきささる
 宴な日は主賓はいつか雲がくれ
 達磨の目しか丸めて祝い酒
 山々を越え勇退の駅に着く
 我が家には垣根などなし嫁姑
 十八番音がかかって来る安来節
 緋の袴はけば静の心なり
 厄年で氏神様へ日々語り
 川柳ささやま
 福豆へ女ひとりのを煎り
 福豆を頂こうにも歯が痛み
 福豆が膝へ舞い込む果報者
 保母の手で端数をうめる玉運び
 端数まできちんと数え手内職
 反骨の気概端数にされてから
 算盤の端数あしたの知恵をかる
 足跡は消さずに置こうに踏ます
 雪の上サンタは足跡残さない
 十五年義足の暮しも板につき
 どん底を這う足が要る平家ガニ
 三役も妻からもらう知恵一つ
 三役の椅子の一つへ木偶をすえ
 三役の極秘を探る酌がくる
 年男福はみんなにまきました
 虹川柳倶楽部
 席はずす仲間の話へ早がわり
 新岡回天子報

秋月 岳詩 実男 葉香 大鷹 白李 三青 越山 奮水 富多葉 多津 遊香 客遊子 可住 ひか平 法齊 久子 与志 越山 美智子 ゆう也 宗珠 八陣 ゆきお 文平 素水 靖子 和人

妻は寝て目刺二匹で粥する
 魔力持つ金と女を追って日々
 異郷語で二世なみだの親さがし
 イルカ殺すな牛は殺して良いらしい
 母の業満願の無き祈りする
 電気毛布着ても心が温もらず
 お地蔵へ彼岸の雀じやれて寄り
 手作りりの見えぬおはぎの船の艶
 ほんのりと温さがかけてくる唐津
 わかあゆ川柳会 小砂 白汀報
 野良犬が炭小屋かりて産み育て
 運転手新車を白い手袋で
 何かしら心忙しい赤電話
 命がけ孫の新車で初詣で
 佳句地10選 (前月号から)
 川口弘生選
 神様もほっておけない人がいる てまり
 責任者時計を少し進めてる 形水
 貧乏な家やと飼犬も思うと 多久志
 いい酒になる徳利よと備前焼 柳五郎
 奥さんに信用のない飲み仲間 松風
 身におぼえ無口の妻の眼がこわい 三十四
 人はみな違う角度の手のぬくみ 正朗
 頂上の風が恐くてなまけもの 善居
 語り部の背にケロイドの跡があり 鬼遊
 置手紙みかんが一つ乗せてある 女

忍べどもカニの足跡砂の朝

無気味さは深夜にはつんと赤電話

鎖ひき何時も吠えなくなるも犬

長持の唄で新車もやってくる

盗人酒ほどよくまわる日曜日

運命とは犬にもそれぞれあることし

飼主に似て番犬が尻尾振る

庭荒し犬が背負うてことがすみ

昼を眠る犬に隙のない構え

遠吠えの犬が近づく嫌な予感

番犬に人権無視の鳴かれよう

悪人に飼われ走狗とののしられ

南海川柳会

広井すえお報

ヤング達ダウンジャケット右左

土地ブーム農家の夢はカラフルに

土地ブームなど無関係だと案山子

住吉の鳩には迷惑な月がくる

沿線に住んで住吉初詣

住吉踊りおそいテンポでよく揃い

暖かい正月ます住吉さんを喜ばせ

住吉さん初のみくじを引いてみる

住吉さん南海電車を儲けさす

住吉さん五の宮まではとおさいせん

除夜の鐘やむと住吉さんは混み

神々がごだましそなな住吉さん

川柳塔まつえ

恒松 叮紅報

思い切り呼べど還らぬ父の船

呼び捨てにされて新妻意識する

糸口を警察犬の鼻が当て

糸口をつかんだ所で糸が切れ

黒幕の近く糸口ぶつり切れ

志保

民子

秀穂

清泉

輝水

鈴江

歳栄

芳枝

はるみ

清夢

美栄

白汀

春蘭

いつ枝

さゆり

すえお

貞夫

綾珠

圭水

さよ

勝美

雅風

儀一

宏子

舞吉

孝

夢酔

巡歩

与根一

糸口を調停員がふとつかみ

トータルへ労使朱線を引き違う

人生のトータル悔いが多すぎた

男と女のトータルで平和国

二人三脚のステップに慣れ老夫婦

まだ切れぬ絆で夫婦共に老い

北風の吹く夜だから夫婦和す

一步あとさがり夫婦がつつ歩幅

外面は夫唱婦隨の夫婦が

子育てで終り夫婦の顔になる

妻と書き入れて幸知る旅の宿

茶碗ふたつおいて夫婦に時差がある

焦点をほかし芸術的写真

焦点の歩がずれ雪解けのない親子

登美也

紫吻

通児

叮紅

天痴人

寿美子

早和

早苗

芳枝

雪美

芳子

孤呂二

独仙

由郎

鳳人

鉄花人

正朗

ちかし

鶴丸

みぬる

愚童

緑之助

杜的報

紫代子

花代子

紫香

杜的

潮花

芳子

明代

水客

企みを美声で送る電話口

満願のおんな愛を説くへんろ宿

個性のない旅をつづけるハネムーン

税金へ国は豊かに民貧し

振りむけば一人で渡る橋である

孫の知恵というたくらみへ叱られず

画いて消し消してまた画く点と線

岸和田川柳会

家に居て妻の雑音苦の一つ

四国路の白衣に弘法大師住む

親権の決着つかず夜が白む

人間は悲しきものよ愛を持つ

色々のセールス二十歳の娘を攻める

故郷の無性に恋しい土手つくし

口答えこの辺までは許しとき

飼い犬も満足しては散歩道

世話をする約束させて飼う小鳥

披露宴父親の眼に光るもの

ひなまつり済めば鎧に変わり初夏

ひなまつりうれしそうです若い母

母と子の合作紙ひなにあるぬくみ

男の子はつかり母さんだけのひな

お行儀のよい子になったひなまつり

川柳後楽

縁談がビシヤリ娘の高望み

縁談へ反抗期の子いる悩み

縁談が事後承諾となる時世

縁談を聞けば遠縁らしい人

縁談を聞く母と娘の気が揃い

疎遠した仲良し今も変わらない

笛珠

和友

遊香

白李

美智子

白漢子

三求

武助報

民治郎

せつ子

幸代

射月芳

富志子

加仙

白光子

加代子

こう

世界人

浪速子

さよ子

武助

ひで

春栄

操子

井上柳五郎報

佐加恵

柳五郎

恒洋

博友

久米雄

桂風

仲良しが希望に燃える初春の酒
落書きに仲良しだから名を書かれ
世話人の顔が物言う奉加帳
奉加帳トップの額が気に入らず
氣前よい家から回す奉加帳
慕参りやんちや坊やも手を合わせ
慕参り慕前に詫びる事多し
ここで幼ならんでほろい
慕参り幼馴染とすれ違
ワンカッポと二人の差し向い
良縁と思えば相手をほめておき

南海川柳部

広井

季雄報

隆

クラクシオン鳴らして返る河内弁
いらいらが外まで分かるクラクシオン
クラクシオン駐車どししがもめている
家の前愛のサインのクラクシオン
脈搏のリズムを医者首がかしげ
生活のリズムを乱す孫が来る
逢いに行くリズムに靴のはき心地
千切りのリズム娘も一人前
若者に遅れてならぬリズム感
竹の子のリズムと服装まかり出る
あの人か心に生きたコンバクト
楽しみに待ったチヨコレート孫がくれ

城北川柳会

川口

弘生報

ゆきお

宏 大路
照 元
幽 谷
哲 郎
青 銅
秋 月
玉 水
草 風
定 平
隆
勝 美
主 水
春 蘭
さ よ
儀 一
綾 珠
宏 子
千 子
柳 伸
す 小
雅 風
東 雲
弘 生
ゆ き
美 恵
好 恵
テ ル
公 一
千 子

貴方には言ってませんと妻の意地
ニセ札を造ったやつが好きな女
目立たない輩が好きと言う女
男三人寄ったら何を話すのか
温い日が一日あって隙が出る
ジョーカーのように偽札つかまされ
天皇のお緞で土も生き返り
遠く来て地平へ続く土に立つ
中国孤児母なる国の土を踏む
土つけて夕陽の庭へ父帰る
粘土から孫が童話を作り出す
そよ風が新芽に聞かす春の唄
女の園朱唇の微風が蜂になる
決算の黒へ社長顔の微風

川柳大阪

西岡

洛醉報

三十四

サラララップに包んだ夢が乾いてた
ピエロの内心も知らず皆笑い
逃げ道を残して叱る思いやり
春ですと丸めた背へ芽がのぞく
昼読んだポルノが夢で踊り出す
大工事すれば遺蹟と不発弾
その時は笑って死んでこましたろ
片道キップで背水の陣をしく
酔った酔った本音へ近づけず
背伸びする爪先だんね疲れて来
年金法ばばち鱗が取れ始め
乗り換への利かぬ定期を男持つ
墜落のニュース昨日の火事を消す
消しゴムをいつも放さぬ二枚舌
仁王にも靴はかせたい寒い朝
地すべりをしたらあきらめつく老舗

吉岡美房氏から亡妻お供養として
金一封寄せられました。
ありがとうございました。

川柳塔社

地すべりで勝って自分を見失い
落第も棄ゴールはまだ遠い
一度位泣かして来いと男親
川柳わかやま
堀端
三男報
凡九郎
信子
英子
武雄
幸
千寿子
天彦
双木
稚代
紀久子
裕美
三千代
善太
緑楼
光代
三男
勇太
佐代子
規不風

煙霧で女の業のまま生きる
炎えるよな老いの絵筆に温まり
意外にも明るい声の不合格
対決の気分へお茶を替えてみる
愛憎へ意外な私さけ出す
しぶちんの割に名刺は上等で
肩よせた温みお互い過去にする
八人目の敵は意外に妻だった
温もりがほしくダイヤル回してる
議事堂の回り煙霧立ちこめる
罵かけた妻を意外に憎めない
肩たたく拳の温さでほぐされる
意外にも長持ちしては借りておく
嫁ぐ日の父の温みは借りておく
さりげなく余白に埋めた温い文字
煙霧を張りすぎ自己も見失う
温室に育ち風にはすぐ折れ
煙霧を破るきつかけじっと待つ
溜息がおんなの武器だったとは意外

何気ない仕草が意外母に似る

雷が恐い社長の太っ腹

紙人形温い涙を知っている

温かい人の寝顔の眼のくぼみ

謎をとく意外な言葉溜めている

煙幕の向うの秘策におよび腰

意思表示く一手王様也死する

起き抜けの眼にとび込んだ春の雪

失敗するとき泣きか来い俺が居る

倅せな少女ひそかに死を想う

川柳たけはら

森井

薔居報

ランドセルかわいゆめをつくらうよ六歳方 昭

かあさんの作った天井したつづみ 小二重貴子 昭

雪の花さかせたガラス冬の詩 小四仁 昭

妹の熱が気になる三校時 小六希世子 昭

そろばんが出来て会計まかせられ 小六 紀

私立合格さて本番へそなえよう 中三 愛

ローストの今燃ゆる牡丹雪 静水

寒椿ひとのおきゆる牡丹雪 房子

棺の釘むこうは上棟式の釘 不朽

スランプへみなみつけぬコップ酒 節夫

父は山で這い這いの子が攻めてくる 蘭幸

湯あがりの子を拭く幸にふと気づき 比呂子

売れ残りの花いとおしく買ってくる 純舟

男坂磁石はいつも北を指す 菁居

宿題の隣りで川柳考える 秀水

人間の弱き地鎮祭の暦くる 一路

絶対に売らぬつもの主義一つ シゲヨ

老いらくを祝福されて少し照れ 令子

針の穴覗けば見える祖母の国
早春の街角淡き夢拾う

にた川柳会

西村

音が似ているからまとも騙されて

誘い出す春にひかれて遠回り

敵味方啞然原辰ホームラン

おおかたの事は察して母がくる

峠一つ越えれば違う国訛り

天草を春一番が手土産に

ぐちは言うまい夫もつらからう

合鍵が時勢となつた玉手箱

医者嫌い口一文字に灸を据え

花を恋う蝶にも花の好き嫌い

転がった銀貨を追えば穴が待つ

盃を押し戴いてますい酒

春の風女の嘘を乗せて来る

日本一たづなをしめる牛の村

封をしておこう初恋物語り

残されて勢いっぽい嫁仕度

ほどほどで折れる笑顔を円くみる

案外な無口な男にある手腕

這うて来る力泣きせそにかわる

菜の花句会

高杉

集金は出来ず桜もあきらめる

面白い店番の居る新世界

桜には来いと便りはしたけれど

筆メネな男絵ハガキだんと買い

出マエの駅には味方だけでない

風船を脹らす前の深呼吸

天王寺居眠りしてる経木書き
駅裏の美人の飲屋灯り消し

白狐
こうじ

早苗報

正朗

芳子

独仙

登美也

亀甲

巡歩

きみえ

多賀子

花子

栄

夢酔

幸一

メ女

三和

四希

寿美子

雄々

弘朗

早苗

鬼遊報

健司

みつる

与呂志

柳宏子

茂雄

時野

不二夫
万里

天満宮お札参りにまだこない
駅前赤提灯で停車する

天王寺善男善女で埋めつくし

合格をしない絵馬にもさくら咲く

ハネムーンの絵葉書なにも書いてない

いにしえを今に住吉田植唄

母見送りて駅のラッシュが気にかかり

さくら咲く尼の読経に変わらなし

男から逃げるチャンスの針もどす

花見酒の乱れを覗いている桜

脱サラをささやきかける道具屋町

果物の皮はハガキの上に垂れ

挑戦状のように税務署のハガキ

富田林富柳会

板尾

嶺する女へ男振り向かぬ

適齢期過ぎて噂の人となり

儲けてる噂へ手みやげ提げて行き

やせ過ぎへ少女を食べて期待する

校庭の隅で少女になつていく

素うどの客には黙つてつりを出す

たんぼぼがとんで少女の庭である

庭の石過去の歴史を知っている

電柱はこわい噂を聞いている

徐に眼鏡をはずしうどん食べ

ふるりの手打うどんは母の味

胃薬へうどん一番食べやし

連れがあり今日は天ぷらうどん食べ

下馬評を聞けば窓口悪く言う

存在感あるから噂する
大安日噂通りの花が咲く
貧乏な庭の宛に水がない

蕉露

鬼遊

道子

雅風

シマ子

酔々

弥生

幸生

頂留子

栗

雀踊子

岳人報

澄子

美津子

喜酔

花子

伸梢

浜っ子

美代

庄太郎

美佐子

明男

きぬ

為之助

柳太

泰子

栄一郎

岳人

● 募 集 ●

七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔(10句)若本 多久志 選
 水煙抄(10句)黒川 紫香 選
 愛染帖(3句)橘 高 薫風 選
 課題吟(各題5句以内)
 「新 聞」 林 露 杖 選
 「ひと言」 松 原 寿 子 選
 「乗り気」 文 川 一 念 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔(10句)若本 多久志 選
 水煙抄(10句)黒川 紫香 選
 愛染帖(3句)橘 高 薫風 選
 課題吟(各題5句以内)
 「悪 妻」 傍 島 静 馬 選
 「打水」 吉 田 笑 女 選
 「やり手」 増 田 次 章 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。★用紙はなるべく柳箋をご利用ください。

5月の常任理事会は1日(土)

〒545

発行所 川柳塔社

電話 (06)616914番

振替口座大阪・三三三六八番

大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

印刷所 藤原童心社

編集兼 中島蓬太郎

発行人 藤原童心社

定価 五百円(送料55円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

昭和五十七年四月二十五日印刷
 昭和五十七年五月一日発行

塩満敏「夫婦酒」出版記念5月会

日時 五月七日(金) 午後六時
 会場 金属会館
 南区鰻谷東之町10番地
 地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
 電話 271・3935番

兼題 「夫婦酒」
 「強 い」
 「兜」
 「軽 口」

阿 萬 萬 的
 塩 満 敏 選
 西 岡 洛 醉 選
 児 島 与 呂 志 選
 大 坂 形 水 選

席題 二題 当日発表
 会費 五百円

各題三句以内厳守

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

6月の兼題 「幸先い」「風」
 「先 生」「出 会 い」

本社6月句会は7日(月)



昭和四十二年一月九日第三種郵便物認可
昭和五十七年五月十五日発行（毎月一日発行）
別冊大正十三年通巻六六〇号

姉妹品大和錦印



警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社
大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電話(779)1690~2番

つめたさに、おいしさをそえて……

アイスクャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイ



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドージマ店
近鉄(アベノ・上六・奈良・東大阪・京都各店)
サン・ストア(中之島・淀屋橋各店)
京阪モール 新川売店 虹のまち鹿鳴
南海難波駅構内店



大阪・なんば



TEL (641) 0551